

2021 年度日本語教育センター活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2021)

目次

1. 各科目についての報告.....	2
2. 2021年度 Placement Test実施報告.....	118
3. 2021年度日本語相談室実施報告.....	127
4. 2021年度立教大学漢字検定試験実施報告.....	127
5. 2021年度日本語自主学習用図書貸し出し実施報告.....	128
6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告.....	129
7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告.....	130
8. 日本語教育センターニュースレター発行報告.....	130
9. 短期日本語プログラム報告	131
10. 新型コロナウイルス対応まとめ.....	139
11. その他の活動.....	140
12. センター員活動報告.....	140
13. 2021年度FD記録.....	148

2021年度日本語教育センター運営体制

2021年度日本語教育センター会議開催記録

1. 各科目についての報告

2021 年度 J0 授業記録

コース概要

J0 は、日本語の学習経験がなく、帰国後、継続して日本語を学習する予定がないものを対象としたサバイバル日本語のコースである。

担当者名：＜春学期＞金庭久美子、鹿目葉子、神元愛美子

＜秋学期＞長谷川孝子、小松満帆、武田聡子

授業コマ数：週 3 コマ

履修者数：春学期 1 名、 秋学期 5 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日常生活に必要なサバイバル的日本語表現や語彙を身につける。また、ひらがな・カタカナの読み書きも身につける。

授業の方法

J0 では、日常生活でよく出会う場面や、大学生活を送る上で必要となりそうな機能を取り上げ、そこで使用される表現や語彙を学習した。

毎回の授業では、まず、ひらがな・カタカナを 10 字ずつ学習した。かなの練習が終わると、その日に学習する場면을提示し、必要な語彙を導入した。そして、重要な文型や表現をキーセンテンスとして学習し、口頭練習を行った。最後に、その日の場面の全体の会話練習や、タスクを行った。J0 で選定した場面・機能とそれぞれのキーセンテンスは以下の通りである。

場面	キーセンテンス
挨拶 自己紹介	おはようございます、こんにちは、こんばんは、ありがとうございます はじめまして/（私は）～です/～人です/専門は～です/どうぞよろしく/～ さんは～ですか？/はい、いいえ/～さんは？/お仕事は？/お住まいは？/お 国は？/N が好きです、好きじゃありません
場所を尋ねる	この辺に～、ありますか/～はどこですか/～に行きたいんですが…
買い物	～ありますか/いくらですか/～円です/～ください

レストラン	～、お願いします/N で
許可を得る	N でいいですか/V てもいいですか
依頼する	V てください
予定・行動について話す	～に行きます/行きましょう/V ます・ました/何をしますか・何をしましたか/V たいです
感想を言う	～はどうですか・どうでしたか/形容詞・形容詞の過去形

上記の内容以外に、数回の授業が終わるごとに、「Activity」の時間を設け、日本人学生をボランティアとして教室活動に参加してもらい、それまで学習した内容の復習と応用練習を行った。また、習字や暑中見舞い・年賀状を書くなどの日本文化を体験する時間も設けた。

学期の最後には、このコースで学習した文型や語彙を用いたスピーチを行った。

2021 年度春学期はミックス型、対面、オンラインのように、授業形態が学期の途中で変更された。教材はすべてオンラインで配信した。また、Blackboard に自習用のクイズ（ひらがな、カタカナ、文法、語彙）を用意した。履修者が 1 名だったため、日本人との交流の場を設けることにし、日本人学生のボランティアとの活動を計 5 回実施した。

2021 年度秋学期はオンラインでスタートし、途中ミックス型が可能になったが、実際にミックス型に移行したのは 12 月中旬からであった。オンラインの参加が多いこともあり、春学期同様日本人学生のボランティアの活動を 5 回取り入れ、実施した。ボランティアの学生はオンラインまたは対面での参加となった。

結果と課題

<春学期>

1 名のみの参加であったが、最後まで精力的に取り組んだ。非常にやる気のある、前向きな学生であったので、学生のレベルとニーズに合わせて授業を進めることができた。余裕があったので教科書だけでなく会話の時間を設けることができ、アウトプットする機会が多かったのがよかったと思われる。また、授業外でもできるだけ日本語を使用しようと努力しており、例えば連絡のやり取りのメールでは日本語の使用が増えていった。ボランティアの日本人学生との活動が 5 回あったが、活動に参加した日本人学生達も積極的に交流してくれたので、学生にとって有意義な時間を持つことができた。最終スピーチとその質疑応答はすばらしかった。ボランティアの日本人学生の質問にこれまで習ったことを駆使して日本語で答えることができた。

課題としては、ミックス型授業の方法である。ミックス型で授業を開始した際、オンラインでの履修希望者がいた。その学生は最終的に履修しないことになったが、教室からの音声が聞こえづらかったり、教室にいる学生とのやりとりが十分にできなかったりということもあった。履修キャンセルの理由が環境によるものかどうかは不明であるが、今後ミックス型で授業を行う場合は、念入りの計画のもとに授業環境を整え、運営する必要がある。

オンライン授業でも学生が手書きで書いたものに対しその場で添削するのに苦労したが、ミックス型になると、教室とオンラインで同時にフィードバックすることになる。対面の学生、オンラインの学生の区別なく、参加する全学生が問題なく授業を受けられる環境づくりを考える必要がある。

<秋学期>

非常に穏やかかつ協力的なクラスで、1 学期を通して、とてもよい雰囲気を進めることができた。

来日がかなわなかった学生も複数名いたが、意欲を削がれることなく、最後まで前向きに課題に取り組んでおり、とても好感の持てるクラスだった。会話の際には、会話がインタラクティブになるように、リアクションや聞き返しなどを指導したが、ボランティアとの会話でそれを効果的に使用している様子が窺えた。

今後の課題は2点ある。1つめの課題は文字の指導方法である。文字の指導の際には、黒板や Zoom のホワイトボードで例を示しながら進めていった。様々な工夫をすることで、対面時と同様に、きちんと文字を身につけさせることはできたが、対面授業のときより字形の間違いを指摘することは難しく、もどかしく感じるが多々あった。より効果的な方法を考えてみたい。2つめの課題は学んだ表現を維持することである。会話で学んだ表現を次の授業では忘れてしまうことも多かったので、フレーズをさらに絞って継続的に教えることが必要だと思われる。

2021 年度 J1 授業記録

コース概要

J1 は、日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週 5 日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：<春学期>開講せず

<秋学期>数野恵理（文法 1）、開めぐみ（文法 2）、東平福美（聴解会話）、
高嶋幸太（読解・作文）、任ジェヒ（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解会話、読解・作文、総合スキル）

履修者数：春学期 開講せず 秋学期 2 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生

活の基本的な活動で日本語が使えるようにすることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ標記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法 1：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

文法 2：文法 1 で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

聴解・会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400～600 字程度の作文を書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J1 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
プレレッスン	• Exchanging greetings • Learning some survival expressions • Learning the writing system of Japanese language • Learning basic numbers • Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence) • Learning basic words(Date、 Time expressions)
1	• Noun sentence ～は～です • Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど • Noun modification(kinking nouns) ～の • Particle “also、 too” ～も • Particle(question marker) ～か • Interrogatives なに・だれ・どこ • Pronominal “one” ～の • ”please give me ---“ ～をください • Counterword ① ～円、個、才、ひとつ • Sentence ending particles ～よ、ね
2	• Polite speech and casual speech • い／な Adjectives as predicate ～は Adj.です。 • Use 2 or 3 adjectives to describe topic - て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも

	・ い／な Adjectives as noun modifiers ・ Interrogatives どんな、どう
3	・ Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj.です。 ・ Adverbs indicating ‘degree’ ・ Explaining reasons ので、から
4	・ Verb groups、 dictionary form of verbs ・ Polite and casual verb sentences ・ Particle を(Object marker) ・ ～は～を V sentences ・ Particle で(Location marker) ・ Particle で(Instrument marker) ・ Particle に／で(Destination/direction marker) ・ Mimetic words ① Eating、 drinking
5	・ Giving and receiving something ① ・ ～は Space/area/pass を V(motion verbs) ・ て form of verbs ・ Making requests ～てください／～ないてください ・ の : Noun equivalent marker ・ V て、V て、V。 ・ Asking permission/Giving permission/prohibition ～でもいい／～てはいけない ・ Mimetic words ② Watching、 seeing、 speaking
6	・ ～は Object に V sentence ・ Topic は V(Intransitive verbs) ・ Particle に(Time marker) ・ ～から～まで ・ Duration on time ～間 ・ Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい ・ Time expressions まえに、あとで、これから ・ ～と思う ・ ～だろう／だろうと思う ・ Mimetic words ③ Condition of the body
7	・ Sentence of existence and locatives いる、ある ・ Counter word ② ～人、枚、冊、本、匹、階 ・ だけ／しか

	・ N1 か N2(or)／N1 も N2 も(both、 neither) ・ N1 は A、 N2 は B(Contrast は) ・ Noun と／や、 Noun/adjective/verb て form、 V-たり V-たり Adjective/verb し ・ ～かもしれない
8	・ V-ている(Continuous action、 state) ・ Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する ・ が used to describe a condition、 scene before one's eyes ・ ～中(during、 while、 through) ・ もう／まだ ・ ～ませんか、～ましょう ・ Questions word + か／も ・ ～んです ①
9	・ Giving advice ～たほうがいい ・ Particle に(amount of frequency per time unit) ・ Adverbial usage of adjectives ・ Noun になる ・ Conditional ①：と ・ Chang of state、 condition(adjective + なる) ・ Mimetic words ④ Pain
10	・ に(final destination)／を(point of departure) ・ V-たことがある(experience) ・ Adjectives indicating one's own emotion/feeling/desire/pain ・ Third person's emotion/feeling/pain/desire ・ Conditional ②：たら ・ Even if ～ても

授業の方法

J1 は週 5 日のコースであり、文法 1、聴解・会話、文法 2、総合タスク、読解・作文の順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

文法 2：文法 1 で習った語彙や文型について、書き練習を中心とした活動を行った。

聴解・会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常

生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

＜春学期＞開講せず

＜秋学期＞

文法 1：2 名とも日本語の初級文法の学習歴がある学生で、学期前半の文法項目は既習であった。そこで、各課の文法と語彙の正確な運用と会話場面での応用を目指した。また、正確に書けるよう、授業の最後には、その日に学習した内容を手書きまたはタイピングで練習する時間もあった。2 名とも渡日できていないため学期を通してオンライン受講となり、1 名は時差のために夜中に受講していたが、毎回出席し、最後まで熱心に学び、運用力もついた。海外からの受講のため、授業外で日本人と話す機会が作れないのが残念であったが、渡日後は日常生活でも日本語を使ってもらいたい。

文法 2：遠隔参加の受講生二名は意欲的かつ積極的で、主体的に学習に取り組んでいることが実感できるクラスだった。一名は深夜の時間帯での受講となったが、二名とも出席率、提出物には問題がなかった。授業の初めに文法の宿題の提出、語彙クイズを行い、短文作成練習を中心に文法の定着を目指した。宿題のフィードバックも授業内で行った。基本的にその週の文法項目と語彙がよく理解できていたが、課を問わず、特に助詞と時制のエラーが多かった。問題点については Zoom のチャット機能を使って例文を示しつつ説明したが、画面が小さく見づらいこと、図示などができないなど、もどかしい点が多々あったにもかかわらず、学生は毎回熱心に聞きとり理解しようとしていた。二名に大きな力の差はなかったが、学期初めには一名が日本語でのタイプに慣れておらず時間がかかったが徐々に上達し、後半には問題なくタイプできるようになった。短文作成の練習は個人作業で単調になりがちだが、総じて真面目に取り組み、文法項目に限らず語彙や漢字などについても積極的に質問していた。作成した短文にも学生個人の個性が現れ、自分なりの工夫が見られた。

聴解・会話：今学期の学生はその日扱う文法項目を一通り予習して授業に参加しており、聴解会話も文法もテンが良く予定通りに教えやすかった。どの学生もわからないところは全て自発的に質問し、わからないままにできなかったため、毎週上達が目に見えて明らかだった。反省点としては、聴解試験で数詞の聞き取りなど基礎的な部分で点を落

としていたので、今後は聴解練習でも会話練習でも新出語彙はもう少し丁寧に扱うようにしたい。

読解・作文：読解では最初のころと比べ、読むスピードが速くなっていったことが成果として挙げられる。例えば、読解文を読んで問題に答えるという作業で、最初のことはやや時間がかかり、宿題となる部分が多かったのだが、後半になるにつれ、スムーズに読解をこなすことができていた様子だった。作文も同様で、当初は授業時間内に終わらないこともあったが、最後のほうになると、授業時間内で書き上げることもできていた。今後の課題であるが、オンラインという性質上、なかなか読解や作文を実施している際、どこまで進んでいるのが確認できないこともあったため、時折進捗状況を確認していけたらと考える。

総合スキル：今学期の受講生は、その週に扱う文法・文型に対する理解度が高いだけでなく、主体的な学習態度の重要性を非常によく理解している 2 名であった。そのため、文法・文型の復習や口頭練習だけでなく、スピーチ、Zoom を介した日本人学生との会話練習やインタビュー調査、プレゼンテーションなど、さまざまなタスクを行うことができた。さまざまな形で練習および復習を行ったことが表現力の向上につながったのではないと思われる。反省点としては、漢字圏と非漢字圏の学生における学習負担の違いを十分考慮していなかったことが挙げられる。漢字圏の学生のスピーチやプレゼンテーションでは、既習語彙以外の漢語の出現頻度が高く、非漢字圏の学生に対して英語で説明する必要がある場合があった。難しい表現に対しては、毎回、日本語（難しい場合は、英語）で補足をするよう指導していたが、非漢字圏の学生にとっては、心的負担が大きかったと思われる。今学期の受講生は、毎回、興味をもって漢字圏の学生の説明を聞いたり、積極的に質問をしたりしていたが、漢字圏・非漢字圏の学生両方に配慮した活動内容については、今後さらに工夫する必要がある。

2021 年度 J1S 授業記録

コース概要

J1S は、日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない、あるいは文法項目が既習であっても、運用能力が不足していると思われる学生を対象とした、初級のコースである。週 3 日という少ない授業時間の中で、既習の文法項目も含め、運用能力を高めることを目的としており、週 5 日の J1 コースよりも、ややレベル的に上の学生を対象としている。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：＜春学期＞鹿目葉子、森井あずさ、藤田恵

＜秋学期＞山内薫、森井あずさ、藤田恵

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

履修者数：春学期 1 名、秋学期 1 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるよう、運用能力を高めることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習し、4 技能を総合的に伸ばすことを目標とした。

文型リスト

J1S で扱った文法項目は J1 と同様であるので、省略する。

授業の方法

2021 年度の J1S は、週 3 コマを 14 週、計 42 コマで行った。1 課～10 課まで、各課を 3～4 コマで学習するというペースで進め、文法を 2～3 コマ、読解と作文を隔週で 1 コマずつとした。また、一部の課では、読解と作文を 1 コマで行った。

文法、聴解・会話：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400～600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<春学期>

春学期は、履修者 1 名であり、オンライン受講の学生であった。日本語を学びたいという意欲のある学生で、クラスは学生のレベルに合わせて丁寧な指導をすることができた。熱心に勉強し、学期中に日本語力の伸びが見られたが、一方で、学期末までスムーズに読めないカタカナがあったり、語彙が限られていたりという課題も残った。今回の履修者は 1 名で学ぶことを好ましいと考える学生のようなだったが、クラスメイトからの刺激があると、活動の幅が広がったり、自身の学習の遅れに気づいたりといった面が期待できたと思われる。

<秋学期>

秋学期の履修者も 1 名であり、対面受講の学生であった。教員とのやりとりで、常に活気

のある雰囲気に進めることができ、履修者は疑問を抱いた際に積極的に質問し、日本語学習に対し、大変前向きな姿勢がみられた。日本語への興味や外国語を学ぶ素養があるため、自分なりのやり方で理解し、着実に力をつけていったと思う。一方で、授業外で気になる点についての対応に時間を要することも多く、スムーズに授業に移行するのが少し難しいところがあった。また、J1Sのターゲットとなる項目が消化できないことがあり、特に助詞と活用は、学期末まで課題が残った。

2021 年度 J2 授業記録

コース概要

J2 は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙 500）を身につけているものを対象とする。週 5 日、毎日スキル別（文法 1、文法 2、聴解会話、読解作文、総合スキル）に授業が展開されているが、基本的には文法 1 で習う文法項目、語彙、表現を軸に他のスキルは展開されている。

担当者名：＜春学期＞富倉教子（文法 1）、開めぐみ（文法 2）、森井あずさ（聴解会話）、
数野恵理（読解作文）、神元愛美子（総合スキル）
＜秋学期＞鹿目葉子（文法 1）、開めぐみ（文法 2）、森井あずさ（聴解会話）、
数野恵理（読解作文）、神元愛美子（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解会話、読解作文、総合スキル） 履修者数：春学期 1 名、秋学期 1 名 使用教材：独自教材
--

コースの目標

接続詞や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすることである。語彙数については 1000 を目標に増やす。

文法 1：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを日常生活の中で使えるようになることが目標である。初級文法の理解と口頭練習を行うことにより、アカデミック場面、日常生活場面で簡単な日本語によるコミュニケーションができるようになることを目指す。

文法 2：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを組み合わせることで基本的な複文が正確に作れるようになることを目標とする。初級文法を使った短い文を作成することで、語彙の活用、接続、助詞等の定着を目指す。

聴解会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになることが目標である。日本語を数多く聞いたり、話したりすることにより、アカデミック場面、

日常生活場面での簡単なコミュニケーションができるようになることを目指す。

読解作文：文法 2 で習った文型や語彙を使って、簡単な作文が書けるようになること、及び、簡単な日本語の文章が読めるようになることを目標とする。

総合スキル：文法 2 で習った文型や語彙を正確に運用できるようになることと、未習の語彙や文型があっても対応が出来るスキルを身につけることを目標とする。また、実際のコミュニケーション場面で必要とされる瞬発力を身につけ、コミュニケーション能力を高めることを目指す。

文型リスト

J2 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ～ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention : I intend to ～ ～つもりだ 4. ～んです② 5. Mimetic words ⑤ Laughing、Crying、Anger
2	1. Can; indicating one's ability ～ことができる・可能形 2. Verb/Adjective すぎる : Overdo～/Too～ 3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「～て」 4. Anything、Anyone、Anytime、Anywhere、Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 5. Particle で: indicating required cost、required time 値段・時間内の「で」 6. のに: Although、Even though *Review のに、が／けど、ても 7. Mimetic words ⑥ Feelings
3	1. V-方 How to V 2. V ながら V : Doing two things simultaneously 3. Have something with/on、possession、own ～がある 4. Obligation: Must / Have to ～なくてはいけない／なくてはならない 5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ～ ～なくてもいい 6. By (time) : までに / Until (time) まで 7. Mimetic words ⑦ Weather
4	1. When～: ～とき～ 2. Noun が要る・役に立つ 3. Comparative constructions 比較 A は B より・A のほうが・A ほど・～の

	なかで一番 4. Adverbs often used in a daily conversation せっかく ちゃんと 一応
5	1. Try doing something and see: ~てみる 2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる 3. Noun modifiers 名詞修飾 4. Mimetic words ⑧ Nature
6	1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞 2. V て ある 3. Intransitive V ている vs Transitive V である 4. Mimetic words⑨ : Sleeping 5. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける
7	1. V て おく 2. ~が V みえる・きこえる・する 3. Giving and Receiving (favors, some acts) ~てあげる・もらう・くれる 4. Want someone to do some action: V てほしい・もらいたい・いただきたい 5. ~が・けど (けれども) 6. Imitative words : Caught a Cold ?
8	1. あいだ VS あいだに 2. Purpose in coming and going ~に行く・来る・帰る 3. い-adjectives derived from verbs Vにくい/Vやすい 4. Expressing Purpose: ために・ように 5. Review: Various expressions for purpose 6. Compound Verbs ② Vあう・Vかける
9	1. 伝聞 Hearsay, Conveying information getting from another person, media ~そうだ・ということだ・とのことだ 2. V てしまう 3. Review: V ている、V である、V てみる、V おく、V てしまう 4. [Question words] か / ~かどうか 5. V1 ないで V2 without doing V1, do V2 6. Imitative words : Hitting, Breaking 7. Compound Verbs ③ Vなおす・Vかえす
10	1. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess, Conjecture ① そうだ 2. Decisions: ~ことにする・~ことになる 3. Rules: ~ことにしている / Customs: ~ことになっている 4. 比喩の表現 Expressing Resemblance, Figurative expressions ~よ

	うだ・ みただ	
5.	V-て	いく・くる do V and come/go
6.	Imitative words : Animals、 Birds	

授業の方法

読解作文（月）、文法 1（火）、聴解会話（水）、文法 2（木）、総合タスク（金）の順番に授業が行われた。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした口頭練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を暗記しているかどうかを確認する「語彙クイズ I」を行った。また、新出語彙の理解度を確認するために「語彙シート I」を宿題にした。

文法 2：文法のテキストに沿いながら、短作文を書く練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を正しく活用、運用できるかどうかを確認する「語彙クイズ 2」を行った。また、新出文法の理解度を確認するために「文法シート」を宿題にした。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目を、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。また、毎回、各課の代表的な文型を使った文章のディクテーションを実施した。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。また、新出語彙の運用の正確さを確認するために「語彙シート II」を宿題にした。

読解作文：読解では、様々なジャンルの文章を読んでから、そのトピックについて簡単なディスカッションを行った。さらに、授業で扱ったものとは違うジャンルの読み物を宿題にした。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、600～800 字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：既習文法、語彙を使って四技能を総合的に使用するタスク、ロール・プレイ、スピーチ等を行った。また、日本人学生にボランティアとして参加してもらい復習と応用練習を行った。毎回授業のはじめには、新出文法を理解しているかどうかを確認する「文法クイズ」を行った。

結果と課題

<春学期>

文法 1：今学期は学生が一名であったこと、また学期中に学生が途中から来日したり、授業形態も何度か変更したりと動きがあった中で、授業自体はほぼ影響なく、通常通り進められたことは何より良かったと感じている。授業の内容も学生のペースに合わせながら行いつつ、一方で通常カバー仕切れない内容も比較的触れることができたよ

うに思う。また教師との会話が多くなり、教科書の内容だけでなく、実践の場面で日本語を使用する機会が増えたこと、そしてより自然に近い環境の中で新しい文型を使用し、練習できたことは言語習得に良い影響を及ぼしていたのではないかと考える。

課題としては、通常新出文型は的を絞り、簡潔、明瞭を目指して提示、練習を行っておりますが、学習者の理解度を測る上で、学習者のアウトプットにもう少し時間を割くことができたかと思っている。同時に状況と時間が許す限り、個々の文型をもう少し丁寧に扱えるよう合わせて調整して行きたいと思う。

文法 2：週前半で学習した文型と語彙を使って書き練習を中心に活動を行った。まず、ウォームアップとして、その課で導入した文型を使って質問し合う練習をした。学期初めは、事前に用意した質問を Zoom で共有して質問する形をとったが、学期後半には文字情報に頼らず質問し合うようにし、学生の自主的な作問を促した。回を追うごとに、発話量が増え定着のための良い練習となっただけでなく、学生の発話の内容からその課の文型理解度が確認でき次に行う文型復習のポイントを絞り込むことができた。毎回の授業の流れは、ウォームアップ Q&A、導入文型の復習、課の文型と語彙を用いた短文作成練習、文型宿題の FB とし、宿題の FB 後、質問に対応し必要に応じ口頭で短文作成練習を追加した。受講生 1 名であったため、学生の理解度を把握したうえで要点を過不足なく説明でき、定着のための練習時間を十分に確保することができた。受講生 1 名は学生意欲が高く毎回積極的にタスクに取り組んだが、短文作成練習の間に短いフリートークをはさんだり、書き作業中はカメラオフを認めるなど、連日教師と 1 対 1 で授業を受けることによるオンライン疲弊を生まないよう心掛けた。

今学期は受講生 1 名と異例のクラスとなったが、学習者の理解度・運用力の程度に応じたよりきめ細かい指導ができた点は良かった。今後の課題としては、オンライン授業におけるより活発な学習者参加を促す授業構成を考えることと、文法宿題の FB に工夫を凝らしエラー修正だけでなく正確な産出につなげることである。

聴解会話：オンラインで一人のクラスだったので、学生のニーズに合わせてやすく、効率的に授業ができたので結果的に上達にもつながったように思う。最初は日本語で会話をすることに慣れていないようだったので、とにかくたくさん日本語で発話させたり、英語になってしまうところは学生の理解できる日本語に直して、再度発話してもらったりした。リスニングも、学生のニーズに合ったものを使用することができたのでよかったと思う。

母語の干渉がまだあり、文法的にも少し弱いところが残っているものの、この半年間でかなり集中的に学び、上達し、自然な日本語に接する機会も増えたと思うので、さらに自然な日本語に近づけるように今後も努力して行ってみたいと思う。

読解作文：履修者 1 名ということで、通常学期よりもゆとりがあったため、読解・作文以外の復習をしたり、その日のテーマや日常生活について話をしたりしながら授業を進め

た。

通常、宿題で書いてきた作文は翌週フィードバックしているが、今学期は履修者が1名だったため、その場で作文を読んでもらい、フィードバックを返却して書き直しをさせることができた。文法の誤りなどはあるものの、しっかりとした構成で書くことができた。また、クラスで学習した文法項目を積極的に使おうとする姿勢も見られた。今学期はタイプ入力ができる漢字圏の学生だったため、作文をすべてタイプして書いたが、特に非漢字圏の学生の場合には漢字を書く練習も必要なので、オンライン授業であっても初級では手書きの作文も取り入れるといいだろう。

総合スキル：このクラスは日本語の運用能力の向上を目標とし、既習項目を使用した4技能を使用したタスク、ロールプレイ、スピーチ、日本人学生と話す活動、日本人学生へのインタビュー活動を実施した。学生1名のオンラインクラスだったので、必要に応じて柔軟に対応できたのが今学期の利点である。学生の要望で文法の復習やリスニングを実施、ロールプレイを役所窓口のやり取りに変更する等、学生のレベルとニーズに応じて活動を変更した。その結果、学生の苦手を克服することができた。J1では英語使用が多かった学生だが、徐々に日本語の発話が増え、学生本人も日本語で話せるようになったと実感していた。

課題はインタラクションが限定されたことである。履修者1名の完全オンラインクラスであれば、短時間でも日本人学生と交流する回数を増す等対応を考えたい。

<秋学期>

文法1： オンライン授業であり、かつ1名での受講にもかかわらず、学生は積極的に授業に参加していた。その日に学習する内容は全てその日のうちに理解しようと努め、わからないことがあれば、納得するまで質問し、学習したらすぐに使おうとする姿勢から、学生の真面目さが窺えた。

課題としては、学生がより理解しやすいように学習項目の提示順を考えること、区別のしにくい文法項目の違いを分かりやすく説明するための方法を考えること、楽しく文法が学べるような自作問題を考えることである。

上述の課題を解決することで、授業内で学生の能力をさらに引き出していけるような授業構築を試みたい。

文法2： 今期の受講生は海外からの遠隔参加1名のみであった。学期を通して高い学習意欲と積極的な学習姿勢を維持し、出席率、宿題の提出にも全く問題がなかった。授業では週前半で導入した文型と語彙を使って書き練習を通して定着を図る活動をおこなった。書く作業を中心に据えた授業ではあったが、学生の理解を優先し、毎回質問に応じてその週の導入文法の復習・練習も適宜行った。週5日連続の教師との1対1の授業による精神的疲労を考慮し、授業中は学生の様子を見ながら、書く作業、質問対応、文法的・文化的関連事項についての簡単な雑談などを交え、学生の心理的負担

を軽減するように心掛けた。母国ですでに初級文法をある程度学習していたため、コース前半は余裕があり課題を短時間で仕上げ会話練習をおこなうこともあった。しかし、コース後半になり学習済みの文法事項が増えてくると、既習文法と新規学習項目との混乱が見られ、質問が相次いだ。学習した内容について、学生自ら理解が足りないと感じている場合は、自主的に復習、追加練習のリクエストをするなど、毎回主体的に取り組んだ。文法事項のポイントを把握することに長けており、応用力にも優れ短期間で会話力、文章作成力がバランスよく伸びた。今学期は受講生1名と少人数クラスの利点を活かし、学習者の理解度・運用力の程度に応じたよりきめ細かい指導ができたと思う。課題としては、文作練習課題のレベルアップである。今期の学生は通常より高いレベルでスタートしたため、課題を毎回作成し直すことになったが、課題の種類、語彙の調整等で改善すべき点が多々見つかった。今後はマルチレベルの学習者に対応できるよう、教材の質向上に努めたい。

聴解会話： 結果的に1名のクラスとなり、学生のニーズに合わせることで本人にとっても非常によかったのではないと思う。オンラインのクラスであったが、学期当初は会話もたどたどしく、タイプもできない、という状況だった。本人の努力により、タイプも飛躍的に上達し、同時に会話力も聴解力もどんどん伸びていったように思う。ひとつひとつのことをきちんと理解し、身につけていくことができたので、この1学期での成長は目覚ましいものがあった。これからも今学期学んだことを土台として、上達していったほしい。

読解作文： 履修者は渡日できていない学生1名だったため、学期を通してオンライン授業となった。作文は手書きでもタイプ入力でもよいことにしたが、タブレットで手書きのものを提出した。1対1なので、宿題の作文は添削したものを授業中にいっしょに確認して、その場で誤りを訂正したり、より適切な表現に言い換えたりさせることもできた。漢字圏の学生のため、自分で書いた漢字語彙が読めないこともあったが、書き直したものをクラスで音読させることで、読み方の確認ができてよかった。読解の時間も通常学期に扱う内容は短時間で終わられたので、本人の研究分野に関する図表を日本語で見てそれについて簡単な日本語で話すなど、学生のニーズに応じることができた。

総合スキル： 総合スキル：春学期と同様にタスク、ロールプレイ、スピーチ、日本人学生と話す活動、日本人学生へのインタビュー活動を通して4技能を向上させた。先学期同様に学生1名のオンラインクラスだったので、学生のレベルとニーズと興味に合わせた教材を用意した。また、学生の希望があれば予定を変更し文法の復習や作文等を行なった。先学期の教訓を活かし、日本人学生に参加してもらう回数を増やし、教員以外とのコミュニケーションの機会を増やした。一人で複数名を相手に話すことがほとんどで、意味の交渉をしなければいけない環境で力をつけていった。学生自身

が大変努力家で、授業外でもきちんと自習していたこともあり、一学期で日本語能力を伸ばすことができた。

今後の課題は授業環境に合わせた活動とリソースの活用である。オンライン授業、又はハイブリットだからことができること、またこの環境で培うべき力は何かを模索していきたい。

2021 年度 J2S 授業記録

コース概要

J2S は、J2 と同様に初級半ばの学生を対象としたコースである。但し、J2 が週 5 日で行う内容を週 3 日で進めるクラスのため、J2 よりは若干日本語能力が上のレベルの学生を対象としている。J2 のようにスキル別に授業が展開されるのではなく、文法項目を導入した日に口頭練習、短文作成、聴解会話といった四技能の練習もしていく。

担当者名：＜春学期＞鹿目葉子、藤田恵

＜秋学期＞山内薫、鹿目葉子、武田聡子

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

履修者数：春学期 2 名、秋学期 3 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるよう、運用能力を高めることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習し、4 技能を総合的に伸ばすことを目標とした。

授業の方法

2021 年度の J2S は、全てオンラインで行い、週 3 コマを 14 週、計 42 コマで行った。語彙リストの語彙やテキストの文法の予習を前提とし、授業では、それらを日常生活で使えるようにするための練習を行った。具体的には、1 課～10 課まで、各課を 3～4 コマで学習するというペースで進め、文法を 2～3 コマ、読解と作文を隔週で 1 コマずつとした。読解と作文は、隔週で行い、毎週、読解または作文を一課ずつ進めた。また、適宜、授業では扱わなかったジャンルの読み物を宿題とした。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

＜春学期＞

春学期は履修者が 2 名であり、対面受講の学生であった。2 名とも真面目に授業に参加し、目標達成に向かって、授業内外で日本語学習を進めることができる学生であった。この 2 名は、前の学期からクラスメイトであり、授業では助け合いや、クラスメイトの発話から学びを得る様子が多く見られた。課題としては、日本人学生との交流を挙げる。キャンパス内で日本人との交流の機会が少ないとのことであったため、日本語クラスの中で交流できる活動を組み込むべきであった。現在の社会状況においては、初級の留学生が日本人学生と交流する機会を自分で作ることは難しいことが考えられる。今後は、学生の様子を見ながら、留学生と日本人学生との交流の機会を授業の中でもっと持てるように、コースを運営していきたい。

<秋学期>

秋学期は履修者が 3 名であり、対面受講とオンライン受講の学生がいたため、ミックス型で授業を行った。オンライン受講の学生の中に、インターネット通信が安定しなかったり、時差のある中での受講に慣れなかったりする者がおり、対応が必要な場面が複数回あった。このような状況下で、意思疎通がうまく取れなかった時でも、日本語を学ぼうとする積極的な姿勢を見せてくれた。クラスの中のレベル差が、やや大きい編成となってしまう、そのレベル差が学期末までほぼ変化がなく、レベルが高めの学生には進度が緩やか過ぎ、また十分な練習量ではなかったのではないかということが気にかかった。このようなクラス編成は、今後も起こり得ると思われるため、その際の対応方法、授業運営について、考えていきたい。

2021 年度 J3 授業記録

コース概要

J3 は日本語の基礎を習得している者(1,00 語程度の語彙及び初級前半の文法等)、日常生活の基本的活動(買い物や依頼など)が日本語でできる者を対象とした初級後半のコースである。週 5 日授業が展開され、スキル別(文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル)に学習を行う。

担当者名：<春学期>小森由里（文法）、東平福美（聴解会話）、沢野美由紀（読解）、
長谷川孝子（作文）、武田聡子（総合スキル）
<秋学期>金庭久美子（文法）、東平福美（聴解会話）、数野恵理（読解）、
任ジェヒ（作文）、武田聡子（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル）

受講者数：春学期 2 名 秋学期 2 名

使用教材：独自教材

コースの目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

聴解・会話：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解：未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身につけること。

作文：文法で学習した文型や語彙を使って簡単な作文が書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J3 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	Sentence patterns you should know for this level
2	1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり 5. ～がえり 6. Review : Time Expressions 7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation
3	1. 条件 Conditional ③ ば 2. ～ずつ 3. V-ていく／くる Change 4. Change of one's behavior 5. Change of one's ability 6. Review : Expressions for talking about some change 7. Adverbs indicating various changes 8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は
4	1. 条件 Conditional ④ なら 2. V-ようと思う／V-ようにする 3. V-ようとしたができなかった、V-ようにしてもできない 4. Fraction 三十分の一、五十分の一

	5. Review : 条件 Conditional
5	1. 推量の表現 Expressing Speaker's Guesses、 Conjecture ④ はずだ 2. Review : Various expression for Speaker's Guess、 Conjecture 3. ～の多く 4. ～以外、以内、以上、以下 5. Compound Particles ① ～について、～にもとづいて 6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とくに
6	1. 受身 Passive Verbs 2. Direct Passive Sentences 直接受身 3. Indirect Passive Sentences 間接受身 4. 受身形 (Passive Sentences) and てもらう Sentence 5. Compound Particle ② ～によって 6. Sentence ending particles 終助詞
7	1. Giving an Instruction ～なさい・ないでください・てはいけない 2. Imperative form Command、 Prohibition 命令形、命令、禁止 3. Indirect Imperative : ～ように 言う／伝える／頼む 4. Review : Expression for Cause、 Reason 5. Compound Particle ③ ～のかわりに、～にくらべて
8	1. 使役 : Causative Sentences 2. Causative Verbs VS V-てもらう／くれる 3. ～のは～です (emphasizing)
9	1. 使役受身 Causative Passive Sentences 2. Causative V-てもらう／くれる／あげる 3. 使役受身 VS 使役-て もらう／くれる／あげる 4. ～ことに one's feeling、 emotion 5. Noun のこと VS Noun
10	1. Review : 受身、使役、使役受身、V-てもらう／くれる／あげる 使役-てもらう／くれる／あげる 2. Introduction to 敬語 (Honorific、 humble expressions)

授業の方法

J3 は週 5 日のコースであり、文法、聴解会話、読解、作文、総合スキルの順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 : 文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解・会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解：様々な長さやジャンルの文章を読み、自分の意見を述べ合う練習を行った。

作文：文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1200 字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

＜春学期＞

文法：履修生 2 名という小さいクラスであったが、2 名とも一度も欠席することなく真面目に受講し宿題もすべて期日を守って提出した。受講生のうち 1 名は J3 の文法項目のほとんどが既習だったが、もう 1 名は動詞の活用など日本語の正確さに問題があり、コースはじめは 2 名の日本語力にかなりの差が認められた。少人数であるため却って力の差が際立ち、クラス運営が難しく感じられることもあったが、後れを取っていた学生が、もう一方の学生に刺激を受け主体的に復習をし徐々に力をつけていった。コース後半には、既習項目が多いと侮っていた学生も、当初後れを取っていた学生に教えられることもあり逆に刺激されるようになった。文法のクラスは概して教師からの一方的な説明に終始しがちだが、2 名とも授業に集中して取り組み、積極的に質問をする活気のあるクラスになった。しかし、授業やメール連絡で促したものの、2 名とも予習をする習慣が身につかなかった。毎回複数の文法項目を導入するため、教科書に目を通してから受講していれば、もっと効率よく新しい文法項目が導入練習できたのではないかと残念に思われる。学生に授業外学習を動機付けしていくことを今後の課題としたい。

聴解・会話：今学期のクラスは皆来日している学生だったので対面で授業を行えた。また、皆過去に日本での生活経験があったため、日本の日常生活や文化に慣れ親しんだ学生であったことは授業をする上で教えやすく、会話も聴解もちょうど良いバランスで教えられたことはよかった。しかし、日常の会話や聴解のスキルアップに焦点を当ててしまい、日本語能力試験の聴解問題になるとその応用に対応できない学生もいたように思う。今後は常日頃から日本語能力試験の応用問題を扱って、日常会話と試験問題との違いなども明確にして、どちらにも対応できるように教えたい。

読解：受講生は 2 名とも、毎回意欲的に授業に取り組んでくれた。他のクラスでも一緒にグループワークを行っているとのことで仲も良く、いい雰囲気が進めることができた。このクラスでは、文法で学んだことを復習しながら、それを含む文を読んで内容を把握することに加え、正確に説明ができるようになることを目標とした。2 名とも、テ

キストを読んで、何が書かれているかということはわかっている、後半、文の構造が複雑になると、問いと答えがずれることもあった。また、答えはわかっている、適切な文が作れなかったり、説明になっていないことも多かったため、同じ答えでもさまざまなパターンで質問をして、答え方、説明の仕方を意識して考えてもらうようにした。時間はかかっていたが、正確さに気を付けて文を作ることは意識できるようになったと思われる。今後は、質問と答え方のバリエーションを受講生のレベルに応じて的確に示すことができるようにしたい。

作文：作文例の構成や接続詞、内容を参考にして、作文を書くことができた。受身、使役、使役受身、授受表現が集中している後半の授業でも、基礎ができている学習者だったので、問題なく授業を進めることができた。後半の作文テーマが難しかったようで、なかなかアイデアが浮かばなかったが、教科書以外に作文例をいくつか紹介し、最終的には、自分のトピックで作文を書くことができるようになった。この授業で勉強した構成や文型を正確に理解し、文章に取り入れていた。しかし、今回は作文の構想を練る活動を多く取り入れることができなかった。次回余裕があれば取り入れてみたい。

総合スキル：このクラスでは、総合的な日本語コミュニケーション活動ができるような授業を目指した。その週に学んだ文型や表現だけではなく、これまでに学んできたことを応用していくことができる活動を行った。今学期は 2 回、日本人ボランティアの学生にも参加してもらうことで、実践的な日本語を使用する場を実現させた。オンライン授業になってからは、なかなか日本人学生と会って交流することがかなわないため、この活動を通じて、知り合うきっかけにもなったようだ。また、会話活動に限らず、読解を通して総合スキルが身に着けられるように、楽しんで読める内容の読み物も用意した。その読解の中では、既習の文型が使われており、学んだ文法が意識付けられるように工夫した。スピーチは長めのものから **Show and Tell** を数回授業の最初の **Warming up** として取り入れることで、ある程度まとまりのある長さのスピーチができるようにした。今後の課題としては、既習文法と新しい語彙をいかに実践的に使えるようになるか、また正確さを身に着けてもらうためにどのように意識付けができるかが課題であると考えている。

<秋学期>

文法：秋学期は大学院生 1 名とオンラインの交換留学生 1 名の 2 名でスタートした。オンラインの交換留学生は 1 か月受講したが残念ながら家族の問題で続けることができなかった。大学院生は母国から深夜の参加にもかかわらず、文法クラスは一度も休まずに出席した。スケジュール管理がうまくできる学生だと思う。文法は最初のうちは「て形」や「可能形」などの動詞の活用が定着しておらず、それを自己訂正するのに時間がかかったが、後半の「受身形」「使役形」「使役の受身形」「敬語」などの規

則的な動詞の活用は時間をかけずに言えるようになった。中間テストまでは語彙が足りないことから習った文型を使って文を作ることができず苦戦したが、期末テストまでにそれは解消され、文型を理解して文が作れるようになった。最終的には J3 のレベルに達したと思う。自分で文を考えて作ることには問題はないが、この学生の課題は、絵を見て状況を判断して文を作ることであった。その絵について使うべき語を考えること、絵の描写をよく見て絵が意図することを考えて文型を選び、文を作ることが苦手だった。絵を使うことでさまざまな場面の練習が可能になるので、この学生に限らず絵を使った練習は必要だと思う。今後もそうした練習を取り入れていきたい。

聴解会話：今学期の授業はすべて遠隔で行った。時差があるが、現地から夜中に無遅刻・無欠席で授業に参加した学生はよく頑張ったとまずは評価したい。授業は学生の目的に合わせて、前日習った文法事項を会話練習を通じて復習してから聴解練習を行った。少人数だったこともあり、エラーをその都度訂正することができた点は良かったが、エラーの訂正に時間を割いてしまうあまり、授業後半の聴解の時間を十分に確保できなかった点は反省している。聴解と会話のバランスがとれた授業作りを心がけたい。

読解：今学期のクラスは、実質、大学院生 1 名のみの参加となったため、学生の学習スタイルに合わせて授業を進めることができた。すべての授業活動および課題に熱心に取り組む学生であり、能動的な学習態度の重要性を非常によく理解している学生であった。各回は、①宿題のフィードバックと関連する表現のフォロー、②新しい読解テーマの確認および目標設定、③本文読解、④新しい語彙や表現、読解スキルの確認、といった流れで行われた。ここで、読解スキルとは、接続詞を活用して話の流れを理解することや、前後の文脈を活用して非字義的意味を推測することなどを意味する。授業中に取り上げた読解スキルや授業中に説明が求められていた語彙、表現は、毎回、Word に記入し、配付した。その結果、学期末には、読解問題を解く過程において繰り返してみられたミスが少なくなり、期末テストの記述式問題でも良い成果を出していた。しかし、時差のある海外からのオンライン参加であり、さらに「読む」活動が中心となっていたため、集中力が維持できないといったトラブルが時々起こった。トラブル解決の方法として、読解テーマに関連する動画を視聴して話し合ったりする活動などを入れ、学生の学習意欲を維持させることができた。しかし、このような取り組みを学期後半から行ったことは、今学期の反省点である。オンライン参加の学生の学習意欲を高めるだけでなく、維持させるための教師の役割については、今後、引き続き工夫を重ねていきたい。

作文：2 名の履修者がいたが、1 名はやむを得ない事情で欠席が続き、学期途中からは 1 名のみの参加となった。渡日できておらず、時差のために夜中に受講していたが、遅刻・欠席することなく、学期の最後まで熱心に取り組んだ。1 対 1 ということもあり、宿

題で書いてきた作文は毎回一緒に見直し、丁寧にフィードバックすることができた。おかげで、学期を通して、書く力がかなり伸びた。漢字は苦手意識があるようだったが、中級では漢字の読み書きも重要になってくるので、今後は漢字の学習もがんばってもらいたい。

総合スキル：本クラスは、今回二人だけのクラスであったが、途中一人だけのクラスになった。教員

と二人だけの授業であったため、口頭表現を中心に、既習文法を使った読解を単なる翻訳活動ではなく、内容を理解し、理解した先に読むことの楽しさを感じてほしいと考えて取り入れた。また日本人ボランティアとの会話を持つ機会を持つことで、実際の日本語での会話運用を实践できた。同じ時間にクラスが開設されていた J3S の学生とも合同でクラスを運営することができた。ロールプレイ活動を中心に、まず教室で数回練習をしてから、ボランティアとの活動日を迎えた。活動の後はとても楽しかったという感想がきかれ、また同じ留学生ともこの活動の時は合同ででき、普段教員と二人だけの授業なので、にぎやかな活動ができたことは幸いだった。日本語だけでも意思疎通ができるレベルではあるが、初級文法を正確に使って表現するためにはまだ運用練習が必要である。未だ来日できていないため、授業のない期間にも日本語に触れる時間を継続的に持つことで日本語力を維持し、次のレベルに上がってほしい。

2021 年度 J3S 授業記録

コース概要

J3S は、日本語の基礎を習得し、1000 語程度の語彙力を持ち、初級文型が既習であるが、それらの運用能力が不足していると思われる学生を対象としている。週 3 日の授業の中で、既習の文法項目を確認し、その運用練習を行い、中級へとつなげていくためのコースである。コースの詳細は、以下の通りである

担当者名：＜春学期＞金庭久美子、任ジェヒ、小松満帆

＜秋学期＞金庭久美子、小林友美、井上玲子、小松満帆

授業コマ数：週 3 コマ（文法、運用練習、読解・作文）

履修者数：春学期 3 名、秋学期 2 名

使用教材：独自教材（J3 と同じもの）

コースの目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを

日常生活の中で使えるようになること。

運用練習：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：読解では、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これ

まで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身に着けること。作文では、文法で学習した文型や語彙を使って、きちんとした構成で作文が書けるようになること。

文型リスト

J3S で扱った文法項目は J3 と同様であるため、省略する。

授業の方法

<春学期>

2021 年春学期は、14 週間、週 3 日で実施した。月曜日は文法導入、水曜日は聴解を含む運用練習、金曜日は読解と作文のように行った。従来、教室で紙で実施していたクイズをすべて Blackboard で 10 分で実施した。また、宿題は、授業内で実施状況を確認し、学生と一緒に答え合わせを行った。中間テストと期末テストは Blackboard で実施した。学習時間を確保するために、中間テストの前に Blackboard での文法と読解の復習クイズ、期末テストの前に Blackboard での文法と聴解の復習クイズを与えた。さらに、読解と作文の時間に、希望者に漢字教材と漢字クイズを与えた。

<秋学期>

2021 年秋学期は、14 週間、週 3 日で実施した。授業方法、クイズ、中間テスト、期末テストは春学期と同様である。このクラスでは漢字クイズの希望者はいなかった。春学期と違うのは日本語ボランティアに来てもらい、J3 クラスと合同で会話練習を 2 回行ったことである。1 回目は第 22 回の授業時に受身の練習（有名なものや有名なところを紹介するロールプレイ）、2 回目は第 34 回の授業時に敬語の練習（敬語を使ったインタビュー）のために行った。

結果と課題

<春学期>

授業形態がオンライン→対面→オンラインのように変更されたにもかかわらず、教師間及び学生間の連携によりトラブルなく、スケジュール通り落ち着いて授業に臨むことができた。不規則な授業形態であったが、PC の貸し出しなど、学生に対するサポートを授業形態に合わせて適切なタイミングで行うことによって、常に安定的な学習環境を提供することができた。

このクラスでは、スケジュールにそって授業を展開してだけでなく、学生一人ひとり

が日本語力を高めていく上で解決すべき課題、具体的なサポートの仕方などが（コーディネーターや担当教師から）毎週提示され、学生たちはきちんと積み上げて身につけることができた。教師間の連携の重要性を改めて感じた。また、優秀な学生たちだったのでクラスメイト同士でもよい刺激があったと思われる。

このクラスの課題は、いかにインタラクティブな活動をするかということである。このクラスは対面が可能な 2 名と、オンラインのみの 1 名の 3 名の少ないクラスで、かつ、ミックス型だったため、インタラクティブなやり取りが少なくなってしまった。週 3 回の授業でなかなか余裕がないのが現状だが、可能なら、スピーチやディスカッションなど、学生同士の活発なやり取りが期待できる活動、日本人ボランティアに参加してもらうような活動を盛り込んでいってもよいかもしれない。また、ミックス型の場合、対面参加の学生とオンライン参加の学生の交流を深めることができる活動をより積極的に取り入れる必要があると思った。特に、今学期のようにオンライン参加の学生が 1 名のみの場合、オンライン参加の学生が学習を進めていく上で孤独感や孤立感を感じることがないように、学生間のコミュニケーションややり取りを促す教室活動を通常よりも工夫する必要があると感じた。紙媒体のやり取りが難しい中、対面参加の学生へのフィードバックに工夫が必要であった。来学期も同じ状況が続く場合、どのようなフィードバックの仕方がより効率的であるか、さらに工夫する必要がある。

<秋学期>

非常に協力的で、穏やかで前向きの雰囲気だった。1 名がオンラインだったが、特に大きな問題はなく進められた。学生同士がよくコミュニケーションを取り、気遣い合いながら授業を受けていたのが印象的だった。履修者 2 名とも予習をきちんとやって授業に参加し、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていた。特に文法の授業では、疑問に思ったところを積極的に質問し、学習項目の理解に努めていた。

今後の課題は、2 つある。1 つは文法項目の定着を図ることである。J3 の後半は受身・使役・使役受身など学習項目が続く。それぞれの文法を扱った時は、フォームや概念を理解できているようであったが、文作や作文などで応用する時は、使い分けが難しかったようである。次の文法導入に入る前に少し復習する時間を設けてもよかったかもしれない。もう 1 つは会話力をいかに伸ばすかということである。オンラインで受けていた学生の会話力を伸ばす工夫をする必要があったが、なかなか難しいのが現実である。日本語ボランティアを引き続き活用し、会話のクラスを工夫していきたい。

2021 年度 J4 授業記録

コース概要

J4 は初級修了段階の学習者を対象とした、初級から中級への橋渡しを行うコースであり、文法・文型、聴解・会話、読解、作文の 4 クラスで構成されている。このコース全体の目

標 は、初級で学習した文型を確実に定着させることと、複数の文型を組み合わせ使用できる ようになることである。さらに J4 では、語彙を増やし、流暢さを向上させることも併せて 29 目標としている。各スキルの詳細は以下の通りである。

＜J4 文法・文型＞

担当者名：＜春学期＞小松満帆

＜秋学期＞井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 1 名、 秋学期 1 名

使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J4 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	Part1	Part2
1	・ 受身 ・ 自発	・ ～は～つつある ・ ～は～（で／に） さえ～ ・ Vさえすれば／Aさえあ（い） れば／Nさえ～ば～ ・ ～とすれば、～（こと） になる ・ （たとえ／仮に／もし） ～としても～
2	・ 使役 ・ 使役受身	・ ～にもまして～ ・ （たとえ／仮に） ～にしても～ ・ いくら～にしても～
3	・ 尊敬語	・ （Vた／A／Nの） まま、～ ・ Vつつ～ ・ ～はVなり～
4	・ 謙譲語	・ Vことにしている／Vことになっている ・ ～は～ことから～ ・ ～は～こととなると～ ・ ～は～ことなく～
5	・ ～ようにV ・ ～ようにする ・ ～ようになっている	・ ～して、（考えさ／思い知ら） せられた ・ （無生物主語） が～を～させる ・ ～は～だけではなく、～の問題だ

6	・ V ばかり／V ばかり／V てばかりいる ・ N ばかり／A ばかり ・ Number ばかり	・ ～からといって、～が必ずしも～わけではない ・ ～ずに～ ・ ～のか（どうか）については～
7	・ ～が限られている／～を～に限っている ・ 限りがある／ない ・ V（ない）限り／N の限り ・ V（た）限りでは／N の限りでは	・ ～原因は～ことにある／～のは～からだ ・ ～と～では～が異なるので～ ・ ～や～は～のだから、たとえ～でも～ことはない ～や～は～のだから、もし～たら～
	・ N に限って（はずがない） ・ N に限り ・ V（ない）／N に限る ・ N に限らず	・ ～は～ので、～でも、どうしても～てしまう ～は～から、～のに、～と、どうしても～てしまう ・ （無生物主語）が～に～を生じさせる ・ ～たり～たりするだけでは～ ・ ～は～が～であることを利用して～
8	・ V よう（か） ・ V ようと思う／V ようとする ・ V ようがない ・ V ようとしている ・ V ようとしない	・ ～時に、～と／ても～ ・ 私は～て、～ことに気が付いた ・ ～（こと）は～（のだ）から、もし～なら～
9	・ N（clause）という N ・ N という N／Number という Number	・ ～すると、～は～が～は～ ・ ～する時に重要なことは、～か（どうか）ということ （よりは／ことではなく）、～か（どうか）という（点／こと）である ・ ～ものとして（しまう）

授業の方法

<春学期>

毎週 1 課のペースで、プレレッスンから L9 まで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習を行った。導入では、学生のレベルに合わせた例文を多く使用し、理解を促した。また、練習も単調にならないよう、空欄補充、活用練習、短文作成など、複数の種類の練習を取り入れた。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

<秋学期>

毎回、翌週扱う課のテキスト(PDF)を授業までに読んできてもらった。授業では、テキストとパワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習問題を行った。そして、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を宿題にした。宿題の FB は、新しい課の練習

の前に行い、FB 後にメールで返却した。

結果と課題

＜春学期＞

履修者 1 名で、アメリカから深夜にオンラインでの出席となり、学生には負担の大きい授業となったが、それでも毎回時間通りに出席し、前向きに授業に取り組んでいた。質問を積極的にし、発言も多い学生だったため、1 名というクラスではあったものの、教師とのアクティブなやり取りを行いながら授業を進めることができた。

授業内容では、基礎的な文法において不正確さが見られたため、ターゲット文法以外の復習もできるだけ盛り込みながら、授業運営を行った。学期途中で、現地の電力の問題により欠席を余儀なくされ、時間的な余裕がなくなってしまい、最終的な復習の時間は取れなくなってしまったが、それでも、毎回の授業の中では丁寧に復習をしながら新しい表現を増やすことができた。

課題としては、履修者が 1 名かつオンラインという状況の中で、クラスメイトとインタラクティブなやり取りをしながらの学びができなかったことが挙げられる。文型・文法というクラス内容から、運用を断念してしまったのだが、日本人ボランティア学生を活用し、教師以外との活動を取り入れてもよかったのではないかと悔やまれる。履修者の少ないクラスでの授業運営については、今後も模索していきたい。

＜秋学期＞

今学期は特外外国人学生 1 名のみの履修で、Zoom を用いたオンライン形式の授業を実施した。履修学生は、学習意欲が非常に高い学生であった。課で扱う文法・文型を予習して授業に参加し、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていた。また、毎回課した短文作成練習の宿題も一度も欠かすことはなかった。

履修者が 1 名だったので、その学生のペースで授業を進めることができた。学生が理解できていないところや、学生から質問があった文法項目については、特に時間をかけて説明し、練習問題を繰り返し行った。教師、学生、双方にとって、理解できている文法項目、更に練習が必要な文法項目が明確だったため、効率よく授業を進めることができたのではないかと考えている。

教師と学生の 1 対 1 のクラスだったので、学生が自由に発言や質問ができるように、クラスの雰囲気作りを心掛けた。また、履修学生が自国からオンラインで授業に参加していたため、学生ボランティア 2 名に授業に参加してもらい、交流の機会を設けた。J4 で扱う文法・文型項目の中に、敬語が入っている。ボランティアの学生が実際にどのような場面で敬語を使用しているかを聞くことで、場面や状況にあった敬語表現が理解できるようになったとの感想を述べていた。同じ学生同士で話をすることができ、いい機会となったようである。

＜J4 読解＞

担当者名：＜春学期＞ 任ジェヒ

＜秋学期＞神元愛美子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 1 名 秋学期 1 名

使用教材：独自教材

コースの目標

さまざまな分野の読解教材を数多く読み、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに、初級文型や初級語彙が使用語彙にまで高まるような練習を行う。

授業の方法

＜春学期＞

オリジナル教材のプレレッスンから L11 まで、説明文、エッセイ、記事、物語、新聞の内容を毎週 1 課のペースで授業を進めた。L9 と L11 を除く課では、毎週、読解内容の語彙を調べておくことを事前課題とし、授業では読解の音読、意味の確認、設問の答え合わせ、筆者の意図や要点について意見交換などを行った。L9 と L11 は速読を行い、授業中に配布し初見で読解を行った。一部の課ではクロスリーディング活動を実施し、語彙の確認だけではなく、主要な文型を確認し、時間に余裕があるときは、口頭練習や例文作成も行った。そして、事前課題とは別に、毎週覚えていた言葉を 5 つ選んでもらい、短文作成することを課題とした。毎回授業の最初には、前週の語彙から 10 問、正しい語彙を選ぶという小テストを実施した。最後に、総まとめとしてすべての課で学んだ語彙や表現の復習と読解の復習をし、最終日は Blackboard を使って期末テストを実施した。

＜秋学期＞

毎週 1 課 のペースで授業を進め、説明文、エッセイ、新聞記事、物語と様々なジャンルの文章を読んだ。基本的に次週扱う教材の予習を宿題とし、授業では内容の確認とディスカッションを行なった。履修者が 1 名だったため、教員以外とディスカッションできるように授業に日本人学生を招くこともあった。読解に慣れ、リーディングストラテジーを学んだ学期後半では初見の文章を読む練習も行なった。また、語彙力をつけるために、教材に出てきた語彙を使用した文章をペアになって読み合うクロスリーディングも行った。さらにそれらの語彙を使用した短文作成を宿題とし、次の授業では語彙のクイズを実施した。

結果と課題

<春学期>

今学期の受講生は J3 からの継続性 1 名のみだったため、学生の理解度に合わせてゆっくり授業を進めることができた。また、分からないところは積極的に質問したり、読解内容ついて自身の意見を述べたりするなど、非常に熱心に取り組む学生であったため、教師の一方的な解説ではなく、学生とのコミュニケーションにより成り立つクラスであった。クラス活動では、受講生 1 名という環境の利点をいかした。例えば、毎週課された短文作成では、動詞・形容詞の活用、助詞の誤りなどについて丁寧に指導を行い、J3 の復習兼ねて文型の口頭練習も行うことができた。しかし一方で、一緒に日本語を勉強する仲間がいないことから生じる問題もあった。仲間がいた J3 クラスでの学びの様子と比べると、日本語学習の意欲を高めてくれる存在、刺激し合える存在の欠如が、今学期の受講生には大きく影響しているようにみえた。(日本語の) 学習スタイルには個人差があるが、ピア・ラーニングの環境が日本語学習を続けていく上で重要な要素となる受講生がひとりで受講する場合は、教室活動などにさらなる工夫が必要であると改めて感じた。受講生に対する効果的な学習動機付けを今後の課題としたい。

<秋学期>

履修者 1 名だったので、苦手な指示語と接続詞と記述問題の回答に特に力を入れた。本人に何が問題かを認識させ、毎回訓練することで苦手を克服することができた。記述は本文に書いていることだけではなく、自分の考えを述べる傾向があったが、学期末にはそれがなくなった。逆に自分の考えを述べることは得意なので、毎回のディスカッションは大変熱心に取り組み、意見を述べるだけでなく、疑問点を明らかにし、教員や日本人学生に質問を投げかけていた。日本人学生が参加する回では他の活動を工夫して、ディスカッションの時間を長くしてもよかった。そして、語彙はクロスリーディングを通して文章で覚えることで定着していった。学生自身も自分にあった語彙の学習方法を発見でき喜んでいった。

大変熱心で読書も好きな学生なので一学期で力をつけることができたと思う。今後の学習でも自分の好きな分野だけでなく、様々なジャンルの文章に触れて、目的に応じて読み方を変える訓練も積んでほしい。

<J4 作文>

担当者名：<春学期>小松満帆

<秋学期>任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 1 名、秋学期 1 名

使用教材：独自教材

コースの目標

初級文型、初級語彙の定着及び応用力の育成を目的とする。具体的には、初級文型や語彙を使って正しい文章（単文だけではなく、複文も含めて）が産出できるようになることを目指すと同時に、400字程度の短い文章が適切な構成で書けるようになることを目指す。

授業の方法

<春学期>

毎週1課のペースで、プレレッスンからL11まで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、各課の文型、構文を導入し、練習、その後、パラグラフライティングを行った。パラグラフライティングでは、その課で習った文型をどう効果的に使用するか、構成をいかに組むかについて説明し、実際に書いてくるのは宿題とした。また、毎週授業の初めに、前週に学習した文型・構文を使った短文作成を行うクイズを実施した。

<秋学期>

授業はテキストと補助教材を使用し、1コマ1課のペースで進めた。各回は、①前回の復習（例文の理解確認）、②前回の課題へのフィードバックと関連する表現のフォロー、③クイズ実施（短文作成）、④新しい課の目標確認、⑤ターゲットとなる文法・文型の意味、用法の理解、⑥練習（口頭発表、短文作成など）、⑦次回までの課題確認（各課の作文のテーマに沿った文章作成）、という流れであった。最終回では、レッスン1からレッスン11までの復習を、理解に重点を置いて行い、特に練習が必要な文法・文型の短文作成を繰り返した。

表 J4 作文の授業内容

pre-Lesson	初級文型確認の短文完成問題。
Lesson 1 定義	①留学とは、一定期間外国へ行き、その国の学校などで学ぶことだ。 ②私が会社を辞めた <u>ことで</u> 、家族の生活が大きく変わってしまった。 ③留学は <u>人を人間的に成長させる</u> 。
Lesson 2 意見①	①最近、日本の大学生を見ていて <u>気づいたことがある</u> 。 ②日本の経済が悪くなった <u>のは</u> 、日本の政治家が無能だからだ。 ③両親の「成績が一番」 <u>という考え方が</u> 、子供を非行に走らせたのだろう。
Lesson 3 分類	① <u>私は</u> 、医者という職業を目指している人 <u>は</u> 、その目的の点から2つのグループに分類されると思う。 ②この薬には麻薬のような成分が含まれている <u>ため</u> 、服用すると眠くなる。 ③留学という貴重な経験 <u>を</u> その後の人生に役立てたいと思う。

Lesson 4 比較・対照 ①	①日本とタイとはどちらも米を食べる国だが、日本とタイとは、その食べ方や食べている種類が大変に異なっている。 ②日本とタイはどちらも米を食べる国だ。しかし、日本とタイは、その食べ方や食べている種類において対照的である。 ③東京の生活は便利だがストレスが多い。一方、地方の生活は東京ほど便利ではないが、ストレスは少ない。
Lesson 5 根拠・判断 ①	①日本人は、間違った平等主義の方向に進もうとしている。 ②私は、日本の社会問題、たとえば「就労者の高齢化」や「若年労働力の不足」といった経済的な問題に取り組んでいる。 ③自分の能力や適性がいかにせよ、転職してもいいと思う。
Lesson 6 定義②	①運動をせずに、食べてばかりいると、太りますよ。 ②もしあなたが、自分さえよければいいと考えているとするなら、それはとてもいけないことだ。 ③困っている人に手をさしのべ、弱者を苦しめている企業に立ち向かうことこそ、弁護士の役割である。
Lesson 7 比較・対照 ②	①速さという点では、飛行機は船とは比べものにならない。 ②100%とは言えないまでも、現在では多くの国でクレジットカードが使えるようになっている。 ③現代人の生活にとって、クレジットカードは必要不可欠なものである。
Lesson 8 意見②	①その会社は給料がいい。しかも、残業がほとんどない。そのため、その会社で働きたい若者は多い。 ②私は、親が子どもをしつけるのは当然だと思う。 ③両親や先生とよく相談した上で、日本への留学を決めた。
Lesson 9 換言・例示	「つまり」「すなわち」「いわば」「いわゆる」
Lesson 10 根拠・判断 ②	①私は、安定した給料よりも、むしろ自由な時間が多いほうがいい。 ②いつもは節約のために自炊しているが、時には外でおいしいものを食べることもある。 ③一度約束した以上、守らなければならない。
Lesson 11 ことわざの 説明	①そのニュースは、韓国をはじめ、アメリカやヨーロッパ諸国など、世界中に伝えられた。 ②お金がなくても、あなたさえいれば、私は幸せだ。 ③日本のことわざ

結果と課題

<春学期>

履修者1名で、アメリカから深夜にオンラインでの出席となり、学生には負担の大きい授業となったが、それでも一度も欠席することなく授業に参加し、前向きに授業に取り組んでいた。質問を積極的にし、発言も多い学生だったため、1名というクラスではあったものの、教師とのアクティブなやり取りを行いながら授業を進めることができた。

授業内容では、ターゲットとなる文型・構文のほかにも、基礎的な文型において不正確さが見られたため、毎回の宿題およびクイズのフィードバックの際に、細かく見直し、復習も取り入れるように努めた。また、教材に挙げられている例文が、語彙レベルにおいて当該学生には難しいということが多々あったため、易しい文に差し替えるなどして、学生の理解を促した。

課題としては、履修者が1名かつオンラインという状況の中で、クラスメイトとインタラクティブなやり取りをしながらの学びができなかったことが挙げられる。作文という書くことを中心としたコースであったこと、学生のレベルに合わせて丁寧に復習をしながら授業を進めたことにより、時間的な余裕もなかったことから、運用を断念してしまったのだが、日本人ボランティア学生を活用し、パラグラフライティングのブレインストーミングを行うなど、教師以外との活動を取り入れることもできたのではないかと悔やまれる。履修者の少ないクラスでの授業運営については、今後も模索していきたい。

<秋学期>

今学期は、特外生1名と小規模のクラスとなったが、能動的な学習の重要性を十分理解している学生であったため、教師と学生のやり取りを中心に授業を進めることができた。また、学期末まで欠席がなく、課題の提出に関しても、毎週、真剣に取り組んでいたため、理解が不足している文法・文型の把握および復習をその都度行うこともできた。J4作文では、レッスン2では「意見①」、レッスン8では「意見②」、のように関連するテーマを2回に分けて導入することになっている。そのため、「意見①」に対する理解は「意見②」を進める上で不可欠である。毎週の授業で疑問点などについて積極的に発言をし、教師と一緒にクラスを作り上げていこうとした受講生の学習態度が、学習項目全般に対する理解に繋がったと思われる。

このように今学期の受講生は高い学習意欲をもつ学生であったが、時差のある海外からのオンライン参加であり、さらに「書く」活動が中心となっていたため、学期中盤あたりから集中力が維持できないといったトラブルが時々起こった。トラブル解決の方法として、動画を用いて文法・文型の説明を行ったり、短文作成だけでなく、助詞の二択問題、穴埋め問題などの種々の形式で練習を行ったりし、学生の学習意欲を維持させることができた。しかし、このような取り組みを学期後半から行ったことは、今学期の反省点である。学習意欲を高めるだけでなく、維持させるための教師の役割、授業デザインについては、今後、引き続き工夫を重ねていきたい。

＜J4 聴解・会話＞

担当者名：＜春学期＞山内薫

＜秋学期＞小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 1 名、秋学期 2 名

使用教材：独自教材、『リアルな会話で学ぶにほんご初中級リスニング Alive』（秋学期）

コースの目標

日常生活における様々な場面での聴解と会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などを正しい日本語できちんと発表できるようになることを目標とする。

授業の方法

＜春学期＞

スピーチ・発表（20 分）・『なりきり初中級』（40 分）、聴解（30 分）の 3 部構成で、毎週、時間を調整しながら実施した。スピーチ・発表においては、スピーチ 2 回（テーマ：最近の出来事、旅行の思い出を伝える）、発表（学生ボランティア 6 名へのインタビューのまとめ）を行った。『なりきり初中級』ではテキストに沿って進め、会話文の内容や展開を理解しながら、相手の話に適切な反応ができるように練習を行った。聴解では、各週のトピックについての背景知識を確認した後、音声を複数回聞き、内容に関する質疑応答を通し、理解度を確認した。また、毎週の宿題として、音声データを聞き直し、宿題プリントの提出及び穴埋めクイズを実施した。期末テストは、聴解とロールプレイの二つに分け実施した。

＜秋学期＞

各回、①スピーチ・発表、②聞き取りと会話練習、③聴解練習の 3 つの活動を行った。

① スピーチ・発表（20 分）

2 回のスピーチ（「最近の出来事」「旅行の思い出」）と 1 回の発表を行った。1 回目のスピーチは 3 分程度、2 回目のスピーチは写真を見せながら 5 分程度のスピーチを行った。発表では、日本人学生数名にアンケート調査を行い、その結果を報告する内容で実施した。

② 聞き取りと会話練習

『リアルな会話で学ぶにほんご初中級リスニング Alive』の中から 3 トピックを使用し、テキストに沿って進めた。会話文の背景や内容、展開を理解した後、相手の発言への適切かつ自然な反応ができるよう練習を行った。

③ 聴解練習

毎週違うトピックの音声を使用した。トピックの背景知識を共有したうえで音声を聞き、内容

毎週違うトピックの音声を使用して、聴解練習を行った。まず、トピックの背景知識を共有してから音声を聞き、内容を問う質疑応答と通して内容の理解を確認した。その後、トピックについて短いディスカッションを行った。さらに、授業で聞いた音声を聞きなおし、スキリプトの穴埋めをすることを毎週の宿題として課し、翌週に穴埋めクイズを行った。

期末テストは、聴解問題とロールプレイの二つに分けて実施した。

結果と課題

<春学期>

学生1名のクラスで、毎回、オンラインでアメリカから時差がある中での参加であった。担当者と一対一であったが、積極的に発言や質問をする学生で、大変熱心に学習に取り組んでいた。また、インタビュー活動及び発表においては、学生ボランティアに多数参加してもらうことができ、日本語運用の機会を十分に活用している姿が窺えた。

本レベルの教材は、当該学生においては多少難易度が高く、特に聴解においては、背景が掴めても語彙や表現を理解することに困難を伴う様子が度々窺えた。一方、会話においては得意と捉えており、ロールプレイでは話題を上手に展開することができていた。ただ、フィラーや不自然な切り返し方に硬直がみられ、会話における意識する点として指摘し、毎週の発話において注意を促した。期末テストは、学生が得意とする会話は授業での成果を発揮でき、不得意とする聴解は伸び悩む結果となった。今後、学生の得意な点を生かしオンライン参加での学習意欲を維持しつつ、不得意とする点の学習を強化できるような工夫を考えていきたい。

<秋学期>

履修者2名で学期がスタートしたが、事情により、最後は1名での授業となった。1名はドイツからオンラインで出席、もう1名は教室での対面という形態だったが、特に大きな問題もなく、進めることができた。学生2名の日本語のレベルに差があったが、それぞれに苦手な部分があり、それをお互いに補いながら、助け合いつつ授業を進めており、とてもよい雰囲気クラスであった。事情により、途中で1名が出席を止めてしまったが、いずれの学生も出席率が高く、非常に前向きな姿勢で授業に取り組んでいた。また、授業を3つの活動に分けて展開したことで、それぞれが自分の苦手なことを自覚し、集中して取り組むことができた。

課題としては、扱ったトピックが、会話練習にしても聴解練習にしても、日常会話に関するものが多く、堅い表現を用いてまとまった話をする練習が不足していた点が挙げられる。今後は、扱うトピックのバランスを考え、選ぶ必要がある。また、1名の学生は日常会話で使うくだけた表現を得意としており、もう1名は逆に友達言葉などのくだけた表現を苦手としていたが、場面に応じた表現の使い分けについて、十分に練習することができなかった。様々な場面を設定し、状況に応じて表現を使い分けられるように、練習に工夫が必要である。

2021 年度 「J5～J7 文法・文型」授業記録

コース概要

J5～J7 の文法・文型科目は、中級前半から中級後半あるいは上級前半レベルの文法や文型を習得していけるように設計されている。それぞれのレベルとも週 1 回の授業であるため、学生が授業外にも学習できるよう、宿題を課している。

J5 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2 レベルの文型に焦点をあて、初級の文型を応用しながら、進出の文型も着実に身につけていくことができるような教材、教室内活動を実施している。J6 のレベルにおいては、日本語能力試験 N2、N1 レベルの文型に焦点をあて、論文作成や読解等に必要とされる高度な文型を習得していくための教材、教室内活動を実施している。そして、J7 のレベルにおいては、引き続き日本語能力試験 N1 レベルの文型を導入しながら、さらに、日本語の文章を文法的に分析していく力を身につけられるような教材、教室活動を実施している。

各レベルの詳細は以下の通りである。

<J5 文法・文型>

担当者名：<春学期>小森由里

<秋学期>開講せず

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 7 名、秋学期 開講せず

使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J5 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	助詞相当語	文型
1	～のかわりに、～について、～によって、 ～に比べて、～に基づいて	こ・そ・あ・ど Expressions
2	～に関して、～を問わず、～に応じて	と／ば／たら／なら Expressions

3	～に反して、～に対して、～において	こと Expression1
4	～に従って、～に沿って	こと Expression2
5	～に際して、～につれて	もの Expression1
6	～にとって、～に先立って	もの Expression2
7	～に渡って、～に代わって	Time Expressions
8	～にあたって、～に伴って	わけ Expressions
9	Adverbs used in daily conversations せめて、さすが（に）、やはり（やっぱり）、どうせ、つくづく	
10	「量が多い」ことをあらわす表現、 「よく」の使い方	

授業の方法

<春学期>

授業は1回に1課のペースで進めた。各課で多数の文法項目・文型を扱うため、教科書以外に、形式・意味・運用上の注意点をまとめたハンドアウトを配布し、文型の意味や用法を説明した。毎回、教科書の次の課のわからない言葉の意味を調べることと練習問題を予習させ、学習した文型を用いて短文を作成することを宿題にした。学期の半ばで中間テスト、学期末に期末テストを実施した。コロナのため入国できず自国でオンラインによる受講となった学生が3名いたが、そのうちの1名は時差の関係で通常のクラスには出席できず個別の対応が必要であった。当該学生には、教科書、ハンドアウト、クラスで用いたPPTを使って自習させ、教科書の練習問題と短文作成を宿題として毎回提出させた。他の学生に後れを取らないよう毎週オンラインでチュートリアルをして宿題のフィードバックを行った。

<秋学期>

開講せず

結果と課題

<春学期>

7名が履修したが、熱心な学生ばかりであった。対面授業は数回しか行うことができずオンライン授業が主であったが、出席率が高く全員が期日を守って宿題を提出した。授業は、教師からの一方的な文法説明にならないよう、練習問題の答え合わせなどにはできるだけピア活動を取り入れるよう心掛けた。オンライン授業であっても、積極的に質問をする学生

が数名おり活気のあるクラスだった。個別対応となった学生 1 名も非常に真面目で、毎回きちんと宿題を提出しチュートリアルも欠席することはなかった。中間テストも期末テストも総じて高得点で、新しい文法項目が確実に身につけていることが窺えた。

＜秋学期＞

開講せず

＜J6 文法・文型＞

担当者名：＜春学期＞鹿目葉子

＜秋学期＞鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 4 名、 秋学期 7 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日常会話や小説などで用いられるやや高度な文法、文型を理解する。

文型リスト

J6 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	「理由・目的の表現」
2	「感情・心情・評価の文型」
3	「不快・非難・軽蔑の文型」
4	「判断・理性的評価を表す文型」
5	「推察・推量を表す文型」
6	「人や物の状態・性質を表す文型 1」
7	「人や物の状態・性質を表す文型 2」
8	「義務・当然を表す文型」
9	「その他の文型 1」
10	「その他の文型 2」

授業の方法

＜春学期＞

毎週 1 課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用し、文法・文型の説

明と例文を読んでもらい、その意味と文型の使い方を確認した。また、各文型を使った簡単な練習問題を行った。文法・文型を導入する際、似たような文型の場合は、比較表等を作って説明をした。また、教師の一方的な説明で終わらないよう、例文の内容を使って学生の意見や考えを聞く活動をした。さらに、授業時間内だけでなく、時間外でも学生が自由に質問できるようメールでやりとりを行った。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

<秋学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用し、文法・文型の説明と選択した例文を読んでもらい、その意味と文型の使い方を確認した。また、各文型を使った簡単な練習問題を行った。練習問題は、各自で考えて答えるだけではなく、ペア・グループで考えるなど、学生同士がコミュニケーションを図れるよう工夫した。また、似たような文型を教える際、表で提示し、その後、学生個人で復習・確認できるようにpdfとして配布した。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

結果と課題

<春学期>

省エネ志向のクールな学生、何でも吸収したい学生、楽しそうに参加している学生など個性豊かな学生達で、全体的に真面目な学生達であった。一方で、課題も見られた。限られた時間で文法と例文を網羅しようとしたため、時に早口になってしまい、学生はその日の文法を消化しきれずに授業を終えることもあった。文法項目はしっかり入れながらも、ポイントをしぼり、学生が真の意味で理解したといえる授業作りを模索し、改善していきたい。

<秋学期>

ユーモアのある学生、趣味が多彩な学生、演劇に興味のある学生など多様性に富んだ学生の集まりだった。また、学問に対して真摯な態度で取り組み、規律性を持っており授業をする上で、大変助かった。今回は春学期の反省を踏まえて、例文を選択したり、説明の時間もある程度短縮して網羅すべき文法項目は授業内で終わらせた。また、一方的に教師が説明するだけではなく、学生同士で会話をしながら問題を解く時間を作ったが、文法学習を楽しむまでには至らなかったと思われる。課題としては、難しい文法をいかに楽しく学習できるのか、『楽しむ』という観点から授業作りを模索していきたい。

<J7 文法・文型>

担当者名：<春学期> 井上玲子

<秋学期> 長島明子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：春学期 11 名、秋学期 3 名
使用教材：独自教材

コースの目標

文学作品や専門的な雑誌記事、さらには公式なスピーチなどで用いられる高度な文型や表現を理解し、自分の会話や作文で流暢に使えるようになることを目指す。

文型リスト

J7 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	Lesson 1 「ながら、まま、つつ」
2	Lesson 2 意向形を使った表現／語彙とニュアンスの似ている表現
3	Lesson 3 「ところ」を使った表現／語彙とニュアンスの似ている表現
4	Lesson 4 「まで」を使った表現／とりたての助詞
5	Lesson 5 「時」を表す文型 1／似ている意味の使い分け
6	Lesson 6 「時」を表す文型 2／まとまりで覚えたほうがいい表現
7	Lesson 7 「時」を表す文型 3／覚えたほうがいい表現
8	Lesson 8 「時」を表す文型 4／覚えたほうがいい表現
9	Lesson 9 複合動詞／覚えたほうがいい表現
10	Lesson 10 副詞の呼応／覚えたほうがいい表現

授業の方法

<春学期>

毎週 1 課のペースで授業を進めた。毎回、翌週扱う課を読んでくこととし、授業では、まずグループで文型の意味、接続、用法の確認をし、練習問題をしてもらった。次に、全体で文法・文型の説明を行い、練習問題を全体で確認した。文法・文型の補足説明ではパワーポイントを使用した。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

<秋学期>

授業は 1 回に 1 課のペースで進めた。まずテキストに沿って、文型の意味、注意点、似ている文型・表現との違いなどをテキストの例文を使って説明した。5 課～8 課の「時を表す文型」には意味が類似しているが用法が異なるものが多く出ているので、相違点を詳しく説

明した。その後、パワーポイントを使って補足説明や簡単な文完成練習を行った。毎回、学習項目の文型・表現を使った短文完成問題を宿題にし、翌週、全体でフィードバックした。J6 までの文法項目で忘れてしまったものもあったので、それらも合わせて復習した。個別フィードバックは宿題用紙の中にコメントを入れた。

結果と課題

<春学期>

今学期の履修学生は 11 名だったが、半数以上一度も出席しなかったため、実質 4 名の少人数のクラスとなった。学習意欲が高く、明るい学生が多かったため、非常にいい雰囲気です。授業を進めることができた。毎回課した短文作成の宿題も時には遅れ提出はあったものの、履修学生は一度も欠かすことはなかった。授業内においてもその課で扱う文法・文型を予習してきており、グループで積極的に話し合いながら練習問題に取り組んでいた。

一方で課題もあった。学期の後半から扱う文法・文型が多くなり、課によっては十分な練習時間を取れないこともあった。履修学生からもテキストの後半の文法・文型が難しかったという意見もあったことから、扱う文法・文型が多い課については、一部の文法・文型を先取りして確認したり、学生に早めに予習を促したりするなどして、練習時間を十分に確保する必要があったように思う。クラスのスケジュールでは毎週 1 課のペースで進められているが、特に課の後半で十分な練習時間を確保できるよう、履修学生の様子を見ながら授業の進め方を検討していきたい。

<秋学期>

学生は意欲的に勉強に取り組んでいたが、学期の後半から体調不良で欠席が多くなり、期末テスト前の数回は全員が揃うことがなかった。体調不良などの理由で宿題の提出が遅れ気味になった学生もいた。予習については学期の前半は予習をして授業に臨んでいたが、後半は予習してこない学生が多くなった。宿題の短文作成では、学習項目だけでなく既習の文型や表現も使い、よく考えて作成したことが窺われた。学期の初めのころは、問題の指示をよく読まなかったり、接続や助詞、テンスなどの誤りが散見されたが、次第に自分の間違ったところに注意を向けるようになり、同じ誤りを繰り返すことは少なくなっていく。J7 の文法では各課の学習文型の後に似ている語彙・表現が出てくるが、時間配分がうまくいかず、練習が十分できないことがあった。今後は時間配分をよく考え、十分な練習ができるよう授業を行いたい。

2021 年度 「J5～J7 読解」授業記録

コースの概要

J5～J7 の読解は、様々な分野の読解教材や生教材を読み、内容を正確に理解し、用語や表現を増やすとともに読むスキルを意識化する活動を取り入れて授業を展開している。

具体的に、J5、J6 では説明文、エッセイ、新聞記事、小説など様々なスタイルの文章を取り上げ、読むスキルを獲得する。また、用語や表現を増やし、要約やディスカッションを行なう。J7 では、より長い文章を読み、内容理解をした上で要約したりレジュメを作成したりすることを目指す。各科目の詳細は次に示す通りである。

＜J5 読解＞

担当者名：＜春学期＞数野恵理 ＜秋学期＞高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 7 名、秋学期 0 名

使用教材：独自教材

コースの目標

様々な分野の読解教材を数多く読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。また、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに様々な読むスキルを学ぶ。

授業の方法

＜春学期＞

読み物と内容理解、意見述べるのワークシートを宿題とし、Blackboard に提出させ、漢字語彙クイズは Blackboard で実施した。授業では宿題の答え合わせから始めた。まずグループに分かれて音読、内容確認、ディスカッションをして、次に全員で確認したり意見交換をしたりした。さらに、制限時間内に同じテーマの別の読み物を読み、内容理解とディスカッションを繰り返した。学期末のテストは Blackboard のテスト機能を活用し、オープンブック（辞書などの利用可）でテストを実施した。

結果と課題

＜春学期＞

昨年度は急なオンライン化で、オンラインで読める読み物を急いで準備したので、今学期はその一部を別の読み物に差し替えた。

学期のはじめは対面とオンラインのミックス型授業をしたが、緊急事態宣言が出たためオンライン授業に切り替わった。その後、まん延防止等重点措置となってからは渡日済みの学生もオンラインを選択可能なミックス型となり、全員オンライン受講をした。ミックス型ではグループやペアの活動をする際、メンバーを変えることが難しかったが、オンライン授業では毎回グループのメンバーを変えられてよかった。

今学期の「J5 読解」は「大学生の日本語 B5（異）」が併置されており、履修者 7 名のうち 6 名が「大学生の日本語 B5（異）」を履修する初年次の正規学部生だった。この正規学部

生は次の学期に「大学生の日本語 C/D 6-8」に合流する学生で、漢字圏ということもあり授業内で初見の読み物を読むスピードは通常学期の J5 の学生よりかなり速かった。そこで、「J5 読解」の学生が初見の読み物のワークシートを解いている間に、正規学部生はブレイクアウトルームの別のルームで「大学生の日本語 A/B6-8」の内容を扱うようにした。また、正規学部生の 1 名は時差でこの授業の時間は真夜中になってしまうため、所属学部から個別対応の依頼があった。そこで、毎回のワークシートのフィードバックに加え、隔週で別の時間帯に 30 分間個別指導を行った。

今学期は読むのに比べて話すのは苦手という学生もいた。別の読み物を分担して読んで、お互いに説明しあう活動は有効だったが、今後も、読んだものについて説明し、意見や感想を述べる力を伸ばしていく工夫が必要である。

＜J6 読解＞

担当者名：＜春学期＞小林友美 ＜秋学期＞武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 5 名、秋学期 6 名

使用教材：独自教材

コースの目標

新聞記事や小説など様々な分野の読み物を読み、内容理解することができるようになることを目標とする。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすと共に、様々な読むスキルを学ぶ。また、文章のポイントを押さえた要約ができるようになることも目標とする。

授業の方法

＜春学期＞

J6 レベルに合わせた説明文、新聞記事、小説等、様々なスタイルの教材を取り上げ、読解練習を行った。事前学習として、「リーディングチュータ」での読み物の語彙調べを課し、授業開始時に毎回、その範囲の語彙漢字クイズを zoom のプライベートチャット機能で実施した。授業の流れは、宿題でしてきた読解問題のワークシートをペアで答え合わせをし、全体で内容確認、読解ストラテジーの学習をした。そして最後に、読み物に関するディスカッションを行った。授業では、分担読解の活動と要約文の作成も複数回実施し、期末テストは Blackboard を使った読解テストを実施した。

＜秋学期＞

説明文、意見文、新聞記事、小説など、さまざまな読解教材を取り上げ、読解のストラテジーを意識して読む練習を行った。毎回、読み物を読んで内容確認問題に解答して Blackboard にアップロードしておくこと、語彙調べをしておくことを予習として課した。授業の最初あるいは最後に漢字語彙クイズを実施した。クイズ実施の方法は、教師がクイズ

用紙を画面共有し、学生は解答をチャットに書いて教師に提出することとした。授業活動としては、黙読、音読、内容確認のための質疑応答、要約、分担読解などを実施した。分担読解はブレイクアウトルームを活用した。期末テストは Blackboard を使った読解テストを実施した。

結果と課題

＜春学期＞

5名の登録であったが、実質4名の学生が参加し、全員熱心に授業活動に取り組んだ。大半の学生が事前学習の語彙調べや宿題も真面目に取り組んでいたが、一部、未提出の学生がいたため、ペアでのワークシートの答え合わせや分担読解の活動で足並みが揃わなかった点は残念であった。授業ではペア、グループワークを意識的に取り入れ、学生間のやりとりを増やした。読書好きな学生が多く、ディスカッションでは各自の視点から積極的に意見交換できた点はよかった点である。また、読み物のトピックを発展させたテーマや自国の状況、作風などについても話し合うことができ、充実したやりとりをすることができた。ただ、ワークシートの設問では、本文の中から関連した部分を抜き出すことはできるが、質問に合わせた答え方や自分の言葉でまとめることが難しかったり、中心文を用いた要約練習に苦戦していた。今後は、正確な答え方や文章構造を意識した段階的な読解を取り入れるなど、様々な形でアウトプットする機会を増やしていきたい。

＜秋学期＞

今学期は6人の履修者がいたが、早い段階で5人となり、また後半では4人となった。時差の大きな国の学生にとって、真夜中にあたる時間帯の受講は大変なようだった。学期中何度かつらそうに参加している様子を見ていたため、なんとか楽しく受けてもらえるような工夫をしたつもりだ。授業に参加を続けた学生達の中で、欧米の時差の大きい地域からの2名とアジア圏の2名は最後まで熱心に参加してくれた。漢字語彙クイズは、欠席で受験できず平均点を落としたものがいたが、概ね高得点を出していた。期末テストを受験した4名は優秀な成績をおさめることができた。今後次のレベルの読解授業を履修し、継続的に日本語学習を続けてほしい。

＜J7 読解＞

担当者名：＜春学期＞池田伸子 ＜秋学期＞神元愛美子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期10名、秋学期3名

使用教材：独自教材

コースの目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。また、新聞記事の要約ができるようにする。

授業の方法

<春学期>

社会的、文化的背景が盛り込まれた長文のテキスト以外に、新聞記事、論説文など、様々なスタイルの文章を扱った。対面授業は 2 回のみ。大部分はオンラインでの実施となったが、教材などは Blackboard を利用して配布し、特に支障なく授業を実施することができた。試験についても Blackboard での実施となったが、受験した学生は全員問題なく受けることができた。

<秋学期>

授業では論文、新聞記事、論説文、随想、小説等様々なジャンルの文章を扱った。基本的に次週扱う教材の予習を宿題とし、授業では内容の確認とディスカッションを行なった。学生たちは漢字圏出身で日本の漢字の読みが苦手だったため、適宜本文を音読し漢字の読みを確認した。また、要点をまとめる練習として天声人語の要約を行なった。要約課題はクラウド上で共有し、毎回ピアチェックを行なった。また、読んだ内容を説明できるようにするために、レジュメの作成も適宜実施した。

結果と課題

<春学期>

履修登録上は 10 名であったが、出席したのは半数の 5 名だった。出席した 5 名は、全員積極的に授業に取り組んでいたが、自分の言葉で文章を作ることは弱さが目立った。今後は、文章中から正解を「抜き出す」のではなく、自分の言葉でしっかりと解答を組み立てる練習が必要だと思われた。

<秋学期>

大学院生のための少人数クラスで課題の提出率も出来もよかった。そのため、授業ではディスカッションに力をいれることができた。各自の専門分野に関する読み物を扱った際はそれぞれの知識を共有してくれた。そのためディスカッションのレベルが大変高かった。授業後半では読み物の一つが学生の研究内容と重なったため、その学生に授業をリードしてもらった。今学期は読解力をつけるだけでなく、ピアから新しいことを学び、考えを発展させることができた。学生のレベルに合わせて後半の教材を追加変更したことも大変よかったと思う。

反省点は授業内で時間を制限して読む練習が少なかったことである。これが期末試験結果に影響してしまった。また、日本人学生を招き、ディスカッションをする予定だったが、諸事情により叶わなかったため、次回こそは日本人学生を招きたい。

2021 年度 「J5～J7 作文」授業記録

コース概要

作文は、J5 は中級、J6 は中上級、J7 は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象としたクラスである。J5、J6 では毎週、J7 では隔週に作文課題を完成させ、構成、資料の引用など、アカデミックレベルで必要とされる作文スキルを身に付ける。

<J5 作文>

担当者名：春学期、秋学期ともに履修者 0 名のため、開講されなかった。

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 開講されず、秋学期 開講されず

使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した語彙の定着、およびさらに語彙数を増やすこと、初中級で学習した文型や語彙を使ってレポートや作文を書く力をつけることを目標とする。

<J6 作文><春学期 CS 日本語 6D>

担当者名：<春学期>小林友美

<秋学期>小林友美・富倉教子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 10 名 秋学期 7 名

使用教材：独自教材

コースの目標

レポートや作文の構成について学習し、毎回 800 字から 1200 字程度のレポートが書けるようにする。また、自分の意見の論拠となる資料やデータを読み取り、要約し、レポート中に正しく提示できるようにする。その際、きちんとした構成で文章が組み立てられるようにする。

授業の方法

<春学期>

今学期はミックス型の授業と、zoom によるオンライン授業を行った。プレレッスンと 4

つのテーマを扱い、4回のレポートを課した。授業では、1つのテーマを3回の授業で取り扱い、独自教材のテキスト及び **Master of Writing** を用いた。まず、確認問題を実施し、その後、テーマの内容理解をした。次に、レポートで使用する表現やレポート作成のルールを確認し、構成メモを作成した。そして、レポートを宿題とし、授業で提出したレポートのフィードバックとリライトを行った。課題は全て **Blackboard** に提出させ、学生が提出したレポートは教師が添削し、コメントをつけて返却した。授業では、ブレイクアウトルームで個別フィードバックを行った。

<秋学期>

今学期、このクラスで焦点をおいたのは以下の2つ。4つの異なるテーマに沿った資料（読み物）の内容を理解しそれに対する意見を持つ。またその意見を読んだ資料を正しく引用しながら作文に書く。授業ではそれぞれのテーマごとの読み物をまず個人で読み、読んだ内容をペアで、そして最終的にはクラス全体で確認を行った。またテーマや読み物について簡単な意見を述べてもらったりした。同時に、文型の復習や引用の仕方をハンドアウトの問題を行いながら学んだ。作文の前には構成メモを作成。ペアで確認し合った後教師がフィードバックを個々に行い、作文につなげてもらった。また学生の構成メモをサンプルとして提示し、皆で共有しながら正しい構成を学んだ。作文を書いた後も「構成」と「引用の仕方」を中心に教師が個別にフィードバックを行った。

結果と課題

<春学期>

履修者のうち登録のみの学生もあり、実質5名の参加者であった。授業は、ミックス型とオンライン型授業で進めたが、学生の理解を図るために、プライベートチャットで設問の回答を送ってもらい、答え合わせをした。レポートのフィードバックは、事前に添削した作文を返却し、リライトの時間に個別に口頭でも実施した。クラスサイズが小さかったこともあり、1人当たり十分な時間対応することができ、それにより、各自、自分の誤用や改善点に納得したのはよかった点である。このような活動を繰り返すことにより、回を重ねるごとにレポートの出来は徐々によくなり、表現も定着していったように感じる。ただ、5名のうち3名は院生だったため、専門の授業の課題で忙しく、欠席や課題の遅れ提出があったり、欠席した日の学習項目が反映されていないレポートを提出したりしたことは残念であった。また、授業では、教師対学生という一方向の授業進行になりがちであったため、今後は、課題への動機づけや意識化、学生同士交流できる活動を増やすなど運営方法を工夫していきたい。

<秋学期>

上記のように4つの作文と期末を入れて合計5つの作文を履修者に書いてもらった。「構

成」と「引用」については、個人差はあるものの全体的に進歩が見られた。引用に関しては「形式」ということもあり、こちらは比較的理解しやすかったようで、全体的に回数を重ねるごとに正しく使えるようになっていった。なお、引用には様々なパターンがあるが、その状況に応じて柔軟に対応し正しく引用をすることに難しさを感じている履修者も見られた。構成に関してはもう少し時間をかけて取り組む必要性を感じているが、引用をしながら、序論、本論、結論といった構成で作文を書くという大枠は理解してもらえたように思う。

<J7 作文>

担当者名：<春学期>長島明子

<秋学期>池田伸子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 10 名 秋学期 2 名

使用教材：独自教材

コースの目標

これまでに学習した語彙や文型を使って、「作文」ではなく、大学レベルで必要とされるレポートや報告書等の長文作成を行うことを目的とする。

授業の方法

<春学期>

授業は3回に1課のペースで進め、学期中4つのテーマでレポートを書いた。授業では、テーマに関連したテキストの課題文と資料を読み、内容についてグループや全体で意見交換をし、テーマへの理解を深めた。その後、自分でも資料を探し、論点や構成を考えて構成メモを作成し、レポート作成へと進んでいった。各課の3回目にフィードバックとリライトを行った。フィードバックはまず全体で多くの学生に見られた共通の間違いを確認し、その後個別に行った。授業は対面・オンラインを使ったミックス型授業で行い（緊急事態宣言中はオンライン）、テキストと資料の配布、課題の提出と返却はすべて **Blackboard** で行った。

<秋学期>

「課題文読解、構成メモ作成、レポート作成」という流れを基本として、合計4つのレポート作成を行った。また、レポート作成の基本的事項を確認するため、「**Master of Writing**」を使用し、特に引用の方法などについて扱った。

結果と課題

<春学期>

履修登録者は10名だったが、最後まで出席したのは5名だった。この5名は意欲的に課題に取り組み、課題も期限内に提出した。また、オンラインで授業に参加した場合でもビデオをオンにしてくれたおかげで、話し合いなどが円滑に進められた。学生は文献を引用してレポートを書いた経験はあるものの、引用の仕方が不正確だったため、毎回の授業で引用の仕方と参考文献の書き方について確認した。また、コース前半では問いの立て方や結論の部分に何をどう書いていいのかわからず、戸惑う学生が多かった。しかし回を重ねるにつれて慣れて習得していき、進歩が見られた。最終的には、文献を引用してレポートや報告書を書くというこの授業の目標は、概ね達成できたと思われる。ただ最後まで、間接引用がうまくできない、適切な語彙選択ができないなどの問題は見られた。この点は個別フィードバックでも指導したが、なかなか改善ができない学生もいた。この点を今後の課題とし、授業で引用の練習やフィードバックに十分時間が割けるように工夫したい。

<秋学期>

参加者は2名とも大学院生であり、基本的な事項は理解していたが、直接引用、間接引用、参考文献の書き方などについては、あやふやな点も多く、何回か確認が必要であった。また、参加者が2名と少なかったため、学習者同士のディスカッションがやや不調に終わってしまった。今後は、書き始める前の論点整理部分に工夫が必要であると思われた。

2021年度 「J5～J7 聴解・会話」授業記録

コース概要

聴解・会話は、J5は初中級、J6は中級前半、J7は中級修了レベルの学習者を対象としたクラスである。週1回のクラスで、グループディスカッションやプレゼンテーション、ロールプレイ、ディベートなどを学生が行うことが多い。そのため、履修者には積極的に授業に参加することが望まれる。

<J5 聴解・会話>

担当者名：<春学期> 高嶋幸太

<秋学期> 金庭久美子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：<春学期>1名 <秋学期> 3名

使用教材：オリジナル教材

コースの目標

初中級修了レベルの学生を対象としたコースであり、日常生活における様々な場面での聴解会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などをきちんと発表出来るようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

発表活動では、トピックを設定し、スピーチを毎週行った。「聞く活動」「やりとり」では、テキストを用いて、聴解練習やロールプレイ練習などを行った。あわせて、授業の始めに前の週の復習としてディクテーションのクイズも行った。また、テキストの課が終わると、ミニドラマを作成・発表する課題も実施した。

<秋学期>

教材の中から「勧誘」「許可」「提案」の機能を取り上げ、カジュアルな場面およびフォーマルな場面で用いられる表現を導入練習し、会話を聴き取る練習も行った。毎回授業冒頭に前回のクラスで導入した表現のディクテーションやロール・プレイをさせて、重要な表現の定着を図った。ロール・プレイのあとでミニドラマの SCRIPT を提出させ、正確に適切に表現が使われているか確認した。グラフを使ったプレゼンテーションを 2 回と、時事問題のスピーチを 1 回行った。今学期も学生がキャンパスで日本人学生と接する機会がないことから、グラフを使ったプレゼンテーションと時事問題のスピーチの際に日本人ボランティアに参加してもらい、ディスカッションを行った。さらに、日本人学生とロール・プレイも行った。期末テストは、会話の内容を聞き取るテストとロール・プレイのテストを実施した。

結果と課題

<春学期>

聴解練習や会話練習などを多く行うことができたと思う。また、受講者が 1 名だったため、スピーチなども、毎回テーマを変えて、さまざまな内容を発表してもらうことができた。聴解においても、履修者が内容を理解できなかった箇所は繰り返し聞き返したので、モデル会話に触れる機会を多く持つことができたと思う。今学期においては、授業形態を変更したことや、7 月にボランティア学生を募集しても集まらなかったことなどから、教員以外の話者とやりとりをする機会がなかった。今後はボランティアが参加できるような日程で学生を募集し、会話の練習ができればと思った。

<秋学期>

最初はオンラインでスタートしたが、学期途中から 2 名は対面で参加できるようになり、1 名はオンラインでミックス型の授業になった。時折音声ハウリングしたり電波が途切れたりすることもあったが、3 人が協力してくれたおかげで無事予定通り授業を行うことができた。

学生は 3 名全員大学院生ということで、グラフを使ったプレゼンテーションを 2 回行った。1 回目は一般的な統計のグラフで練習をしたが、2 回目は自分の専門のグラフや自国で

話題になっていることを示したグラフを使って発表練習をした。院生としてふさわしい表現を学ぶことができたと思う。時事問題のスピーチでは自国で問題になっていることを取り上げ、日本人ボランティアにそれについてどう思うか、どうしたらいいか問い、ディスカッションを行うことができた。日本人学生が来ることを1回目はためらっていたが、実際にリアルな日本人学生と話すことで、自信がついたようだ。そのおかげで学生たちの意欲は上がり、2回目の活動の準備は熱心に取り組んだ。毎回行うディクテーションは、最初は会話の末尾のモダリティ部分をほぼ書き起こすことができなかったが、次第にその部分にも注目するようになり、実際のロール・プレイの際にもそれらの表現を使っていることが観察された。地味な練習だが効果はあると思った。

今後の課題は、聴解教材の扱い方である。最初は教材の順番通りに行ってみたが、聴解練習では学生がなかなか聞き取れず予定通りにいかなかった。学期の後半は順番を変えて記述で答える聴解問題は最後にしたりしてみた。学生によって理解に差があると思うので、次回も工夫してみたい。

<J6 聴解・会話>

担当者名：<春学期>aクラス：高嶋幸太、bクラス：小林友美

<秋学期>鹿目葉子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：<春学期>aクラス7名、bクラス6名 <秋学期>4名

参考教材：瀬川由美・紙谷幸子・北村貞幸『ニュースの日本語聴解 50』スリーエーネットワーク 鎌田修他『中級から上級への日本語なりきりリスニング』the Japan Times など、生教材（インターネットニュース）

コースの目標

中級前半修了レベルの学習者を対象として、実質的な運用能力の育成を目指す。聴解では、時事問題をテーマに、正確に把握できるようになることを目標とする。会話では、相手や場面にふさわしい日本語が流暢に話せるようになることと、プレゼンテーションにおいては、アンケート調査を行い、その結果について比較しながら考察を行うことを目標とする。

授業の方法

<春学期>

(aクラス)

聴解では、隔週でニュース音声を聞きつつ、内容把握をし、最後にクラスで話し合いをするという形で進めた。会話では、普通体で話している音声を聞き、それに基づいて会話練習を行った。また、毎週ディクテーションクイズをしたり、課が終わるごとに扱ったテーマに関してミニ発表を実施したりもした。あわせて、わかりやすい構成になるよう意識してもら

い、2度プレゼン発表も行った。

(b クラス)

14回の授業ではディクテーションの小クイズ、ニュースの聴解練習、会話、プレゼンテーションを行った。毎回、会話のテーマに関連した話題の聞き取り練習を宿題として与えており、事前に自習用音声教材を聞いてくるように指示した。宿題の確認のため、授業開始時にディクテーションの小クイズを実施した。ニュースの聴解練習は全6回実施した。会話では会話内容の聴解練習を行った後、聞き返しをする練習を行い、最終的には教材の会話と同じ話題でペアで発表させた。また、プレゼンテーションは、サンプルのPPTで練習を行った後、独自のテーマのアンケート調査を行い、その結果を比較しながら発表するというものだった。期末テストでは、聴解はニュースの聴解テスト（Blackboardで実施）、会話テストは調査結果をまとめたプレゼンテーションを実施した。

<秋学期>

授業は全14回あり、途中からミックス型となったが、最終的にはZoomのみでの授業実施となった。14回の授業ではディクテーションの小クイズ、ニュースの聞き取り、会話、プレゼンテーション、日本人学生との交流活動を行った。授業開始時のディクテーションクイズでは、クイズ実施前に、場面に関する情報をpptを使って説明した。クイズ実施後、ニュースの聴解練習を行った。聴解後に、トピックについてディスカッションをしたり、学生の国の最近のニュースを話してもらったりした。また、youtubeや画像を使って情報共有もした。

ニュースの聴解には、市販教材や生のインターネットニュースを使用した。期末テストでは、ニュースの聴解テスト（Blackboardで実施）を行った。

次に、会話ではウォーミングアップとしてトピックについて話すことから始めた。その後、会話内容の聴解練習を行った。聞き返しをする練習や言い回しの確認を行った後、教材の会話と同じ話題で会話を作ってもらい、ペアで発表してもらった。その際、日本人ボランティアにも参加してもらった。プレゼンテーションでは、ppt内に書く項目、構成、レイアウトをはじめ、プレゼンテーションで用いられる表現方法、アンケート調査の方法について説明した。プレゼンテーションの成果はテストとして発表してもらった。

また、毎回、会話で取り扱う課の聞き取りを宿題として与えた。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

聴解では、さまざまな教材からニュースを聞き取ったのだが、やはり学生にとってなじみのあるテーマのほうが活発に話し合いをしていたので、トピックの選定が重要だと感じた。

また、普通体を用いた会話では、最初の頃はなかなか丁寧体が抜けなかったのだが、時間が経つにつれて、くだけた表現を使いこなせるようになっていった。今回は、社会状況の変化に伴い、対面とオンライン授業が切り替わることが多々あったため、学生ボランティアとの会話練習ができなかった。今後は、状況を踏まえつつ、ボランティアとの交流が行えるようなスケジュールでボランティア学生を募集できればと思う。

(b クラス)

常に出席していた学生は4名で、出席率、課題の提出率は良好であった。ディクテーションはプライベートチャットで提出をさせたが、回を重ねるごとによく聞き取れるようになり、聴解力の向上がうかがえた。ニュースは学生の関心を持つテーマを選択し、関連した画像や動画を見せるなどの工夫をしたこともあり、ディスカッションでは、活発な意見交換ができた。会話では、カジュアルな表現を取り扱ったが、話体については丁寧体と混合してしまう学生もいた。会話は録音し、全体でフィードバックをしたが、その他に、繰り返しの練習や意識化の必要性を感じた。今学期は、昨年度の反省であったプレゼンテーションの準備時間の確保や、調査例の提示等は改善することができた。反省点としては、ミックス型の授業進行の仕方が挙げられる。Web カメラとマイクなど機材は整っていたが、対面参加の学生の声が小さく、オンライン参加の学生に声が届かず、会話練習のやりとりがスムーズにいかない場面がしばしばあった。その都度、大きな声で話すように促したり、参加形態の学生同士をペアにしたりしたが、ミックス型授業の制約、授業進行の難しさを感じた。今後も、聴解・会話のミックス型授業の進行の仕方について検討していきたい。

<秋学期>

(a クラス)

学生達は、とても真面目で熱心に活動等に取り組んでいた。しかし、時差による体調不良、専門科目での忙しさ等が重なり、途中で授業への参加を断念する学生がいたのは残念であった。

話すことを主目的とする学生達だったので、聴解の際も、必ずトピックに関して話す機会を与えた。学生達にとって、既習の語彙等を使う練習ができたこと、自分の考えをクラスメイトに伝えることができたことは良かったと思う。授業の回数を重ねるごとに、会話力のみならずディクテーション力も上がっていったことが窺えた。また、日本人学生ボランティアとの交流は、友達作りに役立ったようである。プレゼンテーションについては、ppt、発表練習等しっかりと準備していた。アンケート調査結果の分析・考察もよくできていた。

課題としては、会話教材のより効果的な使い方を研究すること、少人数の場合の会話練習や発表の仕方を工夫することである。

＜J7 聴解・会話＞

担当者名：＜春学期＞a クラス：山内薫、b クラス：任ジェヒ

＜秋学期＞井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：＜春学期＞a クラス 5 名、b クラス 5 名 ＜秋学期＞2 名

参考教材：荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤眞理子『日本語超級話者へのかけはしーきちんと

伝える技術と表現—上級から超級へ』スリーエーネットワーク
生教材（動画など）

コースの目標

中級修了レベルの学習者を対象とし、アカデミック場面での聴解能力および会話能力の育成と、場面にふさわしい日本語の習得を目指す。生の教材を用い、日常生活だけでなく、講義や講演などやや専門的な内容や社会問題、時事問題についても細部まで正確に把握し、流暢に意見が言えるようになることを目標とする。

授業の方法

＜春学期＞

授業は聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解においては、経済、社会問題を取り扱った動画を視聴し、内容把握と語彙や表現の確認を行った。4 つのテーマのうち、2 つは 2020 年度以前に扱った教育とファッション開発業界に関するテーマ、2 つは新型コロナウイルスの影響を受ける教育と冷凍食品開発業界に関するテーマを扱った。また、動画視聴後は、テーマである社会問題について ab クラス合同でディスカッションを行った上で、レポートとして内容要約と意見文、及びリライトの提出を課題とした。会話においては教材で、他者に伝わるような表現や展開を考えながら練習を行った上で、ロールプレイとプレゼンテーションを課題とした。期末テストとしては、①プレゼンテーション及び②DVD の内容要約を実施した。なお、2 回のプレゼンテーションは ab クラス合同で、パワーポイントを用いて行った。

＜秋学期＞

聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解では、経済、社会問題を取り扱った動画を視聴した。動画を視聴する前にキーワードや語彙リストの確認を行い、視聴後には内容について理解できたことを全員で共有した。動画は、日本の塾教育、アパレル業界の取り組み、冷凍食品業界の取り組み、コロナ禍の教育の 4 つの内容を取り上げた。また、視聴したテーマについてディスカッションも行い、内容の要約と意見文の提出を課題とした。会話は、語彙や表現などを学び、内容に即したテーマで、プレゼンテーションを 2 回行った。会話教材の新

出語彙の確認問題は、blackboard のテスト機能を使用し、3 回実施した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

実質 2 名の小規模のクラスとなったが、2 名とも学期末まで遅刻や欠席がなく、発言や意見も積極的に交わされ、協働して授業に取り組むことができていた。課題の提出に関しても遅延することなく、毎週、真剣に取り組んでいた。また、ab クラス合同でのディスカッションやプレゼンテーション活動においては、質量ともに充実した意見交換が行われ、満足している様子が窺えた。2 名とも日本語のアカデミックレベルが高く、特に聴解においては、語彙リストは必要なく、要約においてもキーワードやキーフレーズを掴み、的確な表現を用いながら作成することができていた。一方で、プレゼンテーションにおいては、パワーポイントの作成や発表練習に十分な時間を取ることができなかった。対面やオンラインの切り替えが要因の一つとも考えられるが、今後、時間配分においては、授業形態に影響を受けないように、より工夫していく必要がある。

(b クラス)

b クラスも 3 名と小規模で、学生たちの活発な発言により成り立つクラスであった。学生全員がビジネス専門の院生で、興味関心が近いということもあり、教室外（専門科目で用いられている表現など）の日本語を教室内で話題にするなど、積極的に日本語と関わろうとする姿勢が多くみられた。そのおかげで、テキストの表現だけでなく、学生たちの日常生活の中の「聞く」「話す」日本語についても、意見交換や知識情報の共有ができた。個人的には、学生主導の授業が如何に重要であるか考えさせられるクラスであったと思う。また、緊急事態宣言により授業形態が複数回変わったにもかかわらず、学生間の連携によりトラブルなく、スケジュール通り授業を進めることができたのも今学期評価できる点である。一方で、授業形態の切り替えにともなう課題もみられた。b クラスでは、オンライン授業になってから、ディクテーションとレポートの提出先をブラックボードあるいは Zoom のチャットと 2 か所用意していた。ブラックボードのシステムエラーなどにも対応できる、より効果的な方法だと判断していたが、実際には学生に混乱を招いてしまった。学生に寄り添って、より正確で簡潔な指示をする必要があったと反省している。学生にとってわかりやすい指示と説明とは何かを考え、実践にいかすことを今後の課題としたい。

<秋学期>

履修者 2 名は大変熱心に授業に参加しており、課題への取り組み方も良かった。学期の前半では、語彙リストがなければ動画の内容把握が難しかったようだが、視聴する前に、どんな内容かを推測し、語彙リストを確認してから動画を視聴した。視聴後に、学生に取っても

らったメモを基に全体で内容の確認を行うことで内容の理解が深まったのではないかと考える。回を重ねるごとに内容のポイントの抑え方もわかってきたようで、後半は語彙リストなしでも内容把握ができるようになった。プレゼンテーションにおいても、テキストのテーマをもとに各自が興味を持ったテーマについてしっかり調べてきて、発表に臨んでいた。また、発表後に質疑応答やディスカッションをする時間を設けることで、お互いのテーマから新たな興味関心が芽生え、意見交換が弾んでいたように思う。履修者が2名だったため、きめ細やかな指導ができたのではないかなと思う。

今学期は、対面での参加学生が1名、オンラインでの参加学生が1名のミックス型授業を実施した。4週目から授業実施方法の制限レベルが1に変更になり対面授業が再開となったが、対面でありながらZoomでの授業方式に学生は戸惑ったようである。ミックス型授業を採用するとわかった時点で、日本語クラスでのオンライン授業の位置づけをしっかりと説明する必要があったと痛感している。今後は、オリエンテーションの段階から、対面で参加する学生にしっかりと説明し、ミックス型授業に対する理解を促したいと思っている。

2021年度 J8 授業記録

コース概要

J8は、既に高度の文法・漢字・語彙を習得しており、大学における学習・研究が十分日本語で行える学生を対象としたコースであり、様々な目的に沿った科目を展開している。展開している科目は、大学や大学院での学習、研究生活のための日本語能力を伸ばす科目と、実社会の中で求められる日本語能力を伸ばす科目、日本語そのものについての知識を身につける科目など、多岐にわたっている。また、J8で展開する科目は、短期留学生のみならず、学部や大学院の正規学生（日本語を母語としない学生）の履修も可能であり、様々な背景を持つ学生が、一緒に学ぶ機会も提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

<日本の社会と文化A>

担当者名：<春学期>武田聡子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期9名

使用教材：独自教材

コースの目標

社会問題、芸能文化など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それについて理解を深めながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

日本の文化や社会に関わるテーマを選び、それに関する文献を読んだり、映像を見たりする。講義も行うが、主としてテーマについてのディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行い、最後に自分でテーマを決めたプロジェクトワークを発表する。

結果と課題

正規学部生が 9 名でスタートしたが、うち 1 名は欠席が多くなり、最後まで授業に参加したのは 8 名であった。最初のトピックは、学生の興味・関心を知るために、自分が今、最も興味のある日本の文化・社会についてトピックを選んで発表してもらった。これには自己紹介も兼ねた狙いもあり、どのようなことに興味があるクラスメイトがいるのかを知ってもらうためという目的もあった。その発表の後、似たようなテーマに関心がある人たちを 3 つのグループに分けて、それぞれのグループで新たにテーマを決めて、グループ発表の準備をしてもらった。これにより、クラスメイトと親しくなる機会にもなった。様々な学部の留学生がそろい、誰もお互いを知らなかったので、グループでの話し合いは楽しそうに盛り上がっていた。その後は、「鬼滅の刃」ブームについてディスカッションをしてもらったり、「日本が抱える 33 の社会問題」（社会人の教科書）をネットで読んでもらい、その中から最も関心のあるトピックを選んで理由を説明してもらったり、「SDGs」について扱った番組を鑑賞し、その後 SDGs について調べて、自分にできることは何かについて発表してもらった。最後は自分の好きなテーマを決めて、調べて発表するプロジェクトワークを実施した。リアクションペーパーには、普段日本語で発表する機会があまりないと書いている学生が数人おり、クラス活動は役に立ったという声が多く見られた。一方、もっと、クラスメイトとディスカッションをしたかったという声も上がっていたが、学生の発表のたびに、質疑応答とディスカッションをするようにしていたが、もっと一つのテーマに絞り、問題提起から解決策までを皆で一緒に考えるようなディスカッションを取り入れてみるのもよかったのかもしれない。

<日本の社会と文化 B>

担当者名：<秋学期>高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 3 名

使用教材：独自教材

コースの目標

時事問題など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それについて理解を深めながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

日本社会や日本文化に関連するトピックを選択し、それに関する映像教材を見たり、記事を読んだりする。教材から学んだことをもとに、ディスカッションをしたり、ミニ発表などを行ったりし、最後のまとめとして授業テーマに関連したプレゼンテーションを行う。

結果と課題

初回の授業で履修学生から意見を聞き、4つのトピックを選定した。その4つは、①日本のインバウンドビジネス、②日本食文化、③日本の就職事情、④日本的システムであった。

各トピックを3週にわたって取り扱った。基本的には第1週目に、トピックに関連する映像教材を視聴し、ディスカッションを行った。2週目では、文献・記事を読み込んできて、それをクラスメイトと共有する活動で、最後の3週目にはそのトピックに関するミニ発表を行うというものであった。どの週でも、課題を事前にこなし授業に参加する様子が見て取れた。また、ボランティア学生との交流が2回程でき、よい刺激になっていた。

今後の課題としては、発表のテーマが絞り込みにくいという意見があったので、なかなかトピックが決めにくい学生に対しては、個々の関心を踏まえて、方向性を示せるとよいと感じた。

<日本の社会と文化C>

担当者名：<秋学期>丸山千歌

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期3名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本の企業風土、日本的経営、日本式サービスなど日本での就職に関心がある学生にとって有用なトピックをとりあげ、それらの知識を獲得すると同時に、高度な文型や語彙を増やし、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

「日本の企業風土」「日本的経営」「日本型サービス」をトピックとして取り上げ、それぞれの専門家をゲストスピーカーとして招き、ゲストスピーカーの講義を軸として授業を進める。

結果と課題

J6～8の3レベルの学生を対象として開講しTAを配置する科目である。今回の履修者は全員正規学部留学生で、未入国の学生が1名おり、レベル2はミックス型で実施した。授業の流れは例年通り、ゲストスピーカーによる講義の前の事前学習、後の事後学習は基本的に

グループディスカッションや、分担読解の課題を行い、履修者の主体的な学習を促すというものだった。少人数であったことで、学生と TA、教員でディスカッションをする場面が多かった。全体的に非常に学習意欲が高く、学期末まで積極的に取り組んだ。

＜社会の中の日本語 A＞

担当者名：＜春学期＞沢野 美由紀

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名

使用教材：独自教材

コースの目標

流行語擬音語・擬態語など、社会言語学的側面から日本語についての理解を深めるとともに、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

日本社会に対する理解を深めるため、非日本語母語話者が知っておくと役立つと思われる日本語に関するテーマを選び、資料を読んでディスカッションをする形で進めた。課題として、関連する資料を読んで、それをもとに行った調査の結果を発表するとともに、レポートを作成した。

結果と課題

履修者は 9 名で全員が正規学部生である。対面授業からオンラインになり、落ち着いたない状況でもあったが、出席状況は良好であった。

授業で扱う内容は、受講生の希望も取り入れ、いわゆる「バイト敬語」、配慮表現、若者ことば、打ちことば、擬音語・擬態語などをテーマにし、受講生の母語との比較もしながら行った。今回は、若者ことばや、SNS 上で用いられる打ちことばに興味を示す受講生が多く、周囲とのコミュニケーションを良好にするためにそれらを理解したいと思っていたようである。

最後の課題でも、若者ことばや、擬音語・擬態語などについて、それぞれ工夫してアンケート調査を行い発表していた。発表や調査の方法がまだよく理解できていない受講生もいたが、お互いの発表を聞くことによって得るものがあつたのではないかと思われる。

今回は受講生に 2 度ずつ発表してもらったが、2 度目の発表では質問が相次いで時間が足りなくなるほどであった。次回以降は、発表内容を振り返る時間を十分に取り、まとめとして活かしたいと考えている。

＜社会の中の日本語 B＞

担当者名：＜秋学期＞小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 2 名

使用教材：独自教材

コースの目標

役割語、インターネットの日本語など、社会言語学的側面から日本語についての理解を深めるとともに、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

若者言葉、メールの文体、呼称、役割語という日本の文化や社会に関わる 4 つのテーマを選び、授業では、それぞれの概要について講義を行ったり、テーマに関わる論文を読みディスカッションを行ったりして理解を深めた。論文読解のクラスでは、学生に論文の内容をまとめたレジュメを用いて発表させた。また、メールの文体を取り上げたクラスでは、実際にメールを書く練習を行った。役割語のクラスでは、日本語の役割語に関する論文を読解後に、学生の母語の役割語について発表させた。期末レポートは、授業で取り上げた 4 つのテーマのうち 1 つを選ばせ、インタビュー調査をさせてその結果をまとめ分析させた。最後のクラスでは、パワーポイントを用いて期末レポートの内容を発表させた。

結果と課題

正規学部生 2 名が履修した。2 名とも 1 度も欠席することなく、レジュメなどの提出物も毎回期限を守って提出した。2 名の学生は日本語運用能力が非常に高く、各テーマに関わる語彙や表現を導入することで、若者言葉、呼称、役割語それぞれの論文を読解することができた。コースはじめは 2 名ともレジュメの作成に不慣れであったが、5 回ずつ発表させることで、適切なスタイルでまとめることができるようになった。ディスカッションでは、論文の内容を踏まえ、学生の母語と日本語を比較しながら活発に意見を交換することができた。期末レポートはインタビュー調査を通して、1 名は若者言葉をテーマに選び若者言葉の具体例や若者言葉の利点と問題点を明らかにした。もう 1 名は日本語の「あなた」と中国語の「あなた」に相当する二人称代名詞を比較し日中の対称詞運用の違いを分析した。小さいクラスではあったが、2 名とも事前に十分な準備をして授業に臨み、どのテーマについても熱心に取り組んだため、毎回大変活気のある授業になった。残念だったのは、日本人学生にインタビューさせる機会としてビジターセッションを設けたが、日本人学生の都合が悪くなりクラス当日にキャンセルになったことである。

＜論文読解の技法＞

担当者名：＜春学期＞（池袋）谷啓子、（新座）三浦綾乃

授業コマ数:週1コマ

履修者数:春学期（池袋）5名、（新座）0名

使用教材:独自教材

参考教材:浜田麻里他、1997、『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版。

コースの目標

様々な分野の学術論文を読み、日本語の学術論文の構成をつかむとともに、論文で用いられる様々な表現を理解することに重点を置きながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

（池袋）

今期は全14回中、4回がZOOMと対面のmix授業、残り10回がZOOMによる双方向オンライン形式であった。初回に論文とは何か？を話し合ってから論文を探す手法を学んだ。第2回目以降は、専門分野で自分が興味のあるテーマの論文を持ちよって紹介し、その中から担当する論文を1本選んだ。この担当論文と教師が用意した共通論文を素材に「論文の構成」や論文特有の表現を確認していった。

具体的には独自教材で各部の役割や表現を確認、練習問題を経て担当論文の分析(課題)、という流れであった。分析した担当論文についてグループ内で発表し、その後指定の「担当論文シート」に記入・提出してもらい、コメントをつけて返却した。

後半は担当論文を先行研究の役割、データの種類、調査方法などの面からさらに分析した。最終課題として、担当論文についての詳細なレジュメを作成し、口頭発表と質疑応答を行った。口頭発表では聞く人の理解の助けになるような資料を用意したり、専門用語を説明したりしながら分かりやすい発表を心掛けていた。

教材面では、昨年度のオンラインスタートよりオンライン対応できる教材整備を進めてきた。今期はそれを微修正し、さらにCiniiによる検索方法の動画を新規作成、検索に自信がない学生に見てもらうようにした。

結果と課題

（池袋）

今期は学部生4名、特外生1名の計5名であった。それぞれの専門が異なっていたため、様々なタイプの論文に出会うことができた。全員丁寧に課題に取り組み、目標の学びは概ね達成できたと思われる。

ほとんどがZOOMであったが、デジタル化した論文にマーカーで色をつけたり、コメントをつけたものを発表に使用したりしたので細かい論文の字が個々のパソコンで見やすく、オンラインならではの良さが感じられた。一方、色付けなどの作業が不得手な学生もいるの

で、その場合は担当論文シートに書く方法でもよしとした。

現状では、数本用意した担当論文候補から 1 本に絞っているが、学生本人に余力があれば数本並行して読んでいき、近しいテーマの論文での違いを見つけるのも学びになるのではないだろうか。

<論文作成の技法>

担当者名：<秋学期>（池袋）谷啓子、（新座）三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期（池袋）7 名、（新座）0 名

使用教材：独自教材

参考教材：大島弥生他、2014、『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 第2版』ひつじ書房。

浜田麻里他、1997、『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版。

北原保雄監修（独）、2009、日本学生支援機構・東京日本語教育センター『実践研究計

画作成法』凡人社。

コースの目標

卒業論文や学術論文など、レポートよりも長く学術学術的な論文の書き方について学ぶことに重点を置きながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

（池袋）

今期はオンラインで開講し、mix 形式を経て完全対面に移行した。前半は論文の探し方の指導後、各自の専門分野に関する論文を探し、担当論文を 1 本決めて分析、論文の大まかな構成を把握した。専門や関心の異なる分野の論文に触れることで、論文にも様々なパターンがあることを確認し、並行して論文特有の日本語表現を学んだ。

後半は、研究計画書に必要な要素や表現を学びながら、各自が取り組みたい研究を計画書にしていった。数人の学生は既にテーマが決まっていたが、それ以外の学生はテーマ探しからのスタートであった。先行研究の収集と整理を行いながら課題文作成→研究目的文作成、動機・背景作成、研究方法、研究意義とすすめた。

テーマ探しではピア活動を行い、作成した構想マップにお互いコメントし、修正点を見つけて改善につなげていった。その際、オンライン環境に配慮し、マップ作業は紙ではなく JamBoard を利用した。なお、オンライン対応として、昨年度より使用している「担当論文シート」「研究計画フォーム」を引き続き使用し、これらシートの共有や課題の提出には

blackboard を利用した。

最終課題は作成した研究計画書の発表である。全員、項目にそって計画書を完成させ、指定時間を守って簡潔に説明が出来た。また、各自クラスメイト1名の発表のコメント役となり、発表への質問やコメントをしてもらった。事前にブラックボードで計画書を共有し、目を通して行くことになっていたのもスムーズに的確なコメントがされていた。

全員初めての計画書作成であったが、ステップをふんで進めることで一定のレベルのものが完成したと思われる。振り返りとして、先行研究については、テーマによってはまだ論文になっているものが少ないものもあり、その場合専門誌の記事等にもあたることをすすめた。また、研究方法については文献調査にする学生が多かった。各専攻で今後さらに学んでいくと思われるが、インタビュー調査等他の方法も併せて行くと深みが出そうなものにはコメントした。

結果と課題

(池袋)

今学期の履修者は7名であった。1名が履修中止、残った学生は全て専門が異なる学部生2年～4年生で、そのうち3名は大学院を志望しており、いずれ研究計画書を作成する必要性から履修していた。皆真面目に参加し、課題の提出状況も良好であった。

授業では専門論文の分析の発表やマップ作業等でしばしばブレイクアウトに分かれたが、小グループでクラスメイトと話している様子を見ると、対面活動が制限される学生生活の中での貴重な交流にもなっていたように思う。後半、実際に計画書作成に入ってから個別作業が増え、皆集中して取り組んでいた。毎回指定の作業ができたところまで Blackboard に up してもらい、フィードバックを戻した。授業では順番にブレイクアウトに入ってもらい、教師と双方向で確認や修正を行った。7名なので1人当たりの時間は短くなるが、個別だと相談がしやすいように必要な時間だと感じた。

計画書の作成はステップをふんで進めていくので、1回欠席すると Blackboard で課題指示をしてもこちらの意図が十分伝わらず勘違いして作業をしたり、作業が遅れたりしてしまうことがあった。次の回に個別に説明をしたが、時間も限られるため工夫したい点である。

本科目の計画書は授業内の練習として作成したが、履修者には2年生もおり、調査の実現性を考えた時に本当にできるかどうか(例: 参与したい現場に入れるか、被験者が確保できるか等)は深く検討せず作成している。そのため、倫理性も含め実際にはより慎重に進めなければならないものもあった。今後それぞれの専攻で学びを深めてもらいたい。

<キャリアの日本語A>

担当者名: <春学期> (池袋) 井上玲子、(新座) 三浦綾乃、<秋学期> (池袋) 佐々木藍子

授業コマ数: 週 1 コマ

履修者数：春学期（池袋）6名、（新座）0名、秋学期（池袋）4名

使用教材：『立教就職ガイド 2022』

『外国人留学生のための就活ガイド』

（参考資料『外国人留学生のための日本就職オールガイド』）

コースの目標

日本の就職活動の全体の流れや要点を理解するとともに、エントリーシートの書き方（効率的な構成、適切な文体や語彙等）、面接で求められる日本語（適切な応対、マナー）など、実質的な日本語スキルの獲得を目指す。

授業の方法

＜春学期＞

授業では、『立教就職ガイド』、『外国人留学生のための就活ガイド』を中心に、他教材、就活支援サイトの情報などを基に、日本での就職活動に関する基本的な流れ、知識等を学びながら、実際に「自己PR」や「志望動機」といったエントリーシートで出題される内容を分析し、書く練習をしたり、面接の練習を行ったりした。さらに、専門の方にお越しいただき、現在の日本企業の動向、就職状況などを講義していただいた。

＜秋学期＞

本授業は3つのステップに分けて授業を進めた。第一ステップでは就職活動の概要と流れ、自己分析を取り扱い、日本の就職活動について理解を深め、自己分析を始めた。第二ステップではエントリーシート、履歴書の書き方、書類送付の仕方について扱い、就職活動で必要な作文スキルの向上を目指した。第三ステップでは第一ステップ、第二ステップで学習した内容を踏まえ、就職活動の面接の形式について学習した。具体的には、よく出題される質問の回答について1つずつ検討・練習していき、集団面接の練習を行った。また、適宜企業分析やビジネス敬語の練習をするほか、ゲストスピーカーとして株式会社 i-plug の田中伸明氏を迎えるなどし、就職活動への意識を明確にした。

結果と課題

＜春学期＞

（池袋）

履修者は6名であったが、1名は長期欠席が続いたため、5名で授業を進めていった。受講者全員が日本での就職を希望しており、このクラスの受講の目的が一致していたため、学生は同じ目標に向かって協働活動に取り組んでいった。

学期の前半は十分な自己分析ができておらず、ESや志望動機をどのように書いたらいいのかわからない学生が多かった。また、ペアやグループワークでもどのように修正したらいい

いのかかわらず、話し合いが進まなかった学生もいた。しかし、自己分析や ES、志望動機などの課題を一つ一つこなすことで、作成のポイントがわかるようになり、グループ活動の中でもクラスメイトへのコメントがたくさん出るようになっていった。宿題として各自で考えた後、ペアやグループで確認し合う時間を設け、何度も修正を繰り返したことで、学生自身が書いた内容をさらに深めることができたのではないかと考える。また、ゲストスピーカーの先生のお話では、就職活動に臨む姿勢や、就職で必要とされる情報やスキルをどのように吸収し、活かしていくかを知るいい機会となった。

今学期は対面とオンラインのミックス型で授業がスタートをした。途中、履修学生全員がオンラインで授業に参加しなければならない状況となったが、学生は、協力的な姿勢で授業に臨んでくれた。クラスでは就職活動におけるすべての情報を網羅することはできなかったが、基本的な流れは押さえることができたのではないかと思う。各々が今後どのように大学生活を過ごすかによって就職活動の結果が違ってくるであろう。クラスでの活動は終了したが、将来の就職活動を意識しながら、引き続き準備を進めてもらいたい。

<秋学期>

(池袋)

今学期は正規学部生が 3 名、院生が 1 名の小さなクラスであった。非常にまじめな学生ばかりで、出席はもちろんのこと、課題にもしっかりと対応していた。どの学生も卒業後は日本での就職を希望しており、熱心に就職活動の準備に向き合おうとする姿勢が見られた。特にエントリーシートの作成や面接の練習では、日本語の力も直結するため苦戦している学生もいたが、全員最後までやり遂げることができた。また、この授業では授業の内容とは別に即興スピーチの練習を設けており、毎回異なるテーマについてのスピーチをペアで行い、互いに FB をしあった。そして、各自スピーチは録音し、録音したものを聞いて内省するという課題を課していた。この練習を開講後から行っていたため、面接の練習に入るころには、人前でまとまりのある話をするということに大分慣れており、スムーズに面接の練習へと移行できた。クラス全体でも授業を重ねるたびに、学生同士も仲良くなり、ペア練習も非常に実りのある活動となった。また、授業終後半になるとみんなで話しながら、一緒に帰っていくという微笑ましい光景も見られるクラスであった。ただ、課題提出の期限については、たまに遅れる学生も見られた。この点については、事前にきちんと学生自身でしっかりとマネジメントするよう声掛けなどが必要であったと考える。今後は方法なども検討し、効果的な方法を探っていきたい。

<キャリアの日本語 B>

担当者名：<春学期> (池袋) 小松満帆、<秋学期> (池袋) 井上玲子、(新座) 三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

受講者数：春学期（池袋）7名、秋学期（池袋）6名、（新座）3名 使用教材：独自教材
--

コースの目標

日本の就職活動の全体の流れや要点を理解するとともに、エントリーシートの書き方（効果的な構成、適切な文体や語彙等）、面接で求められる日本語（適切な応対、マナー）など、実質的な日本語スキルの獲得を目指す。

授業の方法

<春学期>

就職試験に出題される国語分野の知識を増やすことを目的とした。具体的には、同義語／反意語／同音異義語、2語の関係、ことわざ／慣用句／故事成語、難読漢字、部首、仮名遣い、名言／名句、四字熟語、敬語、文法、文学作品、詩歌、古文、文章並べ替え、読解問題を扱い、就職試験問題集を元に作成した教材を用いて、授業を行った。また、毎回宿題を課し、次週に学習する内容について問題に解答するという予習の形式にした。毎回のクラスでは、宿題の答え合わせをしながら、解説をしていった。さらに、授業の初めには、前週に学習した内容について問う小テストを **Blackboard** を使用して行った。学期末には、模擬テストと期末テストを行い、いずれの結果も成績に含めるものとした。

<秋学期>

（池袋）

就職試験（SPI）の言語能力に関する分野から、同意語、反意語、慣用句など語彙力に関するテーマや文章読解に関するテーマなどを選び、練習問題を通して必要な知識や問題に対応するためのストラテジーを身につけさせた。授業冒頭には前回の授業内容に関わる小テストを行った。また、学期末には、学習範囲を網羅した模擬テストを行い、答え合わせを通して不十分な点を各学生に認識させ復習を促したうえで、その翌週に期末テストを実施した。

（新座）

就職試験（SPI）の言語能力に関する分野から、同意語、反意語、慣用句、敬語など語彙や文法に関する問題や文章の読解問題を通して、就職試験に必要な知識や問題に対応するためのストラテジーを身につけさせた。授業冒頭には前回の授業内容に関わる小テストを行った。また、学期末には、学習範囲を網羅した模擬テストを行い、答え合わせを通して不十分な点を各学生に認識させ復習を促したうえで、その翌週に期末テストを実施した。テストはすべて **Blackboard** 上で行った。学期中には自分が興味を持ったことわざと文学作品のミニ発表も行った。さらに、エントリーシートの書き方を知りたいという学生の要望があった

ため、エントリーシートの概要を説明し、自己 PR 文を書く練習もした。

結果と課題

<春学期>

正規学部生 7 名が履修し、そのうち 1 名が自国からオンライン出席、6 名は日本にいたため、ミックス型授業の際には教室に来て授業に出席した。

授業内容は、毎回学ぶ内容のボリュームが大きく、宿題も予習形式だったため、自分で調べて解答しなければならないことが多く、大変なこともあったと思うが、全員が期日までにきちんと宿題を提出し、また、小テストの結果もよく、毎週の学習リズムが身についた、非常に真面目なクラスであった。全体的に日本語力も高く、教材にある内容に限らず、積極的に質問や発言の出る、意欲の高いクラスであったと言える。また、疑問に思った点については、納得がいくまで質問をしたり、考えたりする学生が複数名おり、互いに刺激を与え合う、理想的な授業環境であった。

ただし、就職試験に出題される内容を学ぶという授業内容から、どうしても試験対策のような個人活動が多くなり、クラスメイト同士の協働という場面があまり作れなかった。宿題の答え合わせを全体でする前に、グループで答えを確認するという活動を入れたのだが、後半になり、時間的な余裕がなくなったことで、そのような活動が減ってしまった。今後は、学期を通してクラスメイトとともに学んでいく意味や価値を伝えられるよう、ピア・ラーニングを意識した教室運営をしていく必要がある。

<秋学期>

(池袋)

今学期は、正規学部生 6 名が本コースを履修した。就職試験を意識している学生、日本語力の向上のために受講した学生と、本コースの履修目的は様々であった。学期の後半から欠席が目立つ学生がいたが、大半の学生は真面目に授業に出席し、復習予習も十分に行って授業に参加していた。また、毎回の小テストにもしっかり準備をして臨んでいた。模擬テストでは芳しい結果でなかった学生もいたが、期末試験に向けてしっかり復習したようで、期末テストの結果は、全員非常に良好であった。

昨年度の模擬テストでは、テスト後に解答の解説行うために、解答用紙 (Excel ファイル) に答えを入力して Blackboard に提出してもらったが、学生からは Blackboard のテスト機能のほうがやりやすいという意見があったため、今学期は、小テストと試験はすべて Blackboard のテスト機能を使用し、オンラインでテストを実施した。オンラインテストだと、すぐに解答をチェックし、疑問点を確認しやすいようであった。

学期末にコース全体の感想を聞いたところ、クラスで扱った内容については、難しい学習項目もあったが、就職活動に役立つ内容であったとのことである。今学期は、3 週目から 4 名の学生が対面での授業となり、オンラインと対面のミックス型授業を実施した。全員がオ

オンライン授業での参加の時は、Zoom のブレイクアウトルームを使用し、学生同士の話し合いの場を設けることができたが、ミックス型授業では、感染予防対策の観点から、なかなか学生同士の話し合いの場を設けることが難しかった。また、対面の学生の発言が、オンライン参加の学生に聞こえないということもあったことから、教師が対面の学生の発言を繰り返して解説を行うという方法を取った。コース最後の振り返りで、クラスの進め方について学生からは特に言及はなかったが、対面の学生とオンラインの学生が双方向に参加できるような授業方法を模索していきたい。

(新座)

履修者は 3 名で、全員対面授業に参加することができた。実際に日本での就職を考えている学生はおらず、「日本の就職試験について知りたい」「日本語の知識を増やしたい」「自分の日本語能力を試したい」という要望の学生であった。覚えなくてはいけない内容が多いため、模擬テストと期末テストではどれだけ勉強に時間を割けたかが結果に顕著に表れた。

履修者数が少なく、真面目に課題に取り組む学生達であったためスムーズに授業を進めることができた。毎回小テストと宿題プリントの解説だけでは授業がワンパターンになってしまうと思い、古文・文学作品のテーマでは NHK for School の動画を見たり、ミニ発表をさせたり、エントリーシートの自己 PR 文を書いたりする活動を適宜加えた。学期末に「自己 PR 文を書くのは難しかったが、いい経験になった」「もっと日本の和歌について知りたくなった」「夏目漱石の作品を読もうと思う」「敬語の使い方をもう一度練習できて良かった」など前向きなコメントを学生から聞くことができた。この授業を通して各々の学生の興味が刺激され、日本語の知識欲が満たされたように思う。

<ビジネスのための口頭運用力 A>

担当者名：<春学期> (池袋) 佐々木藍子、(新座) 三浦綾乃

<秋学期> (池袋) 小林 友美、山内 薫

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 (池袋) 12 名、(新座) 0 名、秋学期 (池袋) 5 名

使用教材：独自教材

参考教材：『人を動かす！実践ビジネス日本語会話上級』、『BJT 模試と対策』

コースの目標

日本語の談話の特徴について理解を深めるとともに、敬語や待遇表現など、日本企業で働く際に必要となる口頭運用力を身につける。

授業の方法

<春学期>

(池袋)

本授業ではビジネスシーンでよくみられる「会議」「電話対応」「商談」の場面を取り上げ、さらにそれぞれの場面を細分化し、そこで必要な表現力、対応力を養成することを念頭に授業を行った。各回の進め方としては、まずその回の場面設定を提示し、プレタスクとしてロールプレイを行った。プレタスクで自分がどこまで対応できるのかを確認した上で、その場面でどのような表現や対応が必要かを考えた。そして、ブランクのあるモデル会話を提示し、一度学生自身でブランクにあうよう穴埋めをした。それからモデル会話を流し、聴解練習すると同時にモデル会話を完成させる。そして、そのモデル会話を使って、口頭練習を行った後、プレタスクで行ったロールプレイを再度行い、まとめとした。また、授業では場面ごとの会話練習と並行してビジネス場面の聴解力を養うため、ビジネス日本語能力テストの聴解問題も行った。

<秋学期>

(池袋)

本授業では、ビジネスにおける三つの基本的な場面（「会議」「電話対応」「商談」）を設定し、各場面における口頭運用力を育成するように進めた。具体的には、「会議」は①提案・申し出、②説明（プレゼンテーション）、③賛成・反対、④質疑応答、「電話対応」は①基本、②応用、「商談」は①指示・確認、②訪問、③依頼・断り、④お詫び（クレーム処理）を取り上げた。流れとしては、各場面において、基本的な表現を学習した上で、適切な言語行動及び非言語行動、及び社内と社外の表現の異なりや配慮する視点とは何かについて考える時間、及び意見交換や議論をする時間を設けた。その上で、ペアあるいはグループでロールプレイを作成し、発表を行った。また、三つの基本的な場面の学習後に、まとめのロールプレイテストを行った。さらに、ビジネス場面での聴解力及び対応力を育成するため、定期的にビジネス日本語能力テストの聴解問題を扱い、期末テストではビジネス場面の聴解を10問出題した。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

履修者は正規学部生が12名で、2年生から4年生と幅広い学年で構成されたクラスであった。ビジネス日本語の授業ということで、ほとんどの学生が卒業後は日本での就職を希望している、あるいは、考えているという学生であった。そのため、意欲的に自身の日本語力を高めたいという意志を持って履修していた。

この授業では、毎回敬語の運用力がネックとなるが、今学期の学生達も最低限の敬語の知識はあるものの、曖昧な部分があったり、あまり運用する機会がないことから特定の表現しか使えなかったりという状態であった。また、ビジネスの場面も経験がないため、提示され

た場面でどのように対応すべきか困ることも多く、授業開始時は非常に苦戦していた。しかし、授業が進むにつれ、少しずつビジネス場面や敬語の使用に慣れ、学期の後半になると既習事項を適宜取り入れ、新しい場面のロールプレイにも対応できるようになっていった。学生自身もこの授業での学習を通し、自身の日本語力がブラッシュアップされてくことを実感しているようであった。ただ、一方でこれまでに使用してきた日本語の間違った表現の癖がなかなか直らない学生もいた。教師のFBを真摯に受け止め、自身の日本語の使用としっかりと向き合ったかどうかにより、日本語の正確性に差が出たようである。今後は、このような学生の対応もしっかりと検討していきたい。

<秋学期>

(池袋)

本授業は、前半(4回)と後半(10回)で2名の教員が担当した。交代時には担当者間の引継ぎを円滑に行うことができ、学生に混乱はみられなかった。履修生は正規学部生3名、正規大学院生2名であった。母語話者に近いレベルの日本語力を有している学生がいる一方で、助詞や活用の間違いが硬直化している学生がおり、日本語力に多少差異のあるクラスであった。全体的には日本語力が高く、使用教材の表現は既習であることが多かったことから、理解力や運用力を測りつつ、段階的に教材の難易度を上げたり、より難易度の高い表現を紹介するなど工夫した。

また、履修生間の関係性がよく、意見交換や議論においては発言や質問を積極的に行い、活気のあるクラスであった。全員が対面の授業で欠席者も少なかったことから、授業を通じて人間関係を構築している様子がみられた。また、履修生の内1名はすでに日本での就職活動を通し、企業より内定をもらっており、さらに1名は日本で就職活動中であったことから、ビジネス場면을具体的に想定ができており、他の3名の学生に対してもよい影響となっていた。

一方で、ビジネス日本語能力テストの聴解問題においては、的確に聴き取れず、選択問題の正しい回答を選ぶことに困難を要する学生がみられた。特にビジネス場면을想定できていないことから、要点を掴むことができていないことが要因であった。そのため、聴解問題をできるだけ多く扱い、種類の異なる問題に触れられるようにした。その結果、聴解力を段階的につけ、学期末の聴解テストでは、成果を発揮できた学生が多くみられた。引き続き、今後の課題として、ビジネス場面での聴解力や対応力が向上するための具体的な指導方法を考えていきたい。

<ビジネスのための口頭運用力B>

担当者名：<春学期>(池袋)平山紫帆、<秋学期>(池袋)平山紫帆(新座)三浦綾乃

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期(池袋)8名、秋学期(池袋)4名、(新座)3名

コースの目標

ビジネスで必要とされる談話レベルの日本語力を、ソリューション・デザイン型活動を通して身につけ、より高度なビジネス日本語運用能力の獲得を目指すとともに、日本でのビジネスの進め方への理解を深める。

授業の方法

<春学期>

(池袋)

学期当初は教室と Zoom のミックス型で授業を行ったが、緊急事態宣言の再発出後は Zoom で授業を行った。

授業の進め方は、初回の授業で「ソリューション・デザイン (SD) 型活動」の狙いや意義、進め方を説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」に関するタスクを提示し、グループごとに SD 型活動を進めていった。

毎回の SD 型活動では、教師は各班を移動しながら活動を見守り、注意すべき口頭表現を記録した。授業の最後には、班ごとに会議の報告をさせるとともに、口頭表現のフィードバックを行った。

そして、案が固まった段階で、まず 1 回目のグループ発表を行った。そしてグループ同士でコメントをしあうコンサル活動を行い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼンを行った。プレゼンは Zoom の録画機能を使用して録画した。プレゼン後にはピアフィードバックを行い、翌週、録画したものを一緒に見ながら教師がフィードバックを行った。

また、この活動とは別に、毎回、ビジネス語彙に関するプリントを宿題として課し、添削して個別に返却した。

<秋学期>

(池袋)

学期当初は教室と Zoom のミックス型、その後は教室だけで授業を行った。

授業の進め方は、初回の授業で「ソリューション・デザイン (SD) 型活動」の狙いや意義、進め方を説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」に関するタスクを提示し、グループごとに SD 型活動を進めていった。

毎回の SD 型活動では、教師は各班を移動しながら活動を見守り、注意すべき口頭表現を記録した。授業の最後には、班ごとに会議の報告をさせるとともに、クラス全体に対して口頭表現のフィードバックを行った。

そして、案が固まった段階で、まず 1 回目のグループ発表を行った。そしてグループ同士でコメントをしあうコンサル活動を行い、その内容を踏まえて発表を修正し、最終プレゼン

を行った。プレゼンはフィードバックのために録画した。プレゼン後にはピアフィードバックを行い、翌週、録画を一緒に見ながら教師がフィードバックを行った。

また、この活動とは別に、毎回、ビジネス語彙に関するプリントを宿題として課し、添削して返却するとともに、使い方に注意が必要な語彙については教室で解説した。

(新座)

初回の授業で、ソリューション・デザイン (SD) 型活動の狙いや意義、進め方を説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「テーマ 1：商品開発」、後半は「テーマ 2：問題解決」として、SD 型活動を進めていった。毎回の SD 型活動は社内会議という設定で行い、毎回の活動後には活動の進捗状況を報告させた。秋学期はオンライン参加と対面参加の学生がそれぞれいたため、Zoom を用いたミックス型の授業を行った。

各テーマの流れとしては、まず、プレタスクとしてそのテーマで必要となる概念やキーワードを考え、全員で枠組みを共有した。その上で、具体的なタスクを提示し、グループごとに調査や検討を進めていき最終プレゼンテーションの準備をした。最終プレゼンには上司役として学生ボランティアを呼んだ。最終プレゼン後には、録画したものと学生ボランティアからの評価・コメントを見ながらグループ・個人の振り返り活動を行った。それに加えて、教師からのフィードバックの時間も設けた。

また、毎回の授業でビジネス語彙と表現が学べる宿題シートを配布し、教師は提出されたシートを個別に添削した。

結果と課題

<春学期>

今学期の学生は、日本語力の向上に意欲的な学生が多く、1 回目の発表で指摘されたことを 2 回目の発表では繰り返さないようにしようとする意識が強く感じられた。また、授業形態が学期中に変更になる状況下でも、与えられた課題に熱心に取り組む学生が多かった。

一方、今学期は様々な問題も発生した。まず、学期当初のミックス型の授業は、教室参加が 7 名、オンライン参加が 1 名という状況であったため、教室の学生とオンラインの学生が混在するグループができたが、教室の学生はパソコンは持っていたものの、イヤホンマイクを持っていなかった。そのため、学生たちが一緒に Zoom で会議をしようすると、ハウリングを起こしてしまう恐れがあった。そこで、ハウリングを避けるために、教室で使用するパソコンは 1 台だけにし、オンラインの学生の顔はスクリーンに映してスピーカーフォンで音を流し、教室の学生の姿は外付けのカメラで撮る方法を取ったところ、お互いに顔を見ながらスムーズにやり取りができるようになった。しかし、もう一方の教室参加者だけのグループにもやり取りが大きく聞こえてしまう状況になったため、このグループには近くの空き教室を使用して話し合いをしてもらった。グループ内に教室参加者とオンラインの学生が混在している場合にどのように活動を進めるかは今後の大きな課題である。

Zoom に全面的に移行してからは、上記の問題はなくなったが、今学期は通信環境に問題

がある学生や映像を出すのを嫌がる学生がおり、基本的に音声だけの会議になった。また、途中で通信が途切れてしまったりする学生もいた。そのため、グループ内の意思疎通がうまくいかず、積極的に発言をする学生が控えめな学生に対してフラストレーションをためるという事態も起きた。

オンライン環境でのグループワークの方法について、今後検討を重ねていきたい。

<秋学期>

(池袋)

今学期は、欠席が一人もおらず、全員が最後まで大変意欲的に活動に取り組んだ。受講生が4名だったため、わずか2名ずつのグループになったが、どちらの班も活発に意見を交わしながら話し合いを進め、協力し合って発表を行っていた。明るい学生ばかりで、終始雰囲気良く活動が行えたことも、今学期の大きな特徴である。

今学期は、はじめて、テーマ2で扱うタスクのトピックを2種類用意して学生に選択させるという方法をとった。多数決時点では多少意見が割れたが、学生たちは納得して活動を行っていたので、今学期はこの方式がうまく機能したと考えている。何週間にもわたり取り組む課題であるので、今後も学生の関心や希望を考慮したトピックが設定できればと思う。

また、今学期は口頭表現能力に優れ、基本的な発表スキルが身に付いている学生が多かったため、発表ではより高度な表現や実践的な発表スキルを意識させた。今後も、すべての学生が学びが実感できるように心がけていきたい。

(新座)

履修者は3名で、2名がオンライン参加、1名が対面参加であった。熱心で前向きに活動に取り組む学生達であったため、初めはSD型活動に慣れず戸惑っている様子が見られたものの、回を重ねるにつれ模擬会議を意識した活動が行えるようになった。会議で使う日本語表現や気をつけることを確認する時間を設けたことも、学生が活動を進めるうえで役に立ったと思う。

今学期はグループが一つしかできなかったため、最終プレゼンテーションには上司役として学生ボランティアを招いて質疑応答に参加してもらい、評価とコメントをもらった。学生は緊張していたようだが、初見の人にも分かりやすく説得力のあるプレゼン作りを意識したり、質疑応答のシミュレーションをしたりと、モチベーションの維持につながったと思う。振り返り活動では、自分のグループの発表を自己評価し、各メンバーがどのように活動に貢献できたかも話し合わせた。振り返り活動での学生からのコメントからも、達成感と満足感がうかがえた。学生達は教師と学生ボランティアからのフィードバックにもよく耳を傾けており、テーマ1のときに指摘された点がテーマ2ではほぼ完璧に改善されていた。

一方で、オンラインで行う活動の難しさも感じた。テーマ2のときに体調を崩し欠席が続いた学生がいたのだが、その学生の担当箇所をどのようにメイクアップするかが大変で

あった。教師からも学生からも欠席した学生に連絡をしたが、返事が返って来ず、授業外の時間で話し合いや共同作業の時間を取るのが少し難しかったと後に学生から言われた。今回は3名とも時差が1時間ほどで、作業はGoogle スライドとGoogle ドキュメントを用いていたため作業状況がリアルタイムで反映されるため進捗状況が把握しやすく共同作業は比較的やりやすかったが、それでも困難は生じた。今後、時差がかなりある学生の履修も考えられるので、学生達の負担が重くなりすぎないように、もしSD型活動で欠席した学生がいた場合の対応をあらかじめクラスで検討し、共有しておく必要を感じた。

<ビジネスメールと文書>

担当者名：<春学期>（池袋）谷 啓子、<秋学期>（池袋）谷 啓子 （新座）小林友美・任ジェヒ

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）9名、秋学期（池袋）5名、（新座）2名

参考教材：村野節子、山辺真理子、向山陽子（2015）『タスクで学ぶ日本語ビジネスメール・ビジ

ネス文書 適切にメッセージを伝える力の養成をめざして』スリーエーネットワーク

川島冽（2008）『5分で送信 ビジネスメール速書き文例集』すばる舎

コースの目標

日本語の書き言葉によるコミュニケーションについての理解を深めながら、ビジネスメール、報告書、依頼状などの様々なビジネス文書の読み方、書き方について学び、使えるようになる。

授業の方法

<春学期>

今期は全14回中、4回がZOOMと対面のmix授業、10回がZOOMによる双方向オンライン形式であった。

授業は、教材にそって、ビジネスメールとビジネス文書の読み方、書き方について学び、実際に作成するという方法で進めた。各回は、①前回の課題へのフィードバックと関連する表現のフォロー、②メイン教材の新しい課の説明→「役に立つ表現」「練習問題」、③課題説明→解散→各自課題作業、という流れであった。課題は期日までにblackboardで提出、添削、コメントを入れて次回の授業日に返却した。回によってはblackboardではなく、実際のメールに作成した文書を添付して担当者に送付することもあった。

各回の流れの中では特に①の課題フィードバックに時間を割いた。毎回1名の課題例を画面共有で提示し、本人に難しかったところ、迷った点などを聞き、クラスメイトからも改

善案をコメントしてもらい、検討した。その後、他メンバーの作成例からも全体で共有すべき点を取り上げ、解説した。

学習する項目や順番はメイン教材の流れにそったが、敬語やメール事例などは他教材を利用したり、実物を見せたりすることで、よりビジネス現場へのイメージを高めてもらうようにした。

なお、オンライン環境に配慮し、授業中は極力学生を指名して発言してもらい、受け身にならないよう心掛けた。また、適宜グループ活動を取り入れ、見えそうな表現を話し合う等クラスメイトとコミュニケーションをとる機会を設けた。

<秋学期>

今期はZOOMによるオンライン形態で開講したが、mix 授業を経て完全対面に移行した。対面授業でも学生には ZOOM に入ってもらい、ペアワークの際座席間の感覚を空けて活動できるようにした。

授業はメイン教材にそってビジネスメールとビジネス文書の特徴について学び、実際に作成するという方法で進めた。教材の各課は「クレームを言う」「人を紹介してもらう」等ビジネス場面で起こりがちな状況が設定されている。

各回は、①前回の課題へのフィードバックと関連する表現のフォロー、②新しい課の状況説明→「役に立つ表現」「練習問題」、③課題説明→解散→各自課題作業、という流れであった。課題は期日までに blackboard で提出してもらい、添削、コメントを入れて次回の授業日に返却した。回によっては blackboard ではなく、実際のメールに作成した文書を添付して担当者に送付する練習も行った。メイン教材の他、敬語やメール事例などは他教材を利用したり、実物を見せたりすることで、よりビジネスシーンへのイメージを高めてもらうようにした。

各回の流れの中では特に①の課題フィードバックに時間を割いた。毎回の課題は個別に細かくコメントを入れて返却しているが、授業では修正前の作成例を画面共有し、本人に難しかったところ、迷った点などを聞き、クラスメイトからも改善案をコメントしてもらい、検討した。その後、他メンバーの作成例からも全体で共有すべき点を取り上げ、解説した。フィードバック後には、クイズを実施する回もあった。フィードバックと関連する表現やテキストの「役に立つ表現」などから特に復習が必要だと思われる箇所を抽出し、正誤問題、穴埋め問題、短文問題など、種々の形式でクイズを実施した。

最終課題はビジネスメールと議事録の作成であるが、今期の試みとして、会議については担当者以外の先生方、スタッフの方にもご協力頂き、オリジナルのオンライン会議動画を作成したものを用いた。実際にオンライン会議に参加しているイメージで取り組むことができたと思われる。

結果と課題

<春学期>

今学期、池袋の履修者は9名、学部2～4年生であった。開講時に自己紹介フォームを記入してもらったところ、日本での就職や日本語を使つての仕事を意識している学生が複数いた。

全体に熱心で、課題提出状況も良好であった。授業内に作成例を検討し、学期後半は個々の作成例からよく書けた部分を全体に紹介したので、より意欲がわいたのではと思う。ZOOMが大半であったが、学生もオンラインに慣れたようで口頭での質問も適宜出ていた。

毎回の課題には細かくコメントを入れて返却した。見直しをした学生は回を重ねるにつれ、基本的な敬語やビジネスメールの流れが身についたようである。当初はメール2通に「1時間ぐらいかかった」という学生もいたが、後半では授業内の10分程度で書けるようになっていた。今期は基礎が身につくのが早かったため、学期後半のフィードバックでは高度なビジネス的配慮についても触れたが、おおむね理解できたようである。

前年度の反省として、新規課題に取り組むにあたっての注意事項やヒントをより明確に出し、blackboardにもその旨明記したため、課題に取り組む際に意識できたようである。また、提出方法のミスがほとんど無かったのは改善の効果といえる。

<秋学期>

(池袋)

今学期、池袋の履修者は5名、学部2～4年生であった。日本での就職が決まっている学生やこれから就職活動、という学生もあり、全体にモチベーションが高く、課題提出状況も良好であった。また、対面授業に移行してからは質問や意見もよく出ていた。

今期はビジネスメールの基本と敬語が身につくのが全体に早かった。これは返却された課題を見直し、次に活かす学生が多かったためだと思われる。後半は授業内の一定の時間でメール作成し、見せ合つて検討したり、その直後にテキストの解答例を見て自分で添削したりした。学生の様子を見ながら、このように早い時期からクラスで検討しながらメールを作成する試みも学ぶところが多いのではないだろうか。

(新座)

今学期、新座の履修者は、学部4年生の2名であった。小規模のクラスであったが、2名とも発言や意見を積極的に交わされ、協働して授業に取り組むことができていた。また、国内外の就職活動に興味を持っている4年生だったため、アルバイト先などで疑問に思った敬語などを話題にするなど、能動的にビジネス日本語と関わろうとする姿勢がみられた。そのおかげで、テキストの表現だけでなく、履修者が日常生活の中で「聞く」「話す」「読む」「書く」ビジネス日本語についても、意見交換や知識情報の共有ができた。

今後の課題としては、批判的思考に基づいたピア・フィードバックを促す方法が挙げられる。新座キャンパスでは、クラス・メンバーが作成したメールについて、評価できる点と改

善が必要だと思われる点を、毎回、履修者に指摘してもらった。しかし、今後の改善に繋がる、批判的思考に基づいたフィードバックはあまりみられなかったように思われる。褒めなどのポジティブなフィードバックが学習に肯定的な効果を与えたことは否定できないが、ビジネスメールと文書に対するより深い理解のためには、仲間からの批判や指摘も不可欠である。クラス・メンバーからの批判的な指摘が学習に与える肯定的な効果と重要性を履修者に理解してもらうためには、具体的にどのような指導方法が必要なのかについて、工夫を重ねていく必要がある。

2021 年度 Japanese Language and Japanese Culture A、B 授業記録

コースの概要

すべての特別外国人学生を履修対象とし、履修のための日本語レベルは問わない。日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学ぶ。

<Japanese Language and Japanese Culture A>

担当者名:<春学期>小松満帆

授業コマ数: 週 1 コマ

履修者数: 春学期 7 名

使用教材: 独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることが目的とする。

授業の方法

日本の生活習慣、地理と観光、県民性、お笑い、アニメ、祭り、踊りというテーマで、日本の文化・歴史的背景を学んだ。学生によるブレインストーミングを経て、講義を行い、テーマについてのディスカッションを行った。途中、地域の子育てアソシエーションで活動されている医学療法士の方をゲストに招き、日本の子育てというテーマで講義をしていただいた。また、学期中、日本人学生を招いてのディスカッションを 4 回実施した。学期途中で Show&Tell (個人による短い発表)、中間プレゼンテーション (グループ) を行い、学期末には、授業で扱ったテーマについて、自身の経験や自国・地域の状況と比較しながら考察するレポートと、その内容について発表するプレゼンテーションを課した。なお、授業は、学生の日本語レベルに合わせ、すべて英語で行った。

結果と課題

正規学部生 2 名、特別外国人留学生 4 名、大学院生 1 名が履修した。このうち 2 名が対面、5 名が自国からのオンライン参加となったが、うち 1 名は学期途中で渡日の実現した。香港、中国、カザフスタン、フランス、フィンランドという幅広い背景を持つ学生が集まったため、ディスカッションなどでも、各国と日本とを比較することで、扱ったテーマについて、より理解を深めることができたと思われる。また、協働の意識の高い学生が多く、オンライン授業であっても、お互いに声を掛け合い、非常によい雰囲気の中で授業を進めることができた。学期末には、「直接会うことはできなかったが、みんなと一緒に授業ができてうれしかった」という声が多く聞かれた。

学期途中に実施した Show&Tell では、1 枚写真を見せ、自分と日本文化との出会いについて 1 分間で話す、という短いプレゼンテーションを行った。また、中間プレゼンテーションでは、グループで日本の都道府県 1 つを選び、その説明と観光における工夫や努力について発表してもらった。いずれの活動においても、オリジナリティの高い、興味深い内容が発表され、グループワークでは、効率よく担当を決め、互いに助け合いながら、短い時間で完成度の高い発表を準備することができた。

ゲストスピーカーには「日本の子育て」というテーマで、日本で（特に東京で）子育てをしていく難しさや解決策についてお話しいただいた。ゲストの方から事前に、学生たちの保護者に、各国で子育てをして難しいと感じたことを聞いてくる、という宿題を出していただいたが、学生全員が自身の保護者から話を聞いてきており、それを元にディスカッションを行った。学生たちの積極的かつ熱意のある取り組みに、ゲストの方からも後日、ポジティブなコメントをいただくことができた。

学期末のプレゼンテーションおよびレポートでは、それぞれがよい着眼点でテーマを設定し、授業で学んだ内容をさらに深めた興味深いものが多かった半面、何人かは、レポートやプレゼンテーションの経験が少なく、明確な結論がなく、状況を報告しただけ、というものを提出していた。今後は、内容面のサポートだけでなく、必要な学生には、レポートやプレゼンテーションの基礎的な部分からきちんと指導していかなければならないと痛感した。

<Japanese Language and Japanese Culture B>

担当者名:<秋学期>小松満帆

授業コマ数: 週 1 コマ

履修者数: 秋学期 6 名

使用教材: 独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに

学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることが目的とする。

授業の方法

日本の歴史、スポーツ、防災、冠婚葬祭（結婚式と葬儀）、ジェンダー問題、音楽、労働というテーマで、日本の文化・歴史的背景について講義を行い、各テーマについてディスカッションを行った。また、「多様性と日本」というテーマで講義を行った後、東京で活動されているヴィーガンシェフを招き、「日本の菜食主義」というテーマで、日本の食の多様性と問題点について講義をしていただいた。さらに、学期中、日本人学生ボランティアに参加してもらい、ディスカッションをする活動を4回行った。

課題は、授業後に提出するリアクションペーパーの他、授業で扱うテーマに関する質問シートへの回答も適宜課した。また、学期中に **Show and Tell** として、写真を見せながら「私の国の日本」というテーマで発表をさせたほか、期末プレゼンテーションをし、期末レポートも提出させた。期末プレゼンテーションと期末レポートの課題は、授業で取り上げたテーマに関するものとし、どちらも同じ内容でもよい、とした。なお、授業は、学生の日本語レベルが全体に高かったことから、スライドのみ英語を使用し、講義は日本語で行った。学生によるディスカッションでは、適宜日本語と英語を使い分けていた。

結果と課題

正規学部生2名、特別外国人留学生3名、研究生1名が履修し、うち3名が対面、3名が中国とアメリカからオンラインでの参加であった。学生の持つ背景は香港、アメリカ、台湾、中国、カザフスタンで、各テーマについて、日本と自分の背景とを比べ、また複数の国や地域の状況とも比較しながら、多くを学ぶことができたと思われる。

中間課題であった **Show and Tell** では、写真を見せながら、自国で見つけられる日本、というテーマで短い発表を行ったが、各国に進出する日本の飲食店を紹介した学生が多かった。そのほか、自国での日本語教育の状況について報告した学生もいた。期末課題であるプレゼンテーションおよびレポートでは、**J-POP** の歴史と変遷、日本企業での働き方、金銭を渡す贈り物の文化、日本の地獄と西洋社会での地獄(Hell)、結婚式の比較という、様々なテーマを取り上げており、非常に興味深い発表およびレポートとなった。

ゲストスピーカーとして、東京でヴィーガンスイーツの店を経営しているヴィーガンシェフを招き、日本の食の多様性と問題点について講義をしていただいた。このテーマに触れる前には、「多様性」というものをぼんやりと理解しているにとどまっていた学生たちが、様々な視点から多様性を捉えることができるようになり、ディスカッションでも興味深い意見が多く聞かれた。シェフには、海外でも手に入る食材を使って作る、ヴィーガンの和食のレシピもご紹介いただき、学生たちはとても楽しい時間を過ごしたようであった。

今学期は、3名がオンライン、3名が教室での対面という形態で授業を行ったが、ディス

カッションの際も、特に問題はなく、進めることができた。しかし、ZOOM 上で映像を流す際、画面と音のずれを解消するための設定をすると、それまで画面上に見えていたオンライン出席の学生たちの顔が見られなくなり、反応を見ることができなかったのが、難しい点であった。また、ZOOM のブレイクアウトルームを使つてのディスカッションでは、教師を含め、教室にいる全員がヘッドセットを用いていても、近くの人声を拾ってしまい、音が重複して聞こえるなど、やや進行しにくい場面もあった。ただ、対面で教室に来ていた 3 名は、先学期の **Japanese Language and Japanese Culture A** のときから一緒に履修している学生であり、今学期から実際に教室で会うことができ、関係を深めたように見えた。今後は、対面とオンラインの学生とをより近づけ、協働させていくために、より工夫を重ねていく必要があるだろう。

<Japanese Language and Japanese Society A>

担当者名：小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 3 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する社会的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本社会への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

日本語および日本社会に関するテーマを毎回 1 つずつ取り上げた。地域方言、社会方言、名前(ファーストネーム)の変遷、ボディーランゲージ、日本語の表記体系、日本の教育制度などである。授業は、冒頭にそれぞれのテーマについて 10 問ほどの質問を学生に投げかけ考えさせた後、講義を行いながら質問の答えを示すという形式で進めていった。授業後半には、各テーマについて日本と学生の出身国とを比較させ類似点および相違点を発表させるなどして、学生の積極的な参加を促した。オンライン授業が主であったため、ビジターセッションを 3 回設け日本人学生と交流する機会を取り入れた。3 回のセッションでは、授業で扱った「地域方言」「名前」「教育制度」について日本人学生にインタビューさせ、その結果を発表させた。また、ゲストスピーカーとして神主を招き、神道や神職について講義をお願いした。期末レポートは、授業で扱ったテーマの中から 1 つ選択させ、日本と学生の国の状況を比較してまとめさせた。

結果と課題

履修生 3 名という小さいクラスであったが、3 名全員が一度も欠席することなく学期を終

えることができた。真面目な学生ばかりで、毎回提出させたリアクションペーパーからいずれのテーマにも興味を持って熱心に取り組んでいたことが読み取れた。これまでは 1 回だったビジターセッションを今学期は 3 回に増やしたが、日本人学生との交流は好評であった。学生の日本語力の中上級、上級レベルだったため、授業はすべて日本語で行い、期末レポートも 3 名とも日本語で執筆した。レポートのテーマは、1 名が若者言葉、2 名が名前（ファーストネーム）である。3 名のうち 2 名が日本語でのレポート執筆が初めてだったため、レポートの書き方についても指導し、第 1 稿を提出させ個別にフィードバックを行った。3 名の中にはレポートを執筆すること自体が初めてという学生がおり、第 2 稿まで提出させ内容面や書式面についてコメントをしたが、こちらの指示通りに修正することができなかった。少人数のクラスであったので、アウトラインを提出させるなど、レポート作成に対してもう少し丁寧に指導すべきだったと悔やまれる。クラスの大きさにもよるが、レポートの指導方法を工夫することを今後の課題としたい。

<Japanese Language and Japanese Society B>

担当者名：小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 6 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する社会的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本社会への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

授業では、日本語と日本社会に関するテーマを毎回 1 つずつ取り上げた。テーマは、人称詞、敬語、短歌・俳句、色・動物のイメージ、日本の食生活、衣生活、住生活、日本の正月、日本の社会問題などである。毎回テーマについて講義をしたうえで、クラスでディスカッションや発表をさせて学生の積極的な参加を促した。クラスの半数は海外からオンラインで出席する学生だったため、日本人学生にもクラスに 3 回参加してもらい、家族間の呼称や敬語についてインタビューさせるなど日本人との接触の機会を確保した。また、日本人学生に協力してもらい短歌・俳句を作るという体験学習も行った。さらに、ゲストスピーカーとして神職を招き、日本の神話と雅楽についての講義をお願いした。期末レポートでは、色や動物のイメージについて学生の母語と日本語との比較、学生の母語の家族内呼称体系と日本語の体系との比較、敬語について日本人を対象に行った意識調査の分析という 3 つの中から課題を 1 つ選択させた。

結果と課題

履修学生 6 名のうち、対面 3 名、オンライン 3 名のミックス型クラスであったが、全員出席率が高く発表やクラス内活動に積極的であった。学生の日本語は初級が 1 名、中級が 2 名、中上級が 2 名、上級が 1 名と、レベルはまちまちであったが、初級の学生が日本語の講義をある程度は理解できたため、講義用スライドでは英語を用い説明はほとんど日本語で行った。ミックス型授業ではディスカッションが実施し難かったため、講義をした翌週に、前週のテーマについて日本語と学生の母語や日本と学生の国との比較をさせパワーポイントを用いて発表する機会を 4 回設けた。リアクションペーパーから、学生がどのテーマにも興味を持って取り組んでいたことが読み取れた。最終クラスで行ったコースの振り返りでは、日本人学生の助けを借りながら短歌・俳句を作成したことが印象的だったことに加え、敬語の講義や日本人学生へのインタビューを通して敬語の理解が深まったというコメントがあった。また、日本人と直接話すのは初めてというオンラインの学生もあり、ビジターセッションで日本人学生との交流を特に楽しんでいたことがうかがわれた。しかし、今学期はビジターセッションに応募してくれる日本人学生の数が極めて少なかったことが残念であった。

2021 年度 日本語演習 授業記録

コースの概要

演習科目は、初級、初中級レベルの日本語を用いて、内容を学ぶ科目であり、演習 1 は J2 レベル、演習 2 は J3 レベル、演習 3 は J4 及び J5 レベルの学生を対象とするものである。演習科目は、いわゆる語学の科目ではなく、学生が身につけているレベルの日本語を「道具」として用いながら、演習 1 では「アニメ／日本の歌」、演習 2 では「映画／まんが」、演習 3 では「小説／詩」について内容理解を目指す科目である。

演習 1～3 の詳細は以下の通りである。

<演習 1>

担当者名：<春学期>池田伸子、<秋学期>

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 1 名、秋学期 1 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることとする。

授業の方法

<春学期>

長編アニメ 1 本を視聴しながら、日本の地域格差、結婚に対する考え方、父親像の変化、しつけ、給食、学校の年中行事（運動会や学芸会）、占いやおまじないなどについて学び、参加者が自国の文化や社会との比較を通してディスカッションやプレゼンテーションを行った。また、アニメの主題歌を取り上げ、オリジナルの英語の歌詞と日本語の歌詞との比較などを行った。主な使用言語は J2 レベルの簡単な日本語とし、必要に応じて英語も使用した。

<秋学期>

長編アニメ 1 本を視聴しながら、日本の住宅制度、結婚に対する考え方、将来の夢、人気の職業などについて学び、参加者が自国の文化や社会との比較を通してディスカッションやプレゼンテーションを行った。また、アニメの主題歌を取り上げ、オリジナルの英語の歌詞と日本語の歌詞との比較などを行った。主な使用言語は J2 レベルの簡単な日本語とし、必要に応じて英語も使用した。

結果と課題

<春学期>

今回は受講者が 1 名であったが、毎回のトピックについて積極的に学び、ディスカッションやプレゼンテーションに参加していた。また、学期を通して長編アニメーション 1 本を視聴しながらの授業であったが、まとまった内容を扱っていくことで、アニメ中の人物についての考察なども扱うことが可能になったと思う。

今後は、さらに毎回のトピックに関する教材を充実させ、さらに参加者の学びが豊かになるよう工夫していきたい。

<秋学期>

受講者が 1 名であり、時差もあったため、毎回の課題をこなすのが大変そうだったが、熱心に授業に取り組んでいた。また、長編アニメ 1 本を扱うため、授業の間隔があいてしまうと、ストーリーの面白さが半減するため、冬休みをはさむ秋学期には向かないところもあると感じた。

<演習 2>

担当者名：<春学期>開講せず、<秋学期>藤田恵

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期開講せず、秋学期 1 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本の映画、マンガ、ドラマをテーマとして授業を行う。毎学期、いくつかの作品を取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、そして日本人の考え方などについての理解を深める。また、このクラスは「日本語」の授業ではなく、これまで参加者が勉強してきた日本語を「道具」として使って日本文化や日本社会を学ぶことを目標としている。

授業の方法

「日本の衣食住」をテーマとし、「和食」「弁当」「制服」「日本の家」等のトピックを取り上げた。それぞれの内容に関わる日本のドラマや映画を部分的に視聴し、気づいたことを話し合ったり、自国の状況を紹介しあって比較を行ったりした。また、学期の途中には、自分たちの国の作品を紹介し、そこから読み取れる文化的な特徴や日本文化との違いを分析するプレゼンテーションも行った。学期末には授業で学習したテーマの中で気になっていることを一つ取り上げ、自分の国と日本との違いや、その背景についてまとめることをレポート課題として提出させた。

結果と課題

<秋学期>

秋学期は、オンライン受講の履修者 1 名であった。「日本の衣食住」というテーマに対して関心の高い履修者であり、毎回の課題に熱心に取り組んでいた。演習 2 では、自国の紹介を紹介したり、ディスカッションをしたりする活動を入れるが、履修者が 1 名であったため、授業ボランティアの協力を得て、活動を行った。その結果、教師と作品からのみでなく、日本社会についての情報を授業ボランティアからも直接聞く機会を持つことができた。また、J3、J3S レベルの履修者にとって、日本人学生と日本語によるディスカッションをする機会が持てたこともよかった。

<演習 3>

担当者名：<春学期>金庭久美子、<秋学期>神元愛美子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 6 名、秋学期 1 名

使用教材：『レベル別日本語多読ライブラリー にほんご よむよむ文庫』アスク出版、NHK for school 「おはなしのくに」、たどくのひろば、読み物いっぱいなど

コースの目標

プレイスメントテストで J4、J5 レベルにプレイスされた学生を対象とする。これまでに習った日本語の語彙や文型を用いて、できる限り日本語で授業を進める。参加者が「道具」

として日本語を用いることによって、授業を理解し、日本の小説や詩についての理解を深めることを目指す。

授業の方法

<春学期>

クラスでは短編小説、詩、俳句、川柳、短歌を扱った。授業では精読はせず、担当者があらすじや感想について発表をした後で、担当以外の学生はみんなと話し合うための質問を考えてきてディスカッションを行った。毎回、小説を読んだあと、ブックレポートの宿題を課した。

今学期はオンラインで公開されている教材を扱った。図書館にアスク出版のオンライン書籍『レベル別日本語多読ライブラリー にほんご よむよむ文庫』のシリーズを入れてもらい、各自読むようにした。そのほか、学期末にはオンラインで公開されている多読教材を紹介し、そこから各自好きなものを選んで読んだ。最後にビブリオバトルで本の紹介をして、レポートも提出させた。

<秋学期>

春学期と同様の方法で授業を行なった。ただ、学生が1名だったため、学期前半は教員がリードし、学期後半は学生が作品の内容紹介とディスカッションクエストを準備し、リードした。作家の紹介は教員がフォローすることが多かった。また、学期末にはビブリオバトルは行わず、オンラインで公開されている多読教材から好きな本を見つけ、本を紹介し、レポートを書いた。

結果と課題

<春学期>

このクラスは Zoom で開始したが、途中から1名以外日本におりミックス型授業に移行した。学生は6名全員、非常に学習意欲が高く、毎回きちんと宿題をしてきた。『レベル別日本語多読ライブラリー にほんご よむよむ文庫』は著名な作家の小説をやさしくしたもののだが、毎回その作家について紹介することで、その小説が書かれた背景などを知り、深く理解することができたと思う。

最後のビブリオバトルの本の紹介はどの学生もすばらしかった。自分の好きな読み物だけあって、読んだことのない人にもうまく伝わるように準備していて、最後の話し合いも学生主導で行うことができた。

今後の課題は、オンライン教材の拡充である。できるだけ多くの教材を用意し、学生達が自主的に選べるようにしたいと思う。

<秋学期>

大変熱心な学生で、できるだけ多くの作品を読みたがり、本来予定していた作品数より2作品多く扱った。長編作品を読むのではなく、準備された短編作品リストから学生が興味ある作品を選べたことが、学生の意欲に繋がったのではないだろうか。履修者が一名だったため、他者からの学びがないことを心配していたが、本人のレベルと興味に合わせて議論することができた。そして対話から新たな気づきを得て、作品をより深く理解することができた。また、J4 読解も同時履修していたため、J4 読解では精読を演習 3B では応用力とバランスよく力を培うことができた。日本語の読書が更に好きになったことも成果の一つである。

課題は他者とのディスカッションの機会である。同年代の学生との議論にもぜひチャレンジしてほしい。

2021 年度 総合日本語 4～6 授業記録

コースの概要

J4～J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

<総合日本語 4-6A>

担当者名：小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 1 名

使用教材：独自教材

授業の方法

授業は、読解を軸に、内容確認、ディスカッション、発表を行った。扱ったテーマは、「観光地」「祭り」「江戸しぐさ」の3つである。読解教材は、内容は同じであるが、学生の各レベルに合わせたものを準備し、授業外で読んでくることを宿題とした。また、読解で扱ったテーマに関する作文の宿題を2回出した。毎回の授業には TA が参加し、ディスカッション、作文のフィードバック、学生の個別作業中のフォローなどなど、授業活動に積極的に関わった。

結果と課題

J5 の学生 1 名の履修者であったが、全授業出席し、宿題や課題を欠かさず提出する等、大変熱心に取り組んでいた。毎回課題があったが、一つ一つ丁寧に取り組んでいた。また、学生が教員や TA に質問をしやすい環境であったため、積極的な発言が多く見られた。学生のレベルや理解に合わせて授業を進行できたこと、課題のフィードバックに丁寧に対応できたことはよかった点である。授業では作文とリライト 2 回、発表 4 回を課したが、回を重ねるごとに、ライティング力とプレゼンテーション力の向上を感じた。一方で、毎回 TA

との交流や活動を積極的に取り入れたものの、クラスメイトとのグループ活動や、ディスカッションが叶わなかった点は残念であった。また、学期後半は、時折、疲れを見せる場面があったため、今後は、学生のモチベーションの維持に配慮し、減り張りを付けて授業を展開できるよう工夫していきたい。

<総合日本語 4-6B>

担当者名：三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 1 名

使用教材：独自教材

授業の方法

本授業はVTRを素材とし、「IT（スマホ）リテラシー」「若者の消費行動と価値観」「イクメン」の3つのテーマから現代日本を考えた。各テーマは3週に1つのペースで学習を進めた。1週目はテーマの導入・ウォーミングアップ→事前に配布した語彙リストの言葉の意味を確認（意味を調べてくるのは宿題）→VTRを視聴→内容・文法確認を行った。VTRは前半と後半に分けられているため、2週目は1週目と同様の流れを繰り返した。3週目はテーマについてディスカッションをしてクラスで意見を共有し、さらに発展的な活動としてミニプレゼンテーションまたは作文を行った。各テーマの終わりには学習した語彙や表現を復習するためのプリントを配布した。最終課題のプレゼンテーションは、授業でメインとして扱った3つのテーマの中で最も興味を持ったものを選び、視点を絞ってプレゼンテーションを行った。さらに今学期は受講生が1名で授業時間に少々ゆとりがあったため、学生のリクエストで「レンタル家族・恋人・友だち」「日本のLGBTQと結婚」について短い新聞記事を読んだり、ニュース動画を視聴したりして理解を深めた。

結果と課題

全14回の授業が全てオンラインで行われ時差もあったが、学生は毎週積極的に参加し、一つ一つの課題に丁寧に取り組んでいた。授業で習った語彙や表現を使ってデータを説明したり、自分の意見を述べることができたりと、日本語が上達したように思う。今学期は受講生が1名であったため、学生のペースや興味に合わせた授業展開ができた。しかし一方で課題も見られた。クラスメイトがいる場合、他の学生の国の文化について日本語で学び、学生同士が話す日本語から刺激を受けることもできるが、今学期はそのような機会を得ることは難しく、「教師/TAと学生」のやり取りが多かった。日本語ボランティアを積極的に利用すれば良かったと反省している。受講した学生は日本の文化・社会について深く学べて良かったと言っていたが、今後は、受講生が1名のクラスの場合、どのように様々な日本語に触れる機会を提供し、多様な文化・社会を学ぶきっかけを作れるかを考えたい。

<総合日本語 4-6C>

担当者名：小林友美、任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 5 名

使用教材：独自教材

授業の方法

授業は、読解教材を軸に、内容確認、ディスカッション、発表、作文を行った。扱ったテーマは、「若者」と「日本の外国人」である。読解教材は、J4、J5、J6 それぞれのレベルに合ったものを用意し、語彙リストを添付した。作文は、読み物のテーマに沿ったものを宿題として 2 回出した。また、毎回の授業には TA が参加し、授業活動に積極的に関わった。

結果と課題

今学期の履修生は、J4 の学生 1 名、J6 の学生 4 名、合計 5 名（1 名、体調不良による履修取り消しになったため、実質 4 名）であった。全員、時差のある海外からのオンライン参加であったが、発言や意見が積極的に交わされ、学生主導で授業を進めることができた。また、J4 と J6 という日本語レベルに差がある履修生が集まったクラスであったが、学生同士の協働と TA のサポートにより、全員、すべての教室活動および課題提出に関して、真剣に取り組むことができていた。これは、履修生全員が能動的な学習態度の重要性を理解していたからこそ、できたことなのではないかと思う。今学期は、最終発表に向けて、インタビュー調査だけでなく、Google フォームを使ったアンケート調査も実施したが、調査協力者の募集やデータの分析においても、履修者が互いに協力し合う姿が多くみられた。履修生それぞれがもっている語彙量や文法・文型知識などに差はあったものの、学生同士の協働により、すべてを乗り越え、最終発表では全員が非常に良い成果を出していた。今学期は、ピア・ラーニングの重要性を改めて考えさせられるクラスであった。

今学期の反省点としては、漢字圏と非漢字圏の学生が抱く学習負担の違いを十分考慮していなかったことが挙げられる。漢字圏の学生のプレゼンテーションなどでは、漢語の出現頻度が非常に高く、非漢字圏の学生に対して、やさしい日本語や時にはその他の言語での説明が必要な場合があった。難しい表現に対しては、毎回、日本語で補足をするよう指導していたが、非漢字圏の学生にとっては、心的負担が大きかったと思われる。今学期の履修生は、毎回、興味をもって漢字圏の学生の説明を聞いたり、積極的に質問をしたりしていたが、漢字圏・非漢字圏の学生両方に配慮した授業活動を行うためには、教員からどのような指示及び支援を行う必要があるかについて、今後さらに工夫する必要がある。

＜総合日本語 4-6D＞

担当者名：三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 5 名

使用教材：独自教材

授業の方法

日本の四季と年中行事を題材に、関連する語彙や表現を学んだ。授業は 1 課「冬」、2 課「春」、2 課「夏・秋」の 3 課を順に進めた。授業は担当した語彙を調べて PPT にまとめ、短い発表を行う、グループで話し合う、作文を書く等、様々なスキルを使うことで運用力を伸ばすよう計画した。映像素材としては、NHK の DVD「しばわんこ和の心」を部分的に使用した。各課（季節）は 2～4 回から成り、「ことば調べ」の読み確認→担当のことばを調べる（宿題）→発表→VTR で内容確認→グループディスカッション（その場でフィードバック）→小課題（作文または発表）→復習プリント（宿題）、の流れで進めた。学期末に、今期扱った内容に関するテーマで最終プレゼンテーションを行った。

結果と課題

履修者 5 名全員オンラインでの授業参加であった。5 名のうち 4 名がヨーロッパの学生で時差がかなりあり、現地時間の夜中に授業に出席していた。そのため心身の体調を崩す学生が多く、学期を通して誰かしら体調がすぐれない状態が続いた。5 名のうち 1 名は、体調管理がかなり難しい状況になり、学期の途中で履修を中止した。

体調は崩しがちだったものの、どの学生も熱心に授業に参加していた。日本に来たくても来られない状況も相まってか、日本の年中行事に興味を持って学んでいた。日本に来たことがある学生は当時の思い出を話してくれたり、自分の国の年中行事との共通点や異なる点について考えたことを話してくれたりした学生もいた。この授業には TA も参加していたため、学生一人一人の様子にも目を配りやすかった。ディスカッションは、今学期は録画しなかったが、その場で教師と TA から Zoom の画面共有機能で日本語表現や文法をフィードバックした。熱心にメモを取る学生もあり、回を重ねるごとにディスカッションは良いものになっていった。

今学期は全員オンラインで時差が大きい学生が多かったので、後半の授業や課題提出についてくるのが大変そうな学生がいた。授業の内容を少々欲張って盛りだくさんにしてしまったと反省している。最終プレゼンテーションの準備時間も、従来の学期と同じくらいとっていたが、今学期の学生には足りなかったように思う。日本の四季を学ぶ際の語彙も、少し調整を加えたもののまだ数が多かったので学生には負担が大きかったように感じた。授業形態、学生の時差や体調を考慮して、授業の焦点を絞って内容や課題の量を調節する必要を感じた。これを今後の課題としたい。

2021 年度 漢字 授業記録

コースの概要

どのレベルの学生でも履修することができるクラスである。学生は自分でレベルを選択し、学期中 2 回ある立教漢字検定に向けて、その範囲の漢字語彙を学習する。

担当者名：＜春学期＞小林友美、＜秋学期＞三浦綾乃

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 2 名、秋学期 7 名

使用教材：独自教材、立教漢字検定テキスト

コースの目標

履修のための日本語レベルは問わず、全レベルの学生が履修することができる。漢字語彙の拡充を目的として、漢字の意味、漢字の語彙の使い方に関する知識を深めるとともに、読んだり書いたりする力をつける。

授業の方法

＜春学期＞

立教漢字検定のテキストを用いて、各学生が決めたレベル、分野に沿って学習を行った。2021 年度は初級 B1～B6、中級 I-A～I-G、上級 A-A～A-G の全レベルを対象とした。授業ではテキストに沿ったワークシートを中心に、個別学習を行った。また、毎回、授業開始時にクイズを行い、身の回りにある漢字を生活の中で見つけて発表する「漢字発見」の活動を行った。それに加え、好きな漢字の意味、用法、理由などを PPT にまとめて発表する「好きな漢字発表」の活動を実施した。

＜秋学期＞

立教漢字検定のテキストを用いて、各学生が決めたレベル、分野に沿って学習を行った。2021 年は初級 B1～B6、中級 I-A～I-G、上級 A-A～A-G の全レベルを対象とした。授業では個別学習と共同学習から成る。個別学習は、テキストに沿ったワークシートを行った。共同学習では、毎回、自身の学習レベルの範囲にある漢字を教室外で見つけて、読みかた、意味、語彙などを発表する「漢字発見」の活動と、学期中に一人 2 回、レベルに関係なく好きな漢字をプレゼンテーションする活動を行った。また、先週勉強した漢字の範囲のミニクイズを毎回行い、テキストの漢字をすべて勉強した後は、まとめのクイズも行った。授業の最終日には、自分の名前を漢字で書く活動と 2021 年と 2022 年の自分を表す漢字を発表する活動を行った。

結果と課題

<春学期>

履修者は初級と上級の2名であり、出席率、課題の提出率がよく、熱心に取り組む学生達であった。少人数のクラスであったため、今学期は、各自のワークシートのフィードバックを行い、特に書き方や文作りを取り上げた。また、PPT や Google ドライブにクイズの問題をアップし、ノートに書いて写真を提出する方法で、クイズを実施した。今学期もオンライン授業、漢字検定が中止になったため、昨年度同様、個別学習の他に、全体での学習時間を増やすよう活動内容を一部変更した。「漢字発見」の他に、「好きな漢字発表」を2回課したが、漢字の意味、用法、好きな理由のみならず、その漢字の由来、漢字に纏わるエピソードなど各自の視点で紹介することができた。写真やイラスト、書き順のアニメーションをつけた工夫された PPT もクラスメイトの関心を引いていた。「漢字発見」は自国にいるため、毎回、漢字探しに苦労していたが、クラスメイトが発表した漢字の意味、語彙、表現を知ることができ、よい学習になったようだ。この2つの活動は、学生達から好評であったため、今後もこのような活動を適宜取り入れ、漢字学習へのモチベーションを保てるような工夫をしていきたい。

<秋学期>

履修者は7名で、1名が対面参加、残り6名がオンライン授業に参加した。授業の前半は共同学習だが、後半は個人学習でワークシートを進めていくので、オンラインでも授業が進めやすかった。オンラインの学生6名のうち4名は欧米諸国から授業に参加していたため、時差がかなりあった。学期のはじめは時差にもよく対応し授業に参加していたが、後半は体調を崩して欠席したり、課題の未提出が続くこともあった。1名の学生がやむを得ず学期の途中で履修を中止した。

「漢字発見」、「好きな漢字」の発表は学生同士でコメントや質問をしあったりし、個人学習が多いこの授業において学生同士が関われる貴重な時間であった。この授業にはJ0からJ6の学生が参加しており、日本語能力や漢字の知識にはかなりの差があったが、英語と日本語で発表と質疑応答を行うことでその差を縮め、全員が理解できるようにした。他の学生の理解を助けようとする学生、初級でもモチベーションを高く持って学ぶ姿勢を維持する学生がおり、全員非常に協力的であった。

授業自体は問題なく進めることができたが、オンラインの作業の難しさを感じた。例えば、Blackboard に PDF で提出されたワークシートやクイズをどのように添削するのか、ワークシートやクイズはどのように学生に提示するのかである。漢字の添削は言葉では学生に説明しにくいので、手書きでコメントをつけたくなるが、タブレットペンなどの機材を教師が持っているか、PDF に書き込めるツールを持っているか否かで教師の作業の効率はかなり変わると感じた。また、オンラインでの添削は時間がかかる。今学期は7名と履修者が少なかったため問題なかったが、履修者が多い学期はかなり大変なのではないかと思う。こう

いった点に関しては今後検討が必要だと感じる。また、今学期は最初の漢字テキストのレベル決めの際にサンプルとして提示したテキストの種類が少なく、結果として A と I の間のレベルの学生がテキスト選びに迷ってしまった。学期の後半は、方法を変え、すべてのテキストを一度閲覧できるようにするようにした。こちらの方が学生にとってレベルイメージが付きやすいようであった。今後もこの方法を取り入れる方がよいと思う。

2021 年度 Business Japanese I/Business Japanese A 授業記録

コースの概要

Business Japanese I/A は、経営学研究科国際経営学専攻の留学生を主な対象とするクラスで、文法を適宜導入しながら、ビジネス場面での日本語を実践的に学習し、運用力をつけることを目標とする。Business Japanese I は J4, J5 レベル、Business Japanese A は J6, J7 レベルの学生を対象とする。

<Business Japanese I>

担当者名：小松満帆、富倉教子、小森由里、沢野美由紀、長谷川孝子

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 1 名

使用教材：独自教材

コースの目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

この科目は、将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの 3 本柱で展開した。

本授業の主な流れは、①朝のロールプレイ、②オリジナル教材を用いたキープレーズの導入ならびに会話練習、③帰りのロールプレイである。①と③では、出勤・退勤時に同僚や上司と交わされる日常会話を練習した。②では、商談、会議、電話応対等のビジネス場面で適切に対応できるよう、導入と練習を行った上で、総まとめとなるゲストセッションでのやりとりを想定した応用練習を行った。さらに、対人関係に応じた基本的な言語表現の使い分けや、日常的な社内文書やビジネス文書の基本を学び、ビジネス日本語能力テストに向けた聴解練習も行った。

学期中 6 回実施したゲストセッションでは、コース前半は顧客から依頼されたポスターの作成、後半は新商品・新戦略の提案を行った。セッションは録画をし、後日、フィードバックを行った。

結果と課題

受講者が 1 名という状況での授業運営となったが、本人の高い意欲と熱意により、非常に学びの大きいクラスとなった。学生の日本語レベルが初級を終えたばかりであったことから、日本語レベルを考慮しながら授業を進めることとなったが、本人が日本企業に就職したいという明確な目標を持ち、それに向かって努力を続けたことにより、ビジネス場面で使用する表現等も含め、日本語力が飛躍的に向上し、大きな自信に繋がったようである。

聴解練習では、使用した教材のスピードが速く、ビジネス用語も使われていたため、学生にとっては難易度の高い練習だったと思われるが、ここでも常に前向きに取り組み、自ら語彙リストを作成するなどして、新しい語彙や表現を身につけようと努めていた。

日本人ゲストを招いての 6 回のゲストセッションでは、ビジネス会話表現を使うため、学生にとっては非常にハードルの高い活動であったが、セッション後のフィードバックや自身の振り返りを通して、着実に力をつけていった。1 回目、2 回目のセッションでは、緊張から、ゲストの顔を見ることができず、準備してきたことをなかなか発揮できずにいたが、徐々に自信をつけ、最終的には、堂々とゲストとやり取りができるまでになった。

課題としては、受講者が 1 名であったことにより、自身の能力の向上を客観的に自覚することができず、不安を抱いていた点がある。また、ゲストセッションで過度に緊張してしまい、実力が発揮できないという場面も見られた。自身の成長をきちんと感じていけるような活動を追加し、ゲストセッションにも落ち着いて臨めるよう、上司と部下の会話という場面の練習を増やす等、より経験を積んでからセッションに繋げるよう工夫が必要だと思われる。また、学期を通して、敬語の運用が難しかったようなので、学生のレベルや状況に合わせ、敬語を扱う課を増やす、あるいは扱うタイミングを調整するなど、適宜対応する必要があるだろう。

全体を通して、1 名の履修で週 5 日、ほぼ欠席なしで授業に参加したこと、意欲を保ち続け、最後まで積極的に課題に取り組んだことは、高く評価できる。学生の飛躍的な成長を見ることができ、教師にとっても、非常に実りのあるコースとなった。

<Business Japanese A>

担当者名：藤田恵、富倉教子、小森由里、沢野美由紀、長谷川孝子

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 1 名

使用教材：独自教材

コースの目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

将来幹部候補となるビジネスパーソンの育成という特化した目的を持つ科目である。具体的には、仕事にまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習と、談話レベルでの運用力をつけるためのプロジェクト活動、そしてプロジェクトの発表場面にもなる、立教セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションの3本柱で展開した。

本授業では、ゲストセッションに向けて課題を設定し、その課題が達成できるようにさまざまな表現を導入し、実際の現場で使えるようにしている。本年度の課題は「新製品の売り込み」「新製品販売状況報告」「取引先への謝罪と説明」「問題の対応策の検討（社内会議）」「自社説明（プレス）」等である。

結果と課題

今学期のBJAクラスは、対面受講の履修者1名で展開した。昨年度BJIを履修した学生であったため、どのような進め方をするかということは、ある程度理解していると考えていたが、毎回のゲストセッションに向けた準備の計画や、何のための練習や作業であるのか、発表準備のどの段階に当たる活動であるのかなどの把握が難しいようであった。また、ゲストセッションは、実際のビジネス場面に近い状況を勉強する場だということを繰り返し伝える必要もあった。履修者は「失敗してはいけない」という気持ちから不安になることが強かったようだが、徐々に活動の趣旨が理解できるようになり、前向きな気持ちで発表に臨むことができるようになった。学期を通して、敬語とビジネス語彙不足から、資料の理解に時間がかかる場面があり、例年よりも導入に時間を要することが多かった。今後もこのような学生がBJAクラスを履修する可能性が考えられる。上級レベルに達していても、ビジネス日本語の知識が十分でない学生に対して、どのようにコースを進めるのがよいのか、その方法を考えていきたい。

2021年度 大学生の日本語／総合日本語6－8 授業記録

コースの概要

「大学生の日本語」は正規学部生の1年生が大学における学習を日本語で行えるよう、アカデミックジャパニーズを学ぶためのコースである。「総合日本語6－8」として特別外国人学生や大学院生も履修可能であり、様々な背景をもつ学生が、共に学ぶ機会を提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

＜大学生の日本語 A6、7、8＞＜総合日本語 6-8A＞

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションのしかたを身につけることを目指した。新型コロナウイルスの影響で来日できていない学生もいたため、学期の最初と最後は対面とオンラインのミックス型授業で行い、5月から6月中旬までの緊急事態宣言中の7回程度はオンライン授業を行った。

「ニュースの紹介と用語の定義（引用）」、「グラフの説明」、「調査の引用」、「アンケート調査」という4つのテーマで、それぞれ必要な機能表現を導入・練習し、スライドを用いた5分のプレゼンテーションを行った。Zoomの画面共有でスライドを共有して発表を行い、ブレイクアウトルームを活用して発表練習やディスカッションを行う形である。各回の主な目標となる機能表現が含まれるスライドの1枚分についてはスクリプトも提出させた。また、ディスカッションのための質問も用意させて、質疑応答のあとでディスカッションをさせた。

テーマ1と3は個人による発表である。グループに分かれて発表とディスカッションをし、自己評価と学生間評価をさせ、後日、教師がスライドを添削してフィードバックをし、学生は作り直したスライドを用いて、改めて発表をした。テーマ2と4はグループによる発表である。Google スライドを用いてグループで一つのスライドを作成し、クラスの前でグループ発表を行った。テーマ4ではGoogle フォームを用いてアンケート調査を実施し、その内容を発表した。

上記の発表の他に、即興で短いスピーチをする練習も取り入れた。その場で与えられたトピックについて準備をして、スライドを使うことなく、グループの中でお互いにスピーチをし合うという活動である。また、キャリアセンターと連携し、留学生のための就職ガイドの動画を視聴させて、リアクションペーパーを書く活動も行った。

使用教材

独自教材

[文学]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 12 名

結果と課題

学期のはじめのミックス型授業は渡日できていない約半数の学生がオンライン参加、残りの学生が対面での参加だった。その後の緊急事態宣言で全員オンライン参加となった。まん延防止措置の期間は渡日している学生もオンラインを選択可能なミックス型となったものの、全員がオンライン受講を続けた。ミックス型授業の時は、対面の学生同士とオンラインの学生同士でグループ活動をしたため主に同じ出身国の学生との活動となっていたが、全員がオンライン受講となってからは、異なる背景の学生とグループ活動ができるようになり、ディスカッションでも異なる視点を持ててよかったという声が聞かれた。

クラスの出席率や課題の提出状況は非常によく、zoom のブレイクアウトルームでのグループ活動も、メインルームでのディスカッションも活発に行われた。学期開始時はこれまでパソコンを使用したことがなく、キーボードでの日本語入力ができないという学生がいて心配したが、その学生もパソコンの操作に慣れてきて、しっかりと課題をこなすことができた。

学期末のグループでのアンケート調査の発表もメンバー全員が責任をもち協力して取り組んでいる様子が見受けられた。アンケート作成と発表は、構成や表現など形式的なことはかなり身についたと思われる。しかし、先行研究との比較が不十分だったり、結果の考察について根拠が不十分なグループもあった。秋学期は論理的な思考力を養い、発表の中身がより充実したものになるように指導したい。

[社会・経営]

担当者名：武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 12 名

結果と課題

半数がオンライン、半数が対面というミックス型の授業形式に慣れるまでに数週間かかったが、なんとか形になったところに、全員オンライン授業になり、またミックス型授業になりと授業スタイルが変わる中、グループ発表の活動では、ミックス型の時は、対面とオンラインでのグループ編成が難しかったが、全員がオンラインになったタイミングでミックスのグループを作って交流することができたことはよかった。グループを 3 回作る機会があったので、できるだけいろいろな人が交わるように工夫をした。協力関係がうまくいき、発表の分担を公平に決められるところもあれば、授業外での連絡がとれずうまくいかなかったと不満を訴えてくる学生もあり、難しい面もあったが、最終課題のグループ発表は、それまでの課題の中でも内容も協力関係も最もうまくいったと思う。来日できていない留学生にも疲労の様子が見られることもあり、早く来日してクラスメイトと実際に会って授業が受けられればまた授業への向き合い方も変わってくるのではないかとと思われる。オンラインでの発表と実際に教室で発表するときとは、また発表のスキルも異なってくるので来学

期はぜひ教室での発表ができることを祈りたい。

[経済・理学]

担当者名：長谷川 孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 23 名

結果と課題

コロナ禍でオンライン授業が中心となったためか、学習者のレベル差が開く結果となった。学習意欲がありパソコン操作に慣れている学習者は、少しずつ上達していった。一方、パソコン操作がうまくいかない、授業の流れや課題提出方法が理解できないなど、何らかの問題がある学習者は、学習内容を理解するのに時間がかかっていた。しかし、問題があった学習者でも、クラスメイトと協力しながら、最終的には発表の基本を理解することができるようになった。今後も、学習者が意欲を失わないように注意をしながら、授業を進めていきたい。

[法学・異文化]

担当者名：a クラス：井上玲子、b クラス：鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス 12 名、b クラス 13 名

結果と課題

(a クラス)

春学期は対面とオンラインのミックス型授業を採用することとなり、対面が 5 名、オンラインが 7 名でスタートした。途中、履修学生全員がオンラインで授業に参加しなければならない状況となったが、12 名全員一度も欠席することなく、協力的な姿勢で授業に臨んでくれた。学生は学習意欲が非常に高く、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていった。秋学期も引き続き学生の学習意欲の維持に努めると共に、学生の積極的かつ協力的な授業参加を期待したい。

今学期は、スライドを使用しての発表の経験がない学生が数名おり、日本語での発表に非常に不安を感じている学生もいた。今学期は個人発表だけでなく、グループ発表を 2 回行ったが、学生同士でスライドの作り方や発表の仕方を授業内で話し合う時間を設けたことで、お互いに学び合い、不安も軽減されたようである。また、学生が作成したスライドとスクリプトを学生各々が見直し、修正できるように、教師のコメントを詳細に入れて返却し、直接説明したほうがいい学生には時間を取って個別に FB を行った。

今学期の振り返りでは、発表で必要とされる表現を学ぶことができた、日本語での発表をたくさん練習することができた、このクラスでの活動は他のクラスでの発表に役立つ内容であるなど肯定的な意見が多く見られた。課題点としては、考察やまとめが不十分だったので、考察力や分析力を高めたい、5分の発表のところを、時間をオーバーしてしまったので、発表の仕方やスライド作りに気をつけたいなど、個々の足りないところを挙げていた。また、スクリプトなしでも発表できる力を身につけたいなど、対面授業の時の発表を見据えたコメントも見られた。指定された時間内のスライド作りや発表の仕方については引き続き秋学期の課題としたい。

(b クラス)

学生自身が、この授業で何を学ぶべきかをしっかりと把握しており、毎回の授業に熱心取り組んでいた。大半の学生が日本語での発表は初めてであったが、課題を通して、パワーポイントの作成、表現、ディスカッションの方法等を身に付けることができた。また、資料の探し方、データの読み取り方等も学び、深く考える力、相手の意見を聴く力、自分の考えを相手に伝える力等も少しずつ養っていったと思う。次の段階としては、相手を惹きつける話し方やジェスチャー等に注目させたい。そのための練習を取り入れることで、更に良いプレゼンテーションになり、今後、授業、ゼミ、その他の場所でも通用するものとなるだろう。

[観光・映像]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 10 名

結果と課題

対面での受講者が 3 名いたため、中盤でオンライン授業に切り替わった時期以外はミックス型で 授業を行った。テーマ 1、2 では主に参考文献の書き方や発表の構成、スライドの作り方など基礎的なことができるようになることを目指し、後半のテーマ 3、4 ではさらに考察を深め、全体の一貫性を考えた発表ができることを目標とした。よくできる学生は前半でもかなり整った発表をすることができていたが、発表に慣れていなかった学生もテーマが進むとともに、段階を踏んで、発表の基礎を身につけることができていたと思う。このクラスは、テーマ 1 と 3 のグループ内での発表への質問やコメント、テーマ 2 とテーマ 4 のグループ発表での協力がよくできており、全体にグループ活動がよく機能している印象を受けた。最終発表では質疑応答やディスカッションにも積極的に参加できていた。

ミックス型授業ゆえのグループの組み合わせの制限や講師の機器操作の不慣れはあったが、その中でもかなりの学びがあったと思う。今後はより論理的な意見の展開の方法や伝わりやすい話し方などについても考えていけると良いと思う。

[心理・福祉]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 7 名

結果と課題

オンラインでの受講者が 1 名、対面が 6 名のミックス型で始まった授業であったが、5 月以降は緊急事態宣言の発令を受けて、最後まで全員オンラインでの受講となった。そのため接続環境などで十分準備ができていない学生もあり、音声の聞こえにくい時はチャットで補い、授業内でチャットで配布した資料は Blackboard にも入れておくなどのバックアップをしながら授業を行った。テーマ 1 の発表では、発表の形式の大切さにあまり意識を持っていない学生もいたが、テーマ 2 のグループ発表ではかなりの改善が見られた。グループで準備をすることで学生同士の学びがあったのではないかと思う。学期を通して、課題やクイズを重ねることで発表の構成、資料と考察の繋ぎ方、スライドの作成の方法、基本的な発表の表現などこのクラスで目標はほぼ達成できたと思う。

課題としてはスクリプトをもう少し丁寧に作成すること、また質疑応答が発表者と聞き手でうまく協力してできるようになることである。加えて、対面でもオンラインでもアイコンタクトや表情など聞き手に向けた非言語のコミュニケーション力も身につけていけると良いと思う。

[GLAP]

「大学生の日本語 A」 は「Japanese Language and Japanese Society A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society A」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 B><総合日本語 B 678>

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レジュメ、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指した。

『上級日本語教科書 文化へのまなざし』のうち「国際共通語」、「フリーターと仕事」に関する 2 つのテーマを扱った。資料 1 は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料 2 は A と B の読み物を分担して読み、その内容について発表できるよう

にレジュメの作成を行った。さらに、リアクションペーパーとレポートの書き方を指導し、リアクションペーパーを書いたあとで、複数の資料を用いて各テーマについてのレポートを作成した。

新型コロナウイルスの影響で来日できていない学生もいるため、学期の最初と最後は対面とオンラインのミックス型授業で行った。5月から6月中旬まで緊急事態宣言中の7回程度はオンライン授業を行った。

例年はレポートのピア・エディティングもしているが、今年度はオンライン授業またはミックス型の授業だったため、20年度同様、教員が添削する前の学生同士のピア・エディティングは行わず、自己評価シートを用いて自分で評価し、クラスメイトにはレポートの内容を説明するという活動にしたが、その他の活動は19年度までの対面授業と同様に行った。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会。

[文学]

担当者名：長谷川 孝子

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 14 名

結果と課題

クラスの大部分は、書く技術があり、授業で学んだ内容を自分のレポートに取り入れて書くことができていた。資料の理解、テーマの設定、分かりやすい構成、中心文と支持文、正しい引用の仕方、引用から意見への展開など、1学期間で目標としたレベルは達成できた。しかしながら、書くことに慣れていない学習者にとっては、引用をしながらレポートを書くということがなかなか理解できなかったようだ。課題が難しいと思われる学習者には、段階的に理解をさせる工夫をした。今後も、各学習者の状況を見極めながら授業を進めていきたい。

[社会・経営]

担当者名：任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：春学期 12 名

結果と課題

春学期は新型コロナウイルスの影響で来日できていない学生がいたため、対面とオンラインのミックス型で授業を行った。社会・経営学部のクラスで目標にしていたのは主に次の2点である。一つ目は、新入生がレジュメやレポートの書き方を知り、自己評価および他者評価できるようにすること、二つ目は、新入生に仲間づくりの機会を提供することである。上記2つの目標を達成する上で、学生間にみられるレジュメやレポート作成の経験値の差をどのように克服するかが課題であった。長い文章を日本語で書いた経験が全くない学生から、他の授業ですでに複数回レポートを作成したことがある学生まで、学生間には経験値だけでなく日本語能力にも差があり、そのギャップを克服する必要があった。そのため、グループ活動の前に個人作業の時間を作り、教員が一人ひとりの状況を把握し、次につながる課題を個別に課すようにした。例えば、直接引用の仕方ができていない人には『**Master of writing**』の復習を課題としたり、特定の文法形式（受身など）に誤用が多くみられる人には日本語教材を紹介し、復習するように促したりした。そして、各回の最後には、必ずペアもしくはグループ活動を取り入れ、学習者同士だからこそ聞けること、言えることなどを気軽に共有できる時間を設けた。

その結果、学期のはじめは自信がないと悩んでいた学生が、後半に入ってから授業で学んだ内容に基づき、レポート作成に慣れている学生に指摘をしたり、助言をしたりすることが多くみられた。レポート作成に慣れていた学生も自己分析する力が高まり、自身の気づきを教員や他の学生に共有する頻度が徐々に多くなった。また、今学期は最終日に **Google form** を使ってアンケートをとったが、最も良かった点として、他の学生とコミュニケーションをとる機会多かったため、新入生同士の絆を深めることができたということが挙げられた。以上のことから、学期のはじめにたてた2つの目標はおおむね達成できたと思われる。

しかし一方で課題もみられた。アンケートの結果、事前課題をせず出席する学生とグループ活動を行う際に、どのように時間を活用すべきかわからなかったという回答が複数みられた。グループ活動に積極的に参加するためにしっかり事前準備をしてきた学生に対する配慮が不足していたと反省している。学生間のインターアクション、コミュニケーションを重視しつつも、学生一人ひとりに100分の授業時間が意味のある時間になるようにするためには、どのような活動が必要であり、教師はどのような役割を果たすべきか、今後さらなる工夫が必要である。

[経済・理学]

担当者名：佐々木藍子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期28名

結果と課題

この授業は 1 年生対象の授業だったため、学生同士の関係構築もできるよう、ペアでの活動はなるべく毎回違う相手になるよう配慮し、グループ活動でも異なる国の学生同士がバランスよく同じグループとなるよう心掛けた。日本語でのレジュメ、レポート作成は初めてだった学生がほとんどで、1 回目の作成はとても大変だったようである。簡略化したサンプルを提示していたが、なかなか同じような形式で作成できなかったり、参考文献の引用の仕方に問題のある学生がいたりした。しかし、1 回目のフィードバックに対応することで、2 回目以降は徐々にコツを掴み、レジュメ、レポートともに改善されていった。学生同士の関係構築に配慮していたこともあり、ペアでのレジュメ、レポートの発表などを通して、互いの学びも大いにあったようである。一方で、課題の提出が滞る学生もあり、2 回目の成果物は、教師の指示やフィードバック、課題にきちんと対応した学生とそうでない学生に差ができてしまった。その差を埋めるべく対応した結果、学期の後半は課題の提出が遅れている学生とのやり取りで、きちんと課題などを進めている学生への対応が限られてしまった。また、このクラスは履修者が多かったため、学生一人一人に細かくフィードバックを行うことに限界があった。今後は、作業が遅れがちな学生への対応を検討し、個々の学生へのフィードバック方法を工夫していきたい。

[法学・異文化]

担当者名：a クラス：小林友美、b クラス：小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス 12 名、b クラス 12 名

結果と課題

(a クラス)

受講者全員が 1 度も欠席することなく授業に参加し、課題や活動に熱心に取り組むクラスであった。ペア、グループワークと学生間での活動を適宜取り入れたが、オンライン授業に移行してからは、対面参加だった学生とオンライン参加の学生との交流が叶い、学部初年度で重要となる人間関係の構築ができたように感じる。ほぼ全員がカメラをオンし、相手の表情や反応を見ながらコミュニケーションが取れた点もよかった。レポート、レジュメ作成が未経験の学生が大半であったが、1 学期を通して複数の課題をこなすことで、アカデミック・ライティングの基本的スキルを身に付けていったように感じる。学期末のふりかえりでは、他の科目でも本科目で学んだスキルを活かしたという意見も多く挙がった。しかしながら、一部、同じ間違えを繰り返したり、指示と異なる課題を複数回提出したりした学生もいた。オンライン授業では、学生の理解把握が困難なこともあるが、今後は、各回の課題のポイント、指示をより明確に提示し、適宜学生の理解度を把握しながら、授業を進行していきたい。

(b クラス)

レジュメやレポートを書いたことがないという学生がほとんどで、初めは不安だという声も多く聞かれたが、2回のレジュメとレポート作成を経て、自信をつけた学生が多かった。学期末には、他の科目でレポートの書き方について褒められてうれしかった、という声も複数聞かれ、この授業で学んだことを実技として生かしているということがわかった。レポート課題では、まだまだ改善する余地はあるものの、各自がよく考えられたテーマを設定しており、完成度の高いものを提出した学生も多く見られた。

全体的に日本語のレベルが高く、また、授業態度が非常によく、意欲も高いクラスで、課題提出の遅れや未提出はほとんど見られなかった。また、積極的に質問し、一度指摘された間違いを繰り返さないようにしようという姿勢で臨む学生が多く、その姿勢が高い最終成績につながった学生が多かった。

クラスの雰囲気は穏やかでとても和やかだったが、全体的にシャイな学生が多く、クラス全体で盛り上がるということは少なかった。しかし、グループワークなどをさせると、積極的に意見交換をする学生が多かった。その一方で、雰囲気になかなかなじめず、自分の意見を言うことのできない学生がいたことも事実であり、今後はそういった学生をいかにクラスに取り込んでいくかが課題となるだろう。

[観光・映像]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 9 名

結果と課題

今学期は期間によってミックス型授業、あるいはオンライン授業となったが、円滑にクラス活動を進めることができた。出席、課題提出も概ね良好で、最終日の振り返りでは、レポートの書き方や適切な表現を学ぶことができ、取り上げたテーマについての理解が深まったという感想が多く聞かれた。レジュメの作成においては、テーマ①では形式や体裁が整っていないものや資料の文章をそのまま書いてしまう学生もいたが、テーマ②では番号を付けて箇条書きにし、読み手に分かり易くする等の改善が見られた。ペアワークや発表を通して参考になる点が見つけられたようである。また、レポート作成では、全体の構成、引用の仕方、参考文献の書き方を中心に授業を進めた。引用や参考文献の書き方が着実に身に付いた学生がいる一方で、練習やフィードバックにおいて修正すべき点を指摘しても、正しい表現がなかなか定着しない学生もいた。来学期は、正確な表現の定着を図れるよう、ハンドアウトの使い方や練習方法などを検討していきたい。

[心理・福祉]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 6 名

結果と課題

今学期は期間によってミックス型授業、あるいはオンライン授業となったが、円滑にクラス活動を進めることができた。学期の初めには課題の提出方法に戸惑う学生もいたが、徐々に慣れ、学期を通して出席、提出状況は共に良好で、みな真面目に課題の作成に取り組んだ。レジュメの作成においては、テーマ①では資料の文章をそのまま書き抜いたものやキーワードを羅列したようなものも見られたが、テーマ②ではテーマ①の反省をふまえ、読み易くするための工夫ができるようになった。ペアワークや発表が適切な書き方を学ぶ機会となったようである。また、レポートの作成では、全体の構成、引用の仕方、参考文献の書き方を中心に授業を進めた。レポート作成が初めての学生もいたが、アウトラインを考えて資料を集める、自己評価シートで修正する等の過程を経て、基本的なスキルは身に付いたと思われる。一方、レポートを書いたことがある学生の中には、自己流の書き方が改められず、同じミスを繰り返す学生もいた。今後は、フィードバックの方法を工夫し、正しく書き直して改善することの重要性を強調していきたい。

[GLAP]

「大学生の日本語 B」は「Japanese Language and Japanese Culture A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture A」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 C6、7、8><総合日本語 6-8C>

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションのしかたを身につけることを目指した。

はじめの2回程度は緊急事態宣言中のため全員オンライン授業、その後、オンラインと対面を各自が選択というミックス型を経て、第4回からは渡日できていない学生のみオンライン、その他の学生は対面というミックス型授業となった。ミックス型授業の場合も、全クラスにオンライン参加の学生がいたため、発表の際は教室の学生もZoomに接続してZoomの画面共有でスライドを共有して発表を行った。

秋学期は春の機能表現を復習しつつ、比較対照、有識者の見解への同意、部分的な同意と反論などの機能表現を導入し、スライドを用いた5分のプレゼンテーションを計4回行った。発表スライドにはディスカッションのための質問も入れて、質疑応答のあとでディスカッションをさせた。

テーマ 1 は、各自がまずスライドを作ってグループの中でお互いに発表の練習をして学生間評価をし、さらに教師がスライドを添削してフィードバックをし、学生は作り直したスライドを用いて再度グループの中で発表した。テーマ 2 とテーマ 3 は Google スライドを用いてグループで一つのスライドを作成し、クラスの前でグループ発表を行った。最終課題は個人の発表とし、全員が皆の前で発表した。

上記の発表の他に、今年度はじめて第9回目の授業で、将来の就職活動を見据えて「高校時代に力を入れたこと」というテーマで自己分析をしてグループでシェアをし、短い文章にまとめて1分程度のスピーチをするという活動を行った。

使用教材

独自教材

[文学]

担当者名：数野恵理

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 13 名

結果と課題

履修者 13 名中 3 名は休学中の学生だったため、実質 10 名が授業に参加した。春同様、出席率も参加度も非常によく、欠席の課題の遅れ提出もほぼなかった。春学期のグループ発表は結局全員がオンライン参加だったため、オンラインと対面のミックス型でのグループ発表は今学期が初めてであった。2 回のグループ発表のうち 1 回目は出身国が混ざるようオンラインの学生と対面の学生を混ぜてグループを作り、対面の学生はヘッドセットをした状態で Zoom のブレイクアウトルームに参加し、話さないときはミュートにするようにさせた。この方法で特に問題のなかったクラスもあったようだが、このクラスは、オンラインの学生からは「教室の他のグループの声が気になる」、対面の学生からも「ヘッドホンから聞こえるグループの声と教室の他のグループの声が同時に聞こえて集中できない」という声が多く挙がり、発表準備の話し合いも極力話さないようにしていることがわかり、残念であった。そこで、2 回目のグループ発表ではオンライン参加の学生同士、対面参加の学生同士でグループを作ってグループ発表の準備をし、音声の問題は解決した。春学期に他の国の学生と話し合うことで視野が広がるという意見があったが、この方法ではグループメンバーの出身国がほぼ同じになってしまった。ミックス型でのグループプロジェクトは今後の

課題である。

今学期は 2 回のグループ発表の日にボランティアの日本人学生にも参加してもらった。応募者が少なく、それぞれ 1 名ずつの参加ではあったものの、発表後のディスカッションではボランティア学生にも意見が聞けてよかった。また、どちらの回も、1 年生でありながら引用をしながらとてもしっかりした発表をしていて、ディスカッションも活発で驚いたと感心され、留学生たちの自信につながったと思う。

今回初めて取り入れた「高校時代に力を入れたこと」のスピーチでは、就職活動のための準備としてどのようなスピーチをすればいいか理解してもらえたのもよかったが、これまで知らなかったお互いの経験や価値観もわかり、学生同士の関係もより深まったのではないと思われる。

[社会・経営]

担当者名：武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 10 名

結果と課題

10 名の履修者がほぼ欠席することなく全ての授業に参加した。ただし、1 名の学生が最後の 3 回連続で欠席となった。グループ発表では、メンバーの協力体制がスライドと発表の質に大きく影響を与えていた。毎回メンバーを変えてみたが、最後のグループ発表は今までの中でメンバー間の協力関係もよく、どのグループも質の高い発表となった。オンライン組も対面組もミックスしたグループ分けにした。これは、オンライン組が全員韓国、対面組が中国ときれいに分かれてしまっていたため、国籍を混ぜることで、交流の機会を増やすことを目的とした。それが功を奏したように思う。毎回フィードバックするごとに、きちんと改善点を次の発表に生かしてくれていた。最終発表は、個人個人がそれまでに学んだテーマ 1 から 3 までに学んだことをふまえ、原稿・スライドを作成、発表が高水準での出来栄となり、全員が有終の美を飾った。これからも、この授業で学んだ発表のための基礎知識を、自分の専門の授業に生かしてもらいたい。しかしながら、今後も課題となる日本語の正確性、発音・イントネーションについては、個々の努力に期待したい。

[経済・理学]

担当者名：長谷川 孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 24 名

結果と課題

春学期に続くコースであったため、学習者は課題の作成や提出方法などについて混乱せずに、学習内容に集中できたようだ。発表練習の中では、聞き手に分かりやすい発表とは何かを学んでいった。授業での注意や配布資料をよく確認している学習者は、今まで勉強してきた内容を踏まえて発表することができるようになった。一方、コロナ禍で孤独を感じ、なかなか学習意欲が上がらない学習者も少なくなかった。学習意欲の差から、グループ活動が上手くいかないこともあった。今後は、学習意欲に差がある場合の効果的な指導法を考えたい。

[法学・異文化]

担当者名：a クラス：井上玲子、b クラス：鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 a クラス 20 名、b クラス 12 名

結果と課題

(a クラス)

今学期は、春学期に「大学生の日本語 A」を履修した学生 12 名と、秋学期から 7 名が加わり、合計 20 名のクラスとなった。学生 1 名は時差のため個別対応をするよう所属学部から依頼があった。そこで、通常のクラスは 19 名で行い、個別対応が必要な学生には、通常授業後にメールで活動内容を指示したり、別の曜日に時間を取ったりするなどして対応をした。

春学期から履修している学生は、一部の学生の課題提出の遅れや、提出のし忘れがあったものの、春学期に引き続き自主的かつ積極的に活動に取り組み、高いモチベーションを維持して授業に参加していた。秋学期から参加の学生も、その雰囲気伝わって、春学期から履修している学生と共に、一つ一つの課題を毎回しっかりと取り組んでいた。今学期は対面とオンラインのミックス型授業を実施した。対面の学生とオンラインの学生とが一緒に活動できるように、対面の学生にも Zoom に入ってもらったが、特に問題なく活動を進めることができた。また、個別対応の学生ができるだけ通常授業のクラスの活動ができるよう、通常クラスの学生に発表の様子を録画する等、協力を要請すると、快く引き受けてくれた。そのおかげで、個別対応の学生も通常授業で行ったほぼ同様の活動を行うことができた。履修学生の積極的かつ協力的な授業参加に感謝したい。

今学期は教室で授業に参加した学生もいたが、オンラインでの参加学生もいたことから、グループ活動やプレゼンテーションはすべて Zoom を使用して行った。今後、教室でプロジェクターを使用して発表する際には、発表の仕方やスライドの見せ方など、Zoom での発表の時とは違い、戸惑うことがあるかもしれない。また、このクラスで基本的な発表の仕方やスライドの作り方は学べたと思うが、日本語で正確かつ簡潔にスライドにまとめる、発表の

時にスライドの文を読むのではなく、自分の言葉で説明する等、課題点はまだある。今後は発表の経験を通して、課題点を自分自身で見つけ、よりよいプレゼンテーションの方法を模索してもらいたい。

(b クラス)

学生達は、各自で目標を持って毎回の授業に参加していた。前学期に比べて、日本語での発表にも慣れ、グループでの活動も積極的に楽しみながら取り組んでいた。対面組とオンライン組に分かれての授業であったが、学生達が常に同じ空間にいるという意識をもって、仲間たちと授業に参加している様子は大変好ましく思われた。

また、学生達は前学期に学び、培った力に加え、社会問題に対する解決方法、自己評価と他者評価の仕方、適切なテーマの探し方等、新たな力も獲得していた。

課題としては、テーマの選択が挙げられる。振り返りシートをみると、学生達は自分達に身近な社会問題、学部に関連のあるもの、結論付け易く、情報量の多いもの、未来を想像・創造できるもの、深く考えさせるものなどを望ましいテーマだと考えていることがわかった。学生達にとって親しみやすく、興味が持てるテーマの選択は、さらにディスカッション力の育成に効果をもたらすと考えられる。

[観光・映像]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ
履修者数：秋学期 10 名

結果と課題

登録 9 名の学部生のうち、2 名は休学であったため、7 名の継続履修の学生に、新たに 1 名の特別外国人学生が加わるという構成であった。特別外国人学生は、テーマ 1 に取り組む段階では体調を崩し欠席が続いたこともあり、ついてこられるか懸念したが、テーマ 2、3 がいずれもグループ発表であったため、そこで他の学生から学ぶことができ、最終発表では個人でも形になった発表ができた。グループ発表を中盤位組み込んだことの成果と言えると思う。今期はミックス型の授業に学生が慣れてきたこともあり、形式を押さえるだけでなく、各テーマについて、考察を深めることに意識が向けられたと思う。また、質疑応答やディスカッションにも積極的に参加できるようになった。課題としては、今後もミックス型授業が継続する場合、グループ活動において、遠隔と対面の学生をどのように組み合わせるべきかについては考えていかなければと感じた。

[心理・福祉]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 5 名

結果と課題

学生は比較的大人しく、5 名と人数が少ないこともあり、活発とは言えないクラスであったが、中盤にボランティアの学生が参加してくれたこともあり、モチベーションが高まり、最終発表では質疑応答やディスカッションで積極的に意見を述べる様子が見られた。出てきた意見やコメントシートからは、いい視点を持っていることがわかったので、ぜひそれを外に向けて表すことに慣れていって欲しいと思う。基本ミックス型の授業であったが、遠隔の学生が 1 名だったため、時折音声や画面共有ができていなかったことがあり、置き去りにされているように感じたのではないかと申し訳なく思う。今後は参加の形態にかかわらず、全ての学生に注意が払える授業運営をすることを課題としたい。

[GLAP]

「大学生の日本語 C」 は「Japanese Language and Japanese Society B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society B」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 D6、7、8> <総合日本語 6-8D>

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指した。

学期の前半は『上級日本語教科書 文化へのまなざし』の「個性と学び」、後半は生教材の「AI」に関する読み物を扱った。学期の前半と後半それぞれ、資料 1 は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行った。資料 2 は A と B の読み物を分担して読み、その内容について発表できるようにレジュメの作成を行った。さらに、リアクションペーパーとレポートの書き方を指導し、リアクションペーパーを書いたあとで、複数の資料を用いて各テーマについてのレポートを作成した。春学期の大学生の B では直接引用について学んだが、秋学期の大学生の日本語 D では間接引用の練習をした。

学期はじめの 2 回程度は緊急事態宣言中のため全員オンライン授業、その後、オンラインと対面を各自が選択するミックス型を経て、10 月後半からは渡日できていない学生のみオンライン、その他の学生は対面というミックス型授業となった。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会。

新井紀子、2018、『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』、東洋経済新報社。

井上智洋、2018、『人工知能と経済の未来—2030 年雇用大崩壊』、文春新書。

小林雅一、2017、『AI の衝撃—人工知能は人類の敵か』、講談社。

[文学]

担当者名：長谷川 孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 15 名

結果と課題

学習者は、レポートのテーマについてのディスカッションで活発な意見交換を行っていたが、それをレポートにどのようにまとめるかで苦戦していた。2 回の練習を通して、テーマを絞ること、そして、トピックセンテンス（中心文）を用いて主張を分かりやすく伝える方法を学んでいった。授業での注意をよく聞き、時間をかけてレポートを書いている学習者は、着実に書く技術を習得していった。一方で、自己流の書き方から抜け出せない学習者もいた。今後は、聞き手に伝わる文章はどのようなものか、考えさせる時間を多くとりたい。

[社会・経営]

担当者名：鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 15 名

結果と課題

対面とオンラインによるミックス型において、「書く」力を培うために十分な指導ができるのか不安であった。しかし、学生達が課題に真摯に向き合い、何をすべきかを自分たちで判断して学習している姿を見て感心させられた。

学生達は、前学期に学んだことを自分の知識としてしっかり獲得し、その知識が今学期のレジュメやレポート作成に生かされていることが窺えた。

振り返りのシートをみると、学生達は「書く力」、「読む力」、「話す力」を身に付けただけでなく、いかにレポートにオリジナリティを持たせるか、テーマに関していかに専門性を持たせるか、どのようなタイトルが内容を的確に表しているのかなど、深く考えながら課題に向きあっていたことがわかった。

また、授業内でのピア活動に関して、考えを共有できること、新たな知識が得られることを利点として挙げていたが、そのピア活動は対面授業の方がより効果を生むという意見も挙げられていた。客観的な物の見方や批判的なものの見方もできる学生達であった。

課題としては、ピア活動の効果的な使い方とレポートの指導法について調べ、今後の授業に生かしていきたい。

[経済・理学]

担当者名：佐々木藍子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 27 名

結果と課題

この授業は先学期同様、レジュメおよびレポート作成の練習を中心とした授業であったが、それに加えペア活動、ディスカッションを適宜取り入れることで、一つの物事に対しても様々な考え方があるということを学び、多角的に物事をとらえる力がつけられることを意識して指導を行った。今学期も開講時はオンライン授業でのスタートであったため、ミックス型の授業に切り替わるまでは、学生同士のペア活動はなるべく同じ国の学生とならないよう、配慮して進めた。しかし、ミックス型に移行してからは、学生から対面とオンラインの学生でのペア活動は難しいとの意見があり、対面、オンラインごとにペア活動を行うこととなった。この点については、ミックス型の課題であると考え。春学期から継続した授業ではあるが、開講時はまだレジュメ、レポートの作成に苦手意識を持っている学生も少なからずいた。しかし、この授業はほとんどの学生が春学期から継続して受講しているため授業形態については、慣れているようであった。さらに、今学期に扱ったテーマである「個性と学び」、「AI」は学生自身にも身近な話題であったため、興味をもってディスカッションや課題に取り組み、授業終了時には作文力の向上を各自が実感していることも伺えた。ただ、秋学期もこのクラスは履修者が多く、学生一人ずつに対し、丁寧にフィードバックを行うことが難しい場面もあり、授業で繰り返し扱っている点であっても、まだレポートの規定通りにできていない学生もあった。今後はこのような学生に対してのフォローの方法を検討していきたい。

[法学・異文化]

担当者名：a クラス：小林友美・富倉教子、b クラス：藤田恵

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 a クラス 20 名、b クラス 12 名

結果と課題

(a クラス)

今学期、このクラスではレジュメとレポート作成をそれぞれ2回ずつ実施。これらの書き方の習得を目指した。それぞれの形式、構成などに加え、引用、参考文献の仕方／書き方も大きな柱となっており、その大枠は捉えられたのではないかと思われる。

レジュメでは全体的に見やすいレイアウトにすること、図の説明がポイントとなり、さらに要点だけをまとめて箇条書きにすることには苦戦を強いられていたようであった。個々では内容を捉えているのはうかがえるが、それを他人（読者）にわかりやすく日本語で提示するのにはまだまだ練習が必要なようである。

レポートに関しては2回目の作文のテーマがAI（人工知能）で取り組みやすかったのか、全体的に1回目より改善が見られた。また内容も多岐に富み、興味深い意見が多数述べられていた。今学期の目標である引用や参考文献も進歩が見られ、また構成においても改善が見られた。しかし、構成においては序論、本論、結論は捉えられているものの、まだ段落内の構成まで至っていない場合も多く見られた。今後中心文を上手に使用し、レポートの主題をより明確に提示するよう指導していくことが望まれる。

レジュメ、レポートのフィードバックに関しては焦点を「構成」と「引用」に絞り、誤りを提示しながら、何が間違いであるか認識し、それをどうすれば良いのか、個々で考えるよう促した。

クラスではオンラインと対面と分かれていたが、その違いを最小限に抑えられるよう心がけた。また資料の読解、構成、作文、修正といった活動を個人作業だけに留まらないよう、ペアワークを多めに取り入れるなどして、協同学習の利点をも引き出せるよう授業を行った。

コース全体を振り返り、クラスでの発言の機会が少なかったように感じる。トピックについての議論や、個々の作文のテーマについて簡単な発表や意見交換などペアワークからクラス全体に引き上げる機会が設けられれば、日本語の表現力、また内容自体もより深まったレポートにつながったのではないかと考える。

(b クラス)

秋学期の法学・異文化bクラスは、春学期と同じ履修者のクラスであった。

授業では、グループ活動やディスカッションをほぼ毎回取り入れ、その際、自分のレポートの論点を報告する、他者の考察を聞いて視野を広げる、他者のレポートの論点と結論が一致しているかコメントする等、毎回話し合いの目的や目標を明確に示すようにし、活動後に発言やコメントシート等で報告させるようにした。その結果、学期末の自己評価コメントシートには、クラスメイトに伝える力が伸び、さらに、クラスメイトからのコメントがレポートの論点を深めるヒントとなったという点を挙げる学生が多かった。学部1年生にとって、目的や目標を理解させてから活動に入ることの重要性を感じた。

学期中にレポートとレジュメを2回作成したが、1回目の提出後のFBで、各学生の苦手

なポイントを重点的に示すようにしたため、2回目の提出物では多くが改善されていた。特に、レポートの導入と結論の書き方、引用の方法については時間をかけて取り扱ったため、2回目のレポートではその成果が見られた。

一方で課題として残ったのは、章立てについてである。節の中に一段落の文章の記述のみとしてしまう学生が複数おり、これが学期末まで修正されなかった。レポート作成時に、一点の事実のみで節を立てており、関連した話題をまとめる力が弱いことが原因として考えられる。この点はアウトライン検討時の指導が足らなかったことも影響していると思われる。したがって、次回からはこの点にも留意し、レポート作成の指導をしていきたい。

[観光・映像]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：秋学期 10 名

結果と課題

主にミックス型での授業となったが、みな授業形態にも慣れ、毎回のクラス活動に積極的に参加した。また、課題提出、出席の状況も概ね良好で、秋学期からの学生も熱心に課題に取り組んだ。その結果、レジュメの作成では、見出しの付け方や箇条書きでの提示などの工夫があり、内容の簡潔さや視覚的な分かり易さの点で進歩が見られた。レポートの作成では、春学期の課題を復習しつつ、間接引用や接続詞の適切な使い方などを学んだ。まだ、引用の表現形式や参考文献の書き方に細かいミスはあるが、引用の多用や自己流で書くということは改善され、アウトラインに従って論理的なレポートを作成するスキルは、概ね身に付いたと思われる。今後の課題としては、文法事項の定着が挙げられる。表現クイズではよくできていても、実際のレポートでは「したがって／そのため」「考える／考えている」などの類似表現の誤りが見られた。文章作成において正確な表現の定着を図れるよう、練習などを強化したい。

[心理・福祉]

担当者名：川端芳子

授業コマ数：週 1 コマ 履修者数：秋学期 5 名

結果と課題

主にミックス型での授業となったが、課題提出、出席の状況も大変良好で、みな真面目に授業に参加し、円滑にクラス活動を進めることができた。また、履修者数が少ないこともあり、クラス全体でレポートアウトラインの紹介やテーマに関する意見交換ができ、各学生の

視野も広がったようである。レジュメの作成では、春学期には資料の文章をそのまま抜き出す等が見られたが、秋学期には必要な情報の抽出に留意できるようになった。レポートの作成では、春学期の課題を復習しつつ、間接引用や接続詞の適切な使い方などを学んだ。まだ、引用の表現形式や参考文献の書き方に細かいミスはあるが、全体の論理的な構成に注意し、自分の意見と他者の意見を区別するという意識は、しっかり身に付いたと思われる。今後の課題としては、引用の効果的な使用が挙げられる。引用内容と自分の意見との関連性が不明瞭な場合が見られた。引用の目的を明確にして文章作成を行うなどの練習を取り入れ、的確な引用の定着を図りたい。

[GLAP]

「大学生の日本語 D」 は「Japanese Language and Japanese Culture B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture B」部分を参照のこと。

<国際的協働のための国内インターンシップ>

担当者名：丸山千歌

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期他 9 名

使用教材：独自教材

コースの目標

就業体験を通して、大学 4 年間の学びの先にあるキャリアプランを考えるとともに全学での学び、また所属学部での学びがどう社会と結びついているのかを知る。教室での学びだけではなく、教室外での経験を通して、自分と社会とのつながりを意識するようになる。

授業の方法

事前学習、インターンシップ、事後学習の 3 部により構成する。具体的には春学期中に履修者の選考及び事前研修を経て、夏季休暇中に各企業にインターンとして派遣する。外国人入試による入学者は日本での就業体験、それ以外の学生は日本語非母語話者との協働体験が可能な日本での就業体験を予定している。派遣期間は 10 日～14 日で、秋学期に事後研修を実施する。

結果と課題

2020 年度に新設されたが新型コロナの影響を受け不開講となったため、2021 年度が実質的な立ち上げの年度となった。履修動機は、自助努力ではなかなかインターンシップの機会の機会を得ることができなかった、日本で働くことに興味があるなどがあることを確認した。留学生の就職支援の専門家をゲストスピーカーとして、事前学習と事後学習に各 1 回招いた。事前学習および事後学習での学生の取り組みは大変積極的で、協働学習の質も高か

った。インターンシップ直前のインターンシップ先とのコミュニケーションで、学生の動き方に課題があるように感じたので、次年度はそういった点を事前学習に取り入れていきたい。

2. 2021 年度 Placement Test 実施報告

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により未入国の留学生が多いことから、正規学部生については、オンラインによるインタビューテストを実施した。

また、特別外国人学生については、渡日型による受け入れの中止（一部、国費外国人留学生の受け入れは有り）となったが、オンライン型による受け入れを行うことが大学の方針となったため、特別外国人学生・正規大学院生については、日本語プレイスメントテストは実施を見送り、学習歴等による暫定的なレベル判定を行った後、授業第1週に履修相談の機会を設けて、履修レベルを確定する対応をとった。

【春学期】

2021 年度春学期 日本語プレイスメントテスト対象者数

	正規学部生		特別外国人学生		正規大学院生		研究者
	新入生	在学生	新入生	在学生	履修希望 新入生	在学生	
対象者	94	2	21	0	13 (※1)	4	0
全対象者数 134 名							

※1：正規大学院生（履修希望新入生）13 名のうち、ビジネスデザイン研究科 4 名

春学期日本語プレイスメントテスト対象者 レベル判定結果（特別外国人学生・正規大学院生）

J 0	3
J 1	1
J 1 S	4
J 2	0
J 2 S	0
J 3	2
J 3 S	1

	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J 4	0	0	0	0
J 5	2	2	3	3
J 6	4	2	9	8
J 7	8	12	12	13
J 8	12（うち条件付き 10 名）			

<春学期総評>

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、正規学部生については、新入留学生の大学への着地を促すことと、未入国の学生が約半数いることを考慮して、オンラインによるインタビューテストを実施した。、国際センターを通じて事前に当日についての詳細を学生に通知したほか、Zoom の事前アクセスチェック時間を設けるなど、オンライン実施に向けたリスク管理を工夫した。結果として、当日は円滑に実施することができた。今回のオンラインによるプレイスメントテストは日本語教育センターが経験する初めての実施形態で、対面時に実施できている書きの力の測定ができないという課題が残っているが、今後、対面実施が難しいケースの対応事例を作ることができた。

特別外国人学生、正規大学院生については、2020 年度と同様に実施を見送り、代替措置として、留学生の日本語学習歴や日本語能力試験の受験実績（自己申告）とこれまで蓄積してきた知見を活用して、暫定的なレベル判定を行い、授業第 1 週に個別に履修相談に応じることで、履修する日本語科目の確定まで導いた。

【秋学期】

2021 年度秋学期 日本語プレイスメントテスト対象者数

	正規学部生		特別外国人学生		正規大学院生		研究者
	新入生	在学生	新入生	在学生	履修希望 新入生	在学生	
対象者	1	0	28	0	16	15	3
全対象者数 63 名							

秋学期プレイスメントテスト対象者 レベル判定結果（特別外国人学生・正規大学院生）

J 0	18
J 1	4

J 1 S	3			
J 2	4			
J 2 S	3			
J 3	2			
J 3 S	3			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J 4	1	1	1	1
J 5	3	3	5	5
J 6	13	13	14	13
J 7	6	6	3	4
J 8	2			

＜秋学期総評＞

正規学部生は、春学期同様、オンラインによるインタビューテストによりレベル判定を行った。特別外国人学生、大学院生は、日本語プレイスメントテストの代替措置として、留学生の日本語学習歴や日本語能力試験の受験実績（自己申告）とこれまで蓄積してきた知見を活用して、暫定的なレベル判定を行い、授業第1週に個別に履修相談に応じることで、履修する日本語科目の確定まで導いた。

2021年度の日本語科目履修者の内訳は以下の通りである。（履修者数は、前学期に日本語科目を履修した継続生を含む。継続生は日本語プレイスメントテスト対象者には含まない。）

【2021 年度春学期】			【2021 年度秋学期】	
特別外国人学生	国 籍	人 数	国 籍	人 数
	インド	1	アメリカ	2
	インドネシア	1	イギリス	3
	カザフスタン	1	イタリア	1
	スペイン	1	インド	1
	スロベニア	1	カザフスタン	1
	台湾	1	台湾	1
	日本	1	中国	2
	フィンランド	1	中国（香港）	2
	フランス	5	ドイツ	2

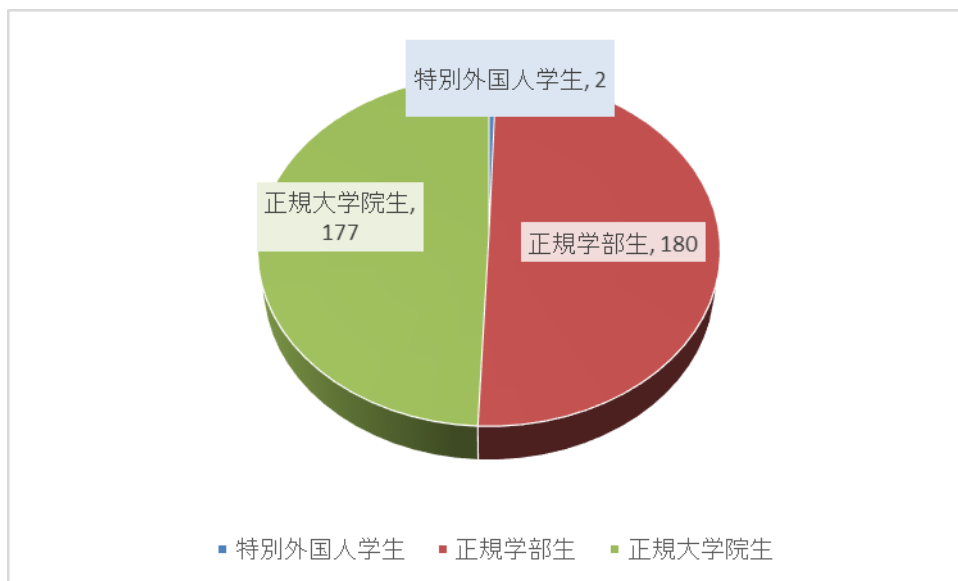
			日本	1
			ハンガリー	1
			フランス	1
特別外国人学生合計		13		18
正規留学生 (大学院)	アメリカ	1	アメリカ	1
	オーストラリア	1	オーストラリア	1
	韓国	1	韓国	1
	中国	22	ジンバブエ	1
	ドイツ	2	スイス	1
	日本*	1	スウェーデン	1
	ニュージーランド	1	スリランカ	1
	フランス	2	台湾	1
	ベトナム	4	中国	14
			フランス	2
			ベトナム	1
			マレーシア	1
			モロッコ	2
正規留学生（大学院）合計		35		28
日本語履修者合計	2021 年度春学期	48	2021 年度秋学期	46

*本学では正規留学生は在留資格「留学」を有している者としているが、日本語教育センター科目は、正規大学院生は、特に日本語学習の必要性が認められれば履修を認めているため、上表に記載する。

3. 2021 年度日本語相談室実施報告

2021 年度 日本語相談室利用状況（2021 年 4 月 12 日～2022 年 2 月 4 日）

【相談者所属別利用件数】



2021 年度の日本語相談室は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を考慮し、2020 年度と同様にオンラインで開室した。

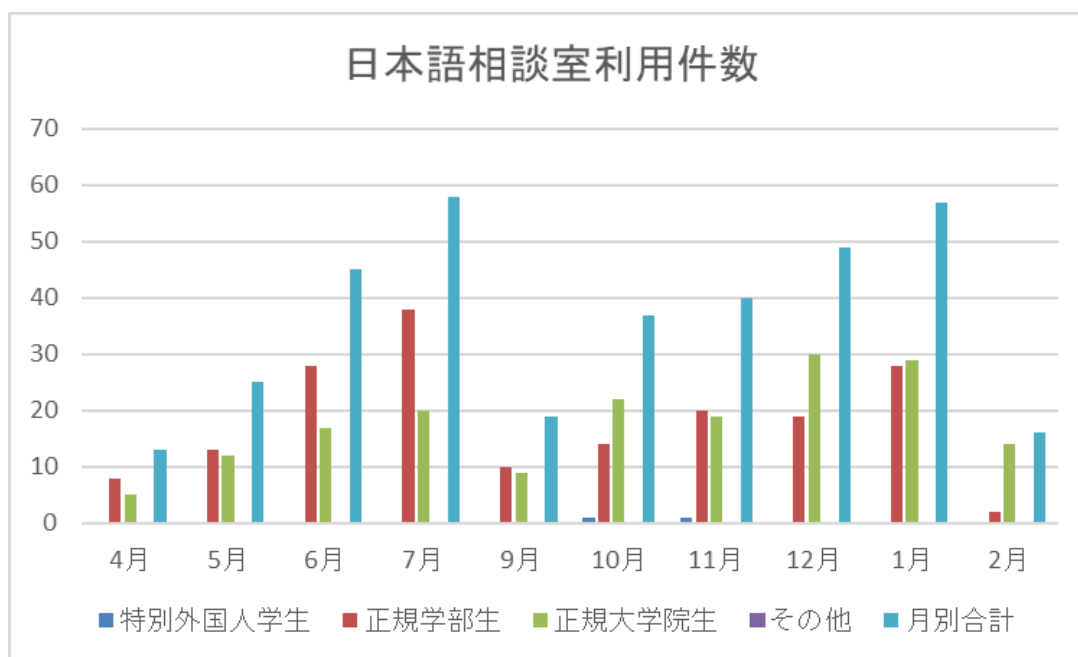
利用件数は 359 件と、昨年度よりも 32 件増えた。特別外国人学生の数が大幅に減った中で、留学生が多かった 2019 年度の利用件数 (394 件) に近づいたことに注目しておきたい。2020 年度比では、学期末の利用件数が増えていることが確認できる。対面時の 2019 年度の学期末の利用件数ともほぼ同程度である。

2021 年度の日本語相談室利用の内訳をみると、正規学部生が 180 件、正規大学院生が 177 件とほぼ同数だった。2020 年度比でみると、正規学部生の利用が若干増えたようである。特別外国人学生の利用件数はさらに減り、2 件のみであった。

新型コロナウイルスへの対応で、本学の活動制限レベルが何度か変更がある中で、日本語相談室については一貫してオンラインで開室した点は、学生の利用のしやすさにつながった可能性がある。

【月別推移】

	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	合計
特別外国人学生	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2
正規学部生	8	13	28	38	10	14	20	19	28	2	180
正規大学院生	5	12	17	20	9	22	19	30	29	14	177
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月別合計	13	25	45	58	19	37	40	49	57	16	359



利用件数の月別推移をみると、全体としては学期が進むにつれて利用件数が増える傾向があることがわかる。学期末の利用について、正規学部生は、春学期の利用が多く、秋学期はやや少ない。正規大学院生は、春秋とも同じように利用し、2月まで相談が続いている。特別外国人学生については、2021年度は国費留学生を除いては、基本的にオンラインによる受け入れとなったが、相談はほとんどなかった。

【所属別利用件数】

		実質利用人数	合計利用回数
特別外国人学生		1	2
正規学部生	文学部	7	46
	経済学部	1	19
	異文化コミュニケーション学部	16	69
	経営学部	1	1
	社会学部	3	3
	法学部	5	9
	観光学部	3	5
	現代心理学部	3	26
	コミュニティ福祉学部	1	2
正規大学院生	文学研究科	2	23
	キリスト教学研究科	1	25

	観光学研究科	9	29
	ビジネスデザイン研究科	8	49
	異文化コミュニケーション研究科	3	34
	21 世紀社会デザイン研究科	3	7
	経営学研究科	1	1
	社会学研究科	3	3
	経済学研究科	3	4
	現代心理学研究科	1	1
	コミュニティ福祉学研究科	1	1
特別外国人学生 計		1	2
正規学部生 計		40	180
正規大学院生 計		35	177
合 計		76	359

2021 年度も通年でオンラインにより展開したため、キャンパスごとの利用状況の報告はない。

正規学部生の利用についてみると、正規学部留学生の合計利用回数は、2019 年度が 126 回、2020 年度が 153 回であったのに対し、今年度は 180 回と増えた。実質利用人数は、2019 年度が 72 人、2020 年度が 21 名であったのに対し、今年度は 40 名で、繰り返し利用される傾向は続いてあるものの、認知度が上がったようだということもわかる。この傾向は正規大学院生も同様である。実質利用人数は 2019 年度が 105 人であったのに対し、2020 年度と 2021 年度は 35 名である。平均で一人 5 回利用したことになり、対面時よりも繰り返しの利用が多い傾向が続いた。

所属別でみると、正規学部生は異文化コミュニケーション学部、現代心理学部、文学部の学生の利用が多い。正規大学院生はビジネスデザイン研究科、異文化コミュニケーション研究科、観光学研究科、キリスト教学研究科、文学研究科の利用件数が多く、繰り返しの利用の様子もとらえることができる。

【曜日・時限別 利用件数および相談内容の内訳】

日本語相談室は、基本的に予約制で 1 コマに 2 件相談を受け付けられる設計となっており、試験期間を入れて各学期 16 週稼働している。昨年度と同様に春学期よりも、秋学期のほうが、全体的に利用件数が多かったことがわかる。2020 年度につづき、今年度も 1 限に配置をしたが、ほかの時間割帯と同程度の利用件数となった。2 年連続で利用状況が確認できたので、今後の運営に生かしていきたい。

【曜日・時限別 利用件数】

2021 年度春学期 (オンライン)

	月	火	水	木	金
1 限				8	
2 限	12	11	18	8	11
3 限	9	3	7	9	16
4 限	8	3	9	9	

2021 年度秋学期 (オンライン)

	月	火	水	木	金
1 限				21	
2 限	21	15	21	28	
3 限	16	13	19		23
4 限	12	11	9		9

【相談内容内訳】

相談内容	件数
卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）	138
就職活動（エントリーシート等）	47
レポート（授業、ゼミ等）	79
奨学金関係（申請書類、面接練習等）	31
発表指導（授業、ゼミ等）	4
学会発表・予稿集・投稿論文	19
学習方法指導（練習、日本語能力試験対策指導も含む）	13
スピーチコンテスト	17
その他	11
合計	359

日本語相談室担当者コメント

今年度の日本語相談室は、2020 年度と同様、池袋、新座、テレプレゼンスの区別なく、Zoom を利用してのオンライン相談室として開室した。その結果、学生は希望する時間帯に、場所を選ぶことなく、自由に予約することができた。資料の提出についても昨年度同様、日本語相談室宛の e メールで添付にて提出、あるいは、相談時間内に Zoom のチャット機能を用いて提出させた。担当者は、同メールアドレスを共有し、学生とのやり取りを行った。相談の際はオンライン上で学生の書いた資料を画面共有し、それを見せながら、指導や助言

を行い、資料の返却の際もチャット機能あるいはeメールを使用した。教員も学生も、2020年度からのオンライン対応によりZoomに慣れており、混乱なく、実施することができた。

今年度の相談室の利用件数は359件で、2020年度の326件から33件増加した。昨年度の相談内容と比較し、最も差が見られたのは、13件から47件に増加した「就職活動（エントリーシート等）」である。2020年度以降、オンラインでの就職活動が中心となり、それ以前同様に日本企業での就職を望む留学生が再び増加してきたことが背景にあるのではないかと考えられる。また、「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」と「奨学金関係（申請書類、面接練習等）」で微増が見られるほか、「学会発表・予稿集・投稿論文」では3件から19件と16件の増加となった。いずれの相談においても、今年度は、同一学生による複数回の相談が多く見られた。

一方、「レポート（授業、ゼミ等）」は12件減、「発表指導（授業、ゼミ等）」は5件減、「学習方法指導（練習、日本語能力試験対策指導も含む）」は11件減となっている。これらの要因のうちの一つとして、留学生の在籍数の減少が影響していると考えられる。また、「その他」に分類される相談が昨年度の4件から11件と7件増加しているが、これは、学生に相談室の存在が周知され、多様な相談を持ち込みやすい環境になってきていることが挙げられるだろう。

今年度の課題としては、オンラインでの申し込みや相談、担当者とのやり取りに慣れてきたことにより、緊張感がやや薄れ、長い提出物を課題提出日直前に持ち込み十分な相談時間が取れない、予約したもののキャンセルを繰り返すなどの行動が多く見られた。日本語相談室の存在が周知され、学生が利用しやすい環境が整えられていくことは非常によいことであるが、一方で、混乱や学生の不利益が生じないように、注意していく必要があるだろう。

今後も、学生が積極的に、そして、多くの学生が相談室を利用できるよう、周知と運営の工夫が求められる。

【2011年度—2021年度 利用件数推移】

年度	2011	2012	2013	2014年	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
特別外国人学生	26	45	62	46	29	88	67	42	63	5	2
正規学部生	29	18	33	52	76	98	70	92	126	153	180
正規大学院生	89	90	86	138	311	242	268	304	205	167	177
その他	0	0	0	1	8	0	2	0	0	2	0
合 計	144	153	181	237	424	428	407	438	394	327	359
増 減	100	106.3	125.7	164.6	294.4	297.2	282.6	304.2	273.6	227.1	249.3

本学はTGUの取り組みの一環として、留学生受け入れ拡大の計画がある。この本学の方針と日本語相談室の利用状況を鑑み、2022年度は日本語相談室の拡充プロジェクトを開始する。具体的には、「日本語相談アドバイザー制度（仮）」を設け、選考を通過した学生アド

バイザーが研修を経て。日本語相談にあたる。新しい運営体制については、2022年度のFDの課題に取り上げ、検証を行いつつ軌道に乗せる計画である。

4. 2021年度立教大学漢字検定試験実施報告

2021年度 立教漢字検定データ									
2021年度	試験日	申込締切日	申 込		受 験		合 格		
第1回	6月2日(水)	5月5日(水)	特別外国人学生	0名	特別外国人学生	0名	特別外国人学生	0名	
			上級	0	上級	0	上級	0	
			中級	0	中級	0	中級	0	
			初級	0	初級	0	初級	0	
			正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	
			上級	0	上級	0	上級	0	
			中級	0	中級	0	中級	0	
			初級	0	初級	0	初級	0	
			正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	正規大学院留学生	0名	
			上級	0	上級	0	上級	0	
			中級	0	中級	0	中級	0	
			初級	0	初級	0	初級	0	
			第1回申込合計	0名	第1回受験合計	0名	第1回合格合計	0名	
第2回	7月14日(水)	6月16日(水)	特別外国人学生	1名	特別外国人学生	名	特別外国人学生	名	
			上級	0	上級		上級		
			中級	1	中級		中級		
			初級	0	初級		初級		
			正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	
			上級	0	上級	0	上級	0	
			中級	0	中級	0	中級	0	
			初級	0	初級	0	初級	0	
			正規大学院留学生	1名	正規大学院留学生	1名	正規大学院留学生	1名	
			上級	0	上級	0	上級	0	
			中級	0	中級	0	中級	0	
			初級	1	初級	1	初級	1	
			第2回申込合計	2名	第2回受験合計	名	第2回合格合計	名	
第3回	11月24日(水)	10月27日(水)	特別外国人学生	0名	特別外国人学生	0名	特別外国人学生	0名	
			上級	0	上級	0	上級	0	
			中級	0	中級	0	中級	0	
			初級	0	初級	0	初級	0	
			正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	
			上級	0	上級	0	上級	0	
			中級	0	中級	0	中級	0	
			初級	0	初級	0	初級	0	
			正規大学院留学生	1名	正規大学院留学生	1名	正規大学院留学生	1名	
			上級	0	上級	0	上級	0	
			中級	0	中級	0	中級	0	
			初級	1	初級	1	初級	1	
			その他	0名	その他	0名	その他	0名	
			第3回申込合計	1名	第3回受験合計	1名	第3回合格合計	1名	
第4回	1月19日(水)	12月22日(水)	特別外国人学生	0名	特別外国人学生	0名	特別外国人学生	0名	
			上級	0	上級	0	上級	0	
			中級	0	中級	0	中級	0	
			初級	0	初級	0	初級	0	
			正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	正規学部留学生	0名	
			上級	0	上級	0	上級	0	
			中級	0	中級	0	中級	0	
			初級	0	初級	0	初級	0	
			正規大学院留学生	1名	正規大学院留学生	1名	正規大学院留学生	1名	
			上級	0	上級	0	上級	0	
			中級	0	中級	0	中級	0	
			初級	1	初級	1	初級	1	
			その他	0名	その他	0名	その他	0名	
			第4回申込合計	1名	第4回受験合計	1名	第4回合格合計	1名	

活動制限レベル3
に移行したため中止

2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、4回の実施を見送ったが、2021年度は3回実施した（うち、第1回は受験者数0）。実施の可否は、第2回日本語教育センター運営会議で協議を行い、「実施可否判断は、本学の制限レベルにもとづき判断する。（レベル2以下は実施、レベル3以上は中止。ただし、レベル2の場合は事務局とセンター長で当日の試験を運営する）」という方針を確認した。この決定にもとづき、第2回は中止、残りの3回は実施した。受験者数は漢字クラスの履修者のみと少なかったが、学習奨励の機能を維持し、本学の活動制限レベルにもとづいて実施可否判断を行う方針を作ることができた。

5. 2021年度 日本語自主学習用図書貸し出し実施報告

日本語教育センターでは、1回3冊、2週間までの図書の貸し出しを行っている。2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により大学が入構制限を行っていたことに合わせて、図書の貸し出しを行わなかったが、2021年度は貸し出しを再開した。貸し出し状況は以下の通りである。

【所属別記録】

2013年度より新座キャンパスに設置（28冊）

	利用者数（のべ）	貸出冊数
特別外国人学生	0	0
正規課程学生	4	8
（新座）正規課程学生	0	0

	貸出書名	貸出回数
正規課程学生	TRY 日本語能力試験 N5 文法から伸ばす日本語	2
	みんなの日本語 初級 翻訳・文法解説英語版 English[1]	4
	みんなの日本語 初級 本冊	2

この貸し出し制度は、次年度より廃止する。日本語教育センターの図書は留学生向け日本語学習用図書の全学レベルでの貸し出し体制がないことにより開始したが、2016年度から立教ラーニングスタイルが導入され、現在図書館に日本語学習用図書が配架されている。

全学的な仕組みの中で図書貸し出しの仕組みができたことと、下表の利用者数、貸し出し冊数の推移（第8回日本語教育センター実務委員会資料）、および、マキム1階事務室のスペース問題の改善の観点から検討を行い、日本語教育センター運営会議で廃止について承認された。

今後は、状態が良い図書については、図書館の立教ラーニングスタイルの図書コーナーに配架する相談を進めていく予定である。

日本語図書貸出状況【2012-2021年度】

第8回

1. 日本語図書（日本語教育センター事務局預かり）
約150冊（＊2013年度より新座キャンパスにも28冊設置）

2. 利用者数

	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
特別外国人学生	19	10	11	6	13	9	19	17	コロナ禍のため、貸出中止	0
正規学生	9	2	8	6	4	8	3	4		2
新座		1	0	1	1	0	0	2		0
招聘研究員・講師等	1	0	0	2	0	0	0	0		0
合計	29	13	19	15	18	17	22	23	0	2

＊人数は異なり数で示す

3. 貸出冊数

	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
特別外国人学生	61	30	30	18	43	32	91	23	コロナ禍のため、貸出中止	0
正規学生	38	8	25	16	16	25	11	8		8
新座		2	0	1	1	0	0	2		0
招聘研究員・講師等	6	0	0	5	0	0	0	0		0
合計	105	40	55	40	60	57	102	33	0	8

6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告

『立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ー』は例年春学期に開催してきたが、2021年度は11月27日に新型コロナウイルス感染症拡大の影響により秋学期にオンラインで開催した、当日は12名の留学生が登壇した。

実施の詳細は、日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/contest/6th.default.aspx>

を参照されたい。

スピーチコンテストの成果物として、『第10回 立教大学留学生による日本語スピーチコンテストー東京セントポールライオンズクラブ杯ースピーチ文集』を刊行した。

7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告

本学は、2022 年秋を目指して、新しいタイプの留学生受け入れ準備を進めている。この動きの中で、日本語教育センターは、2018 年度、2019 年度、2020 年度と正規学部留学生の受け入れに関連したテーマでシンポジウムを企画してきたが、2021 年度も引き続き同じ課題に取り組むこととした。

具体的には外国語教育研究センターとの共催で「グローバル化時代の言語教育を考えるーグローバル・コンピテンス育成の視点からー」というテーマで 2021 年 10 月 23 日（土）にオンラインで開催し、言語教育をグローバル・コンピテンスの育成の観点から議論することで、外国語習得以外の教育的価値があることを確認する機会とした。

登壇者は森平崇文氏（外国語教育研究センター教授）、坂本真一氏（外国語教育研究センター准教授）、三島雅一氏（外国語教育センター准教授）、池田伸子氏（異文化コミュニケーション学部教授）で、コメンテーターに、長尾眞文氏（一般財団法人国際開発センター研究顧問をお招きした。

この企画は、言語教育の一部に「やさしい日本語」を位置づけた点にも特徴がある。大学の国際化は、学生間の授業内外での交流がしっかりと行われ、学生がサポートしあうとともに、その経験からたくさんの刺激を得て成長することに意義がある。2022 年度に全学共通カリキュラムの科目として開講する「やさしい日本語」がキーワードとする科目は、日本語母語の学生、日本語上級レベルの学生が「やさしい日本語」の社会的意義を学び、実践を繰り返しながら習得するとともに、グローバル・コンピテンスを高めることを目指す。本学が、国際化を推進する科目として、外国語科目に加えて、「やさしい日本語」を追加することの意義を確認する機会ともなった。

本企画の参加は、関係者以外に、学内の教職員をはじめ、学生、学外の方で 50 名であった。当日の成果は冊子体『シリーズ 新しい日本語教育を考える 11』として刊行した。

8. 日本語教育センターニュースレター発行報告

昨年度にひきつづき「日本語教育センターニュースレター」を発行した。今年度の授業形態が全面的にオンライン授業だったことから、紙媒体にはせず、すべてオンラインで配

信した。スピーチコンテストや日本語クラスの紹介、留学生向けのグローバル教養副専攻について特集を組んだ。また、学内教職員の協力をえて、留学生へのメッセージを積極的に発信した。詳細は日本語教育センターホームページ

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/newsletter/>

を参照されたい。

9. 短期日本語プログラム報告

昨年度の検討（オンラインでの実施、対面で計画しているものについても社会状況を見ながらオンラインでの実施に切り替える対応）をふまえ、短期日本語プログラムは、夏期はオンライン、冬期は当初は対面実施予定だったものをオンラインに切り替えて実施した。オンラインによる実施は日本語教育センターにとって初めてであったことから、第1回、第3回FD委員会でその内容を確認した。

【春学期】

1 プログラム概要

1) 開催期間

2021年度夏期①【オンライン】6月14日(月)～6月23日(水)

2021年度夏期②【オンライン】7月12日(月)～7月21日(水)

2) 開催場所

【オンライン】：Zoom方式により設定

3) コースデザイン

【オンライン（夏期①②）】

①単位数：1単位（1,400分）

＊単位数内訳：日本語科目1単位(1,400分) 50分×28回

4) 開講クラス

【オンライン（夏期①）】

1クラス(入門 Beginner Class)

【オンライン（夏期②）】

2クラス(入門 Beginner Class・初中級 Elementary Class)

2 実施詳細

【オンライン（夏期①）】

1) 参加学生 3名

協定校の区分は2021

年 7 月現在

	大学間協定校	学部間協定校
授業料免除枠 での参加 (2 名)	ギリシャ・アメリカン大学 (GLAP) 1 名 セントトーマス大学 (GLAP) 1 名	
私費での参加 (1 名)	サセックス大学 1 名	

2) 学内の協力

クラス ボランティア	文学部 2 名、経済学部 1 名、観光学部 1 名、社会学部 1 名、 法学部 2 名、異文化コミュニケーション学部 14 名、異文化コ ミュニケーション研究科 1 名 計 22 名
事務	国際センター、教務事務センター、人事部、財務部、メディアセン ター

【オンライン（夏期②）】

1) 参加学生 20 名

協定校の区分は

2021 年 7 月現在

	大学間協定校	学部間協定校
授業料免 除枠 での参加 (2 名)	マードック大学 1 名	国立成功大学（異文化コミュニ ケーション学部）1 名
私費での 参加 (18 名)	香港中文大学 9 名 華東師範大学 4 名 エモリー&ヘンリー大学 (GLAP) 1 名 ギリシャ・アメリカン大学 (GLAP) 1 名 西江大学 1 名 南京大学 1 名 嶺南大学 (GLAP) 1 名	

2) 学内の協力

クラス ボランティア	文学部 2 名、経済学部 1 名、観光学部 3 名、コミュニティ福祉 学部 1 名、社会学部 2 名、法学部 1 名、異文化コミュニケ
---------------	--

	ーション学部 16 名、異文化コミュニケーション研究科 2 名 計 28 名
事務	国際センター、教務事務センター、人事部、財務部、メディアセンター

3 成果

- ・ 本学への留学パターンの多様化の促進
- ・ 協定校とのインバランスの解消、関係強化
- ・ オンラインという新たな形態でのプログラムの実施
- ・ 多様な日本語レベルに対する柔軟な受け入れ態勢
- ・ 本学学生との国際交流の促進

国際センター協力のもとグローバルラウンジ企画と連携し、以下のイベントを行った。

それぞれのイベントの短プロ生と国内学生の参加者数は、以下の図の通り。

イベントの様子は、写真を参照。

【オンライン（夏期①）】

イベント名称	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	合計参加者数 (延べ人数)
Life at Rikkyo University（6月15日実施）	2	8	10
Slices of Japanese daily life（6月21日実施）	3	7	10
参加延べ人数	5	15	20

【オンライン（夏期②）】

イベント名称	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	合計参加者数 (延べ人数)
Wish Upon a Star (Experiencing Japanese star festival)（7月13日実施）	17	11	28
Origami Event and Group Talk（7月15日実施）	15	8	23
Rikkyo Trivia Quiz（7月19日実施）	16	5	21
参加延べ人数	48	24	72

4 今後の課題

- ・ プログラム案内周知、広報の強化（授業料免除枠の有効活用）
- ・ 時差への対応（プログラム開催時間の検討）

- ・立教生への短プロ周知強化（イベント案内等）
- ・イベント実施回数および内容の事前すり合わせ
- ・Zoom ログイン（V-Campus ID 使用）の簡略化
- ・教科書ダウンロード方法の簡略化

5-1 授業（夏季①）

日本語 A クラス（入門）

授業担当者名：神元愛美子、藤田恵、三浦綾乃、長谷川孝子、小森由里
 履修者数：3 名
 使用教材：『まるごと－日本のことばと文化－入門 A1』、『まるごと－日本のことばと文化－初級 1 A2』（国際交流基金）、独自教材

夏期 1 の短期プログラムは、3 名の参加があり、日本語クラスは 1 クラス体制で進めた。初めてのオンライン開講となり、参加者は海外から受講した。また、今後の社会状況に柔軟に対応できるよう、短プロのさまざまなコース設計を準備しておくことを目的に、夏期 1 は、日本語科目のみの約 1 週間のコースとした。

3 名のうち、2 名は日本語学習歴がない学生であり、1 名は初級文型と語彙の学習経験のある学生であった。そのため、クラスの中でレベル差対応を行った。日本語初学者の 2 名に対しては、『まるごと』の入門レベルのテキストを使用して日常会話を学習し、独自教材を用いてひらがなの導入を行った。学習歴のある学生には、追加教材として『まるごと』の初級 1 レベルのテキストと独自教材を用いて、発展練習が行えるようにした。

成果発表では、短プロ生それぞれのレベルに合ったスピーチとし、3 名が短プロで学習した語彙や表現を使いこなし、自信を持って発表している姿が見られた。

オンラインによる短期日本語プログラムであっても、日本人学生との交流の機会を多く取り入れるために、これまでの短プロよりも授業ボランティアとの活動を多く入れるようにした。約 1 週間のコース中に、ほぼ毎日授業ボランティアを招き、自己紹介、インタビュー、会話、ミニ発表、成果発表の発表練習といった活動を行った。初学者の 2 名が約 1 週間とは思えないほどの自然な日本語会話ができるようになっており、これは、日本人学生との活動を多く取り入れたことも大きく影響していると考えられる。日本語学習継続のモチベーションにもつながると思われるため、授業ボランティアとの活動は、今後も積極的に取り入れていきたい。一方で、授業ボランティアとの活動を増やしたことにより、表現の導入と、活動の準備が間に合わない場面もあった。次期の短プロでは、教員との日本語学習時間と、授業ボランティアとの活動の時間のバランスを調整しながら、コース運営をしていきたい。

5-1 授業（夏季②）

日本語 A クラス（入門）

授業担当者名：三浦綾乃、藤田恵、長谷川孝子、小森由里

履修者数：13 名

使用教材：『まるごと－日本のことばと文化－入門 A1』（国際交流基金）、独自教材

日本語 B クラス（初中級）

授業担当者名：神元愛美子、金庭久美子、小森由里

履修者数：7 名

使用教材：『まるごと－日本のことばと文化－初中級 A2/B1』（国際交流基金）、独自教材

夏期 2 の短期プログラムは、20 名の参加があり、日本語クラスは 2 クラス体制で進めた。夏期 1 と同様にオンライン開講とし、日本語科目のみの約 1 週間のコースとした。

A クラスは日本語初学者と初級前半レベル、B クラスは中級から上級レベルのクラス編成となり、両クラスともクラス内に日本語レベルの差があったため、夏期 1 と同様に独自教材による追加課題や、授業ボランティアとの活動を入れるなどして、対応を行った。

成果発表はクラス別に実施し、各学生のレベルに合ったスピーチを行った。どの学生も日本語クラスで学習した表現を活用し、質疑応答までしっかりとした発表を行うことができた。

夏期 2 では、授業ボランティアとの活動回数を調整し、教員との日本語学習と活動準備をしっかりと行ってから、授業ボランティアとの活動に入れるようにした。その結果、短プロ生、ボランティア学生の双方に、活動の目的をより明確に示すことができ、応用練習を行う時間とすることができた。特に、クラスの中で日本語レベルが高めの学生にとっては、授業で学んだ表現と、自身がこれまでに学んできた日本語の両方を活用する機会にもなり、オンラインクラスにおけるレベル差対応を丁寧に行うことができた。また、これまでと同様に日本人学生との交流は、短プロ生の日本語学習継続の動機づけ、立教大学とのつながりの意識強化につながっていることがうかがえ、コース終了までどの学生も意欲的に参加できたことにも影響を与えていると思われる。今後も授業ボランティアとの活動を積極的に取り入れ、学生の本格的な留学、日本語学習の開始につながるようなコースとなるよう改善を進めていきたい。

【秋学期】

1 実施の概要

1) 開催期間

2022 年 1 月 11 日(火)～1 月 28 日(金)

2) 開催場所

【オンライン】：Zoom 方式により設定

3) コースデザイン

【オンライン】

単位数：4 単位（4,400 分）

* 単位数内訳：日本語科目 2 単位(2,900 分)50 分×58 回

日本文化社会講義・フィールドトリップ 2 単位（1,500 分）50 分

×30 回

4) 開講クラス

2 クラス(入門 Beginner Class・初中級 Elementary Class)

2 結果

1) 参加学生 5 名

協定校の区分は 2022

年 1 月現在

	大学間協定校	学部間協定校
授業料免除枠 での参加 (4 名)	マードック大学 3 名	国立成功大学（異文化コミュニケーション学部）1 名
私費での参加 (1 名)	嶺南大学（GLAP）1 名	

2) 学内の協力

学部	観光学部、法学部、コミュニティ福祉学部
学生（クラス ボランティア）	文学部 5 名、社会学部 2 名、法学部 1 名、 異文化コミュニケーション学部 2 名 計 10 名
事務	国際センター、教務事務センター、人事部、財務部、メディアセン ター

3 成果

- ・ 本学への留学パターンの多様化の促進
- ・ 協定校とのインバランスの解消、関係強化
- ・ 3 週間という期間でのオンライン開催という新たな形態でのプログラムの実施
- ・ 多様な日本語レベルに対する柔軟な受け入れ態勢

- ・本学学生との国際交流の促進

前回に引き続き、国際センター協力のもとグローバルラウンジ企画と連携し、以下のイベントを行った。

それぞれのイベントの短プロ生と国内学生の参加者数は、以下の図の通り。

プログラムの様子は、写真を参照。

【オンライン】

イベント名称	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	合計参加者数 (延べ人数)
Fukuwarai Event~Let's Play a Traditional Japanese New Year's Game~ (1月12日実施)	4	7	11
What Study Abroad in Japan is Really Like (1月21日実施)	2	7	9
Japanese Culture Presentation (Convenience Stores) and Small Group Talk (1月24日実施)	2	2	4
参加延べ人数	8	16	24

4 今後の課題

- ・プログラム案内周知、広報の強化（授業料免除枠の有効活用）
- ・時差への対応（プログラム開催時間の検討）
- ・オンラインプログラムの開催期間及びプログラム内容の検討
- ・オンラインイベントの実施回数の検討および内容の事前すり合わせ
- ・立教生への短プロ周知強化（イベント案内等）
- ・担当教員及び立教生への写真撮影についての事前許可取得
- ・短プロ生への事前課題の配布時期についての検討

5 授業

日本語 A クラス（入門）

授業担当者名：三浦綾乃、高嶋幸太、藤田恵、斉藤紀子

履修者数：2名

使用教材：『まるごと－日本のことばと文化－入門 A1』（国際交流基金）、独自教材

日本語 B クラス（初中級）

授業担当者名：神元愛美子、長谷川孝子、金庭久美子

履修者数：3名

使用教材：『まるごと—日本のことばと文化—初中級 A2/B1』（国際交流基金）、独自教材

冬期の短期プログラムは、5名の参加があった。夏期と同じオンライン開講であったが、科目展開は対面実施時と同様に日本語科目と日本文化社会講義の2科目展開で、約3週間のコースとした。

日本語クラスは2クラス体制で進めた。Aクラス2名、Bクラス3名の配置であったが、Aクラスの1名は個人理由により参加の継続が困難となったため、実質1名でコースを進めた。授業はテキストと独自教材で進め、一部のレベルが高めの学生（Bクラス）には、追加の課題を課す等して、対応を行った。また、Aクラスでは学生の希望により、漢字学習を初めて取り入れるようにした。これまで希望制でAクラスも漢字学習を取り入れたことはあったが、スケジュールに組み込み、課題とクイズを実施したことはなかった。結果として、漢字語彙の拡充にもつながったため、Aクラスも学生の日本語レベルによっては、漢字学習を取り入れることを検討したい。

授業ボランティアとの活動は、今回も非常に好評であった。Aクラスの学生には、教師と1対1で学んだ表現を練習する機会となり、Bクラスの学生には、自分のレベルに合った日本語を使う機会となった。自分の趣味の紹介を行う活動では、部屋の中にある実物を見せたり、実演したりする姿が見られ、オンラインクラスならではの活動となったと考えている。

冬期の参加者は時差の影響がほとんどない国からの受講であったが、所属校の授業時間との重なり、起床時間の遅れ、旅行等の理由による遅刻と欠席が、これまでの短プロよりも多く見られた。これらは、対面実施時には想定しづらい理由であり、オンライン短プロの課題として今後も考えていきたい。

日本文化社会講義1クラス

授業担当者名：三浦綾乃、神元愛美子、高嶋幸太、小森由里

履修者数：5名

使用教材：独自教材

2021冬の日本文化社会講義は、初めてのオンライン実施となった。テーマ1「Tourism in Japan」（観光学部韓志昊先生）、テーマ2「Tradition and Transformation of Key Terms in Japanese Social Life」（法学部松田浩一郎先生）、テーマ3「Sport in Japan. Between Traditional Japanese & Western Sports」（コミュニティ福祉学部ライトナー・カトリン先生）の3つのテーマで行われた。オンライン版フィールドトリップはテーマ1はホテル見学、テーマ2はVideo lecture on the modernization of social life in Japan、テーマ3はディスタンス柔道であった

どのテーマも学生が強い関心を寄せ、好評で、事前学習、講義、フィールドトリップ、事後学習、全てにおいて非常に熱心に参加する姿が見られた。この科目は、リアクションペーパー、課題の提出は **google form** を活用し、日本語担当教員と学部教員とが同時に結果を入手できる仕組みにした。この連携フローは合理的で効率がよいので、次年度以降も活用できるといい。

10. 新型コロナウイルス対応まとめ

今年度の新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けての様々な対応は、2020 年度の実績をもとに行うことができたので、概ねスムーズであったが、学生に求める受講方針が課題となった。日本語科目は大学の活動制限レベルに合わせて、レベル 1 は原則対面（未入国など本学で手続きをとりオンライン受講が認められた者のみオンライン）、レベル 2 は対面かオンラインかを各自が判断する、レベル 3 はオンラインという方針としたが、レベル 2 からレベル 1 への移行の対応に苦慮した事例がいくつか出た。学部、研究科ごとの方針の違いによる影響であったと考えている。次年度は、レベル 1 とレベル 2 とで日本語科目の受講形態がどのように変わるかをオリエンテーションなどで周知するとともに、学期開始時にも科目担当者が学生に説明するなどしていきたい。

以下、簡単に主な対応をまとめておく。

(1) 日本語プレイスメントテスト

(A) 正規学部留学生

春秋学期ともオンラインによるインタビューテスト

(B) 特外生 2020 年度と同様

(C) GLAP 2020 年度と同様

(D) BD 研究科生 2020 年度と同様

(E) 新規正規大学院生 2020 年度と同様

(2) 日本語オリエンテーション情報の配信 2020 年度と同様

(3) 科目担当者（兼任講師）とのオンライン授業についての打ち合わせ 2020 年度と同様

(4) 日本語相談室オンライン対応 2020 年度と同様

(4) イベント・インターンシップ科目の対応

(4) -A 春学期

スピーチコンテスト延期、 国際的協働のための国内インターンシップ開講

(4) -B 秋学期

日本語教育センターシンポジウム 10月23日(土) オンラインによる開催

スピーチコンテスト 11月27日(土) オンラインによる開催

(5) 2021年度春学期および秋学期の特外生用科目の履修者数減への対応

2020年度の計画段階で時間割を縮小して計画できたので、履修者ゼロ科目の数を一定程度おさえることができ、大きな混乱はなかった。

(7) 中間・期末テスト体制 2020年度と同様

(8) 短期日本語プログラム

2020年度の計画段階で、オンラインによる実施、対面設計からオンライン実施への移行手順などを入れ込むことができたので、大きな混乱はなく運営することができた。

11. その他の活動

RSP事業に関連した活動として、インドネシア中等教育日本語教師会の依頼に応じて、「JF日本語教育スタンダード A2~B1の学生のための読解指導」というテーマで3回(7月24日、9月25日、11月20日)、ウェビナーによる教師研修を行った。研修会の講師は、数野恵理特任教員、金庭久美子特任教員、藤田恵特任教員が担当し、センター長が企画・統括を担当した。初回の開会にあたり、松井国際化推進機構長が祝辞を述べた。

12. センター員活動報告

池田伸子

著書

1. 『新界標日本語 第3冊 教師用指導書』(編集委員として参加)、復旦大学出版社(印刷中)

研究論文

1. 「「協創力」を育むことを目的としたロールプレイング・ゲームの授業活用可能性」、『日本語・日本語教育』第5号、立教大学日本語教育センター、2022年、39－50頁

講演

1. 「すべての人が“自分らしく”いられる社会にするために ダイバーシティからインクルージョンへ」、2021年度ふれあい塾、宇都宮市東生涯学習センター、2021年10月19日

研究助成

1. 2021.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育質保証を担う評価人材育成：発展的評価を実践できる日本語教師への研修」（研究分担者）（課題番号：21K0063）

丸山千歌

著書

1. 『日本語教育実践入門：日本語の分析から教材・授業の創造まで』（近藤安月子との共著）、東京大学出版会、2021年
2. 『新界標日本語 第3冊 教師用指導書』（楊敬・徐敏民・藤田恵と共同主編）、復旦大学出版社（印刷中）

研究論文

1. 「多声モデル生成法としての複線径路等至性アプローチのための試論」（小澤伊久美との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第5号、立教大学日本語教育センター、2022年、51－68頁

報告

1. 「オンラインによる短期日本語プログラムの授業実践」（藤田恵、金庭久美子との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第5号、立教大学日本語教育センター、2022年、109－124頁

研究発表

1. 「次世代に対応可能な日本語教育のための発展的評価の活用－正規学部留学生向けアカデミック・ジャパニーズのクラスを対象に－」（数野恵理、金庭久美子、藤田恵、嶋原耕一、小林友美、池田伸子との共同ポスター発表）、第30回小出記念日本語教育研究会、オンライン開催、2021年6月26日
2. 「多声モデル生成法としての複線径路等至性アプローチ」（小澤伊久美とのショートプレゼンテーション/研究発表）、母語・継承語・バイリンガル教育2021年度研究大

会、オンライン開催、2021 年 8 月 7 日

3. 「縦断的調査における TEM 的飽和に関する試論」(小澤伊久美・サトウタツヤとの共同によるポスター発表) 2021 年度立命館大学人間科学研究所年次総会ポスターセッション、オンライン開催、2022 年 2 月 13 日

その他

1. 「日本語教育とわたし」、2021 年度第 2 回オンライン公開講座、2021 年 11 月 20 日

研究助成

1. 2020. 4～至現在 科学研究費助成金(基盤研究(C))「『日本とつながって生きる』選択から見える日本語教育の新時代」(研究代表者)(課題番号: 20K00707)
2. 2021. 4～至現在 科学研究費助成金(基盤研究(C))「大学日本語教育質保証を担う評価人材育成: 発展的評価を实践できる日本語教師への研修」(研究分担者)(課題番号: 21K0063)

数野恵理

著書

1. 『新界標日本語 第3冊 教師用指導書』(編集委員として参加)、復旦大学出版会(印刷中)

論文

1. 「日本人大学生が書いたナラティブ作文の評価—日本語ナラティブ作文用の評価項目を用いて—」(坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子との共同執筆)、『日本語／日本語教育研究』12、日本語／日本語教育研究会、ココ出版、2021 年、229-244 頁
2. 「日本語母語話者教師が考えるナラティブ作文の Good Writing—評価の際に重視された項目より—」(影山陽子・トンプソン美恵子・坪根由香里との共同執筆)、『日本語・日本語教育』第5号、立教大学日本語教育センター、2022 年、1-22 頁

報告

1. 「プロンプトによるナラティブ作文の評価の違い—高得点を得た『よいナラティブ』の提示—」(影山陽子・坪根由香里・トンプソン美恵子との共同執筆)、『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』13、アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会、2021 年、27-35 頁

研究発表

1. 「次世代に対応可能な日本語教育のための発展的評価の活用—正規学部留学生向けアカ

デミック・ジャパニーズのクラスを対象に一」(金庭久美子・藤田恵・嶋原耕一・小林友美・丸山千歌・池田伸子との共同ポスター発表)、第30回小出記念日本語教育研究会、オンライン開催、2021年6月26日

2. 「日本語学習者が書いたナラティブ作文における good writing—日本語母語話者教師は評価時にどのような項目を重視するのか—」(影山陽子・坪根由香里・トンプソン美恵子との共同発表)、第57回日本語教育方法研究会、オンライン開催、2021年9月12日
3. 「日本語母語話者教師・非母語話者教師はナラティブ作文評価でどのような項目を重視するか—重視度調査と上位作文に対するコメントの分析を通して—」(トンプソン美恵子・影山陽子・坪根由香里との共同発表)、第55回アカデミック・ジャパニーズ・グループ定例研究会、オンライン開催、2022年2月20日
4. 「オンライン授業におけるグループ発表の試み—発展的評価による科目改善と再評価—」第58回日本語教育研究会、オンライン開催、2022年3月15日
5. 「東南アジアの大学で教える日本語教師によるナラティブ作文の評価—総合評価と項目別評価の結果から—」(坪根由香里・影山陽子・トンプソン恵美子との共同発表)タイ国日本語教育研究会第34回年次セミナー、オンライン開催、2022年3月19日

講演

1. 「International Webinar Series JF 日本語スタンダード A2～B1 の学生のための読解指導 第1回読み物を選ぼう・使おう」、2021年度インドネシア中学校・高校日本語教師会、オンライン開催、2021年7月24日

研究助成

1. 2019.4～至現在 科学研究費助成金(基盤研究(B))「日本語ライティングにおけるナラティブの Good Writing 探究と評価法の開発」(研究分担者)(課題番号: 19H01274)

金庭久美子

著書

1. 『リアルな会話で学ぶにほんご初中級リスニング Alive』(山森理恵・奥野由紀子・鎌田修との共著)、ジャパントイムズ、2021年
2. 『新界標日本語 第3冊 教師用指導書』(編集委員として参加)、復旦大学出版会(印刷中)

研究論文

1. 「ドイツにおける日本語学習者のメール文における配慮表現の使用状況—問い合わせメールと断りのメールを用いて—」、『日本語・日本語教育』第5号、立教大学日本語教育

センター、2022 年、23－38 頁

2. 「発信メールと返信メールに現れる「なら」の使用について」(金蘭美との共著)、『日本語教育方法研究会誌』Vol. 28-1、日本語教育方法研究会、2021 年、22-23 頁
3. 「ドイツ語母語話者のメール文における配慮表現の使用」、『ヨーロッパ日本語教育報告・発表論文集 第 24 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム』、ヨーロッパ日本語教師会、2022 年(査読有・印刷中)

報告

1. 「オンラインによる短期日本語プログラムの授業実践」(藤田恵、丸山千歌との共同執筆)、『日本語・日本語教育』第 5 号、立教大学日本語教育センター、2022 年、109－124 頁

研究発表

1. 「24 種類のメール文タスクから見る「テシマウ」の使用状況」(金蘭美との共同発表)、口頭発表、韓国日本語教育學會 2021 年度第 39 回国際学術大会、オンライン開催、2021 年 4 月 24 日
2. 「次世代に対応可能な日本語教育のための発展的評価の活用ー正規学部留学生向けアカデミック・ジャパニーズのクラスを対象にー」(数野恵理・藤田恵・嶋原耕一・小林友美・丸山千歌・池田伸子との共同ポスター発表)、第 30 回小出記念日本語教育研究会、オンライン開催、2021 年 6 月 26 日
3. 「ドイツ語母語話者のメール文における配慮表現の使用」、ポスター発表、第 24 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム (16th EAJIS International Conference 2020)、オンライン開催、2021 年 8 月 27 日
4. 「メール文に見られる用件の切り出し方ータスクの種類および読み手配慮に焦点を当ててー」(金蘭美、金玄珠との共同発表)、口頭発表、韓国日本語教育學會 2021 年度第 40 回国際学術大会、オンライン開催、2021 年 12 月 4 日
5. 「文脈の文型化と文型の再文脈化ー自然発話(雑談)の教材化を例にー」(鎌田修、山森理恵、奥野由紀子との共同発表)、口頭発表、日本語プロフィシエンシー研究学会 2021 年度第 1 回研究例会、オンライン開催、2022 年 1 月 8 日

講演

1. 「International Webinar Series JF 日本語スタンダード A2～B1 の学生のための読解指導 第 2 回オンラインツールを知ろう・活用しよう」2021 年度インドネシア中学校・高校日本語教師会、オンライン開催、2021 年 9 月 25 日

研究助成

1. 2019. 4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「初級から学べる段階別学習型作文支援システムの構築」（研究分担者）（課題番号：19K00734）

藤田恵

著書

1. 『新界標日本語 第3冊 教師用指導書』（楊敬・徐敏民・丸山千歌と共同主編）、復旦大学出版社（印刷中）

報告

1. 「オンラインによる短期日本語プログラムの授業実践」（金庭久美子、丸山千歌との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第5号、立教大学日本語教育センター、2022年、109－124頁

発表

1. 「次世代に対応可能な日本語教育のための発展的評価の活用ー正規学部留学生向けアカデミック・ジャパニーズのクラスを対象にー」（数野恵理、金庭久美子、嶋原耕一、小林友美、丸山千歌、池田伸子との共同ポスター発表）、第30回小出記念日本語教育研究会、オンライン開催、2021年6月26日
2. 「視覚に障害がある日本語学習者にとっての「手書き」の意義ー学習者自身が感じる困難さと書字の関わりに関する一考察ー」（河住有希子、中西溪との共同発表）、第58回日本語教育方法研究会、オンライン開催、2022年3月15日

講演

1. 「言語教育におけるインクルージョンを考える」研究交流会、オンライン開催、2021年8月25日
<http://incl4lang.html.xdomain.jp/meeting.html#d2021-08-25>
2. 「International Webinar Series JF スタンダード A2～B1 の学生のための読解指導 第3回活動を考えよう・やってみよう」、2021年度インドネシア中学校・高校日本語教師会、オンライン開催、2021年11月20日

研究助成

1. 2021. 4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「グローバル化時代における視覚特別支援教育と日本語教育の有機的連携に向けた基盤構築」（研究分担者）（課題番号：21K02727）

任ジェヒ

研究論文

1. 「韓国語を母語とする日本語学習者の読解における推測ストラテジー」(野田尚史との共同執筆)、『日本語学研究』第70巻、韓国日本語学会、2021年、39-57頁
2. 「コミュニケーション行為の成立を可能にする【前提】とは何か」、『待遇コミュニケーション研究』19号、待遇コミュニケーション学会、2022年(印刷中)

報告

1. 「日研の専門家養成教育は実践にどう活かされたのかー留学生を対象とした日本語教育の実践例からー (【特集】早稲田の日本語教育専門家養成教育を振り返る)」、『早稲田日本語教育学』第31号、早稲田大学大学院日本語教育研究科、2021年、21-26頁
2. 「日本語学習者は雑談をどのように理解するかー話題を理解する過程に注目してー」『日本語・日本語教育』第5号、立教大学日本語教育センター、2022年、153-169頁

研究発表

1. 「待遇コミュニケーションにおける理論的枠組みを考える」(アドゥアヨム・アヘゴ希佳子、李址遠、徳間晴美、蒲谷宏との共同発表)、待遇コミュニケーション学会2021年秋季大会(第36回)、オンライン開催、2021年10月23日
2. 「韓国語を母語とする日本語学習者の理解過程からみる母語話者の日本語文法」、NINJAL(国語研究所)共同研究発表会・シンポジウム2021年度「日本語文法研究のフロンティアー母語話者の日本語と学習者の日本語の対照研究を中心にー」、オンライン開催、2022年2月26日

研究助成

1. 2020.4～至現在 科学研究費助成金(若手研究)「日本語学習者の多様な言語生活に対応したバリエーション教育開発のための基礎研究」(研究代表者)(課題番号:20K13092)

その他

1. ウェブ版日本語読解教材「日本語を読みたい!」「通商白書」シリーズ
「経常収支や貿易収支の推移を読みとる」「経常収支や貿易収支の推移の原因を読みとる」
<http://www.nihongo-tai.com/japanese/> (2022年3月公開)

鹿目葉子

研究論文

1. 「ライティング活動における協働学習に対する学習者の意識ータイの大学で学ぶ日本語学習者を対象とした調査からー」(横田恭一、清水慶子との共同執筆)、『Japanese Studies Journal』第38号、タマサート大学、2021年、131-145頁

2. 「中東地域の日本語学習者および留学生に向けた授業の活動案ー社会人基礎力の「チームで働く力」に焦点をあててー」(清水慶子との共同執筆)、『一般財団法人昭和経済研究所アラブ調査室9月号』、一般財団法人昭和経済研究所アラブ調査室、2021年、
https://arabstudies.jp/pdf/2021-08_04.pdf
3. 「タイの潜在的日本語人材の育成に資する大学語学センターへの一提案ー中等教育と高等教育の橋渡しとしてー」(横田恭一、大橋真由美との共同執筆)、『日本語・日本語教育』第5号、立教大学日本語教育センター、2022年、89ー108頁

報告

1. 「ビジネス日本語授業におけるSECIモデルの実践報告ータイ人学生の協働による学びからー」(山本由美子、榎原実香、大橋真由美、ムニンタラウオン・シリワンとの共同執筆)、『タイ日研究ネットワーク Thailand 研究論集 2022年』、タイ日研究ネットワーク Thailand、2022年(印刷中)

研究発表

1. 「タイ・日本における対話を重視したビジネス日本語教育の実践:日本の企業を知る活動を通して」(榎原実香、山本由美子、大橋真由美、ムニンタラウオン・シリワンとの共同発表) 2021 年度タイ国日本語教育研究会 第 34 回年次セミナー、オンライン開催、2022 年 3 月 19 日

小林友美

著書

1. 『新界標日本語 第3冊 教師用指導書』(編集委員として参加)、復旦大学出版会(印刷中)

研究発表

1. 「次世代に対応可能な日本語教育のための発展的評価の活用ー正規学部留学生向けアカデミック・ジャパニーズのクラスを対象にー」(数野恵理・金庭久美子・藤田恵・嶋原耕一・丸山千歌・池田伸子との共同ポスター発表)、第 30 回小出記念日本語教育研究会、オンライン開催、2021 年 6 月 26 日

研究助成

1. 2020.4～至現在 科学研究費助成金(若手研究)「相互作用を意識した会話教育のための教材開発」(研究代表者)(課題番号:20K13089)

小松満帆

報告

1. 「フランス高等教育機関での演劇アトリエの試みーインクルーシブ活動の視点からー」、『日本語・日本語教育』第5号、立教大学日本語教育センター、2022年、125ー138頁

研究発表

1. 「初中級学習者の漢字習得における書き練習の効果」(西村遥香、竹村亜紀子、ゴウ・アモリ、宮内優、中村弥生との共同口頭発表)、第 17 回フランス日本語教師会シンポジウム、オンライン開催、2021 年 6 月 12 日

13. 2021 年度 F D 記録

(1) 担当者連絡会など

①2021 年度 FD 委員会 (2021 年 7 月 16 日、2021 年 9 月 2 日、2022 年 2 月 18 日、2022 年 2 月 28 日、2022 年 3 月 3 日 計 5 回)

2021 年度の FD 計画に沿って計画的に進めた。活動の詳細は以下の通りである。

- a. 2021 年 7 月 16 日 (金) 実務委員会終了後〔場所〕オンライン〔参加者数〕教員 10 名、事務局 2 名〔議題〕2021 年度 FD 課題 (2021 年度夏季オンライン短期日本語プログラムおよび NEXUS 日本語教材開発)
- b. 2021 年 9 月 2 日 9:00-16:00〔場所〕オンライン〔参加者数〕32 名 (センター教員、兼任講師、事務局)〔議題〕日本語教育科目運営について、各科目の振り返りおよび引き継ぎ、個人情報の取り扱い注意ほか
- c. 2021 年 2 月 18 日 (金) 実務委員会終了後〔場所〕オンライン〔参加者数〕8 名、事務局 2 名〔議題〕2021 年度 FD 課題 (2021 年度冬季オンライン短期プログラム実施報告、NEXUS プログラム教材開発、日本語相談室の拡充に向けた課題の検討)、来年度の FD 活動の課題ほか
- d. 2022 年 2 月 28 日 (火) 9:00-16:00〔場所〕オンライン〔参加者数〕30 名 (センター教員、兼任講師、事務局)〔議題〕日本語教育科目運営について、各科目の振り返りおよび引き継ぎ、個人情報の取り扱い注意ほか
- e. 2021 年 3 月 3 日 (木) 10:00-15:00〔場所〕オンライン〔参加者数〕(センター教員 8 名)〔議題〕(研修) 評価的思考(Evaluative thinking)とタイムリーなフィードバック

(2) 短期日本語プログラムの運営についての検討

短期日本語プログラムはコロナ禍の影響を受け、2021年度はオンラインによる実施を試行する計画だったため、本課題は、主に第1回、第3回FD委員会で扱った。第1回FDでは、1週間の日本語プログラムにおいて、テキストのe-bookの使用、学生ボランティアの活用などの工夫が紹介されるとともに、ボランティアに参加した日本人学生も、どのような学びを得たかについての評価の必要性が確認された。

また第3回FD委員会では、対面時と同じ期間（3週間）で、学部教員の協力を得た日本文化社会講義を含むプログラムの実施が報告された。具体的には2019年度までの対面実施と今年度のオンライン実施を比較した上で、オンラインでも体験型の授業が実現できたことが共有され、活発な意見交換が行われた。

（３）日本語科目のさらなる改善と開発

本課題について、2021年度はNEXUSプログラムのための教材開発と取り上げた。第1回、第3回で、2名ずつ、教材開発の進捗報告と意見交換が行われた。どちらの回も活発な意見交換を通して、NEXUSプログラム生向けの集中日本語クラスの狙い、「NEXUS 日本語Ⅰ（専門の日本語）」の科目のコンセプトについてのセンター内での共有が図られた。

その他、第3回FD委員会では、2022年度から開始する日本語相談室拡充プロジェクトを取り上げ、進捗報告と意見交換を行った。こちらについても、活発な意見交換を通じて、日本語相談室拡充プロジェクトの狙いと意義が、センター内で共有された。

第5回FD委員会では、2022年度の日本語教育センター事業の一つであるプログラム評価についてのワークショップを行った。

（４）2021年度の学生による評価アンケート結果（特別外国人学生対象J0～J7）

日本語教育センターでは、特別外国人学生用日本語科目について、J0からJ7レベルの日本語科目を履修したプログラム修了予定学生（帰国予定学生）を対象に日本語プログラムに関するアンケートを実施している。国際センターの協力によりウェブによるアンケートを実施し、春学期1名（渡航型特外生）、秋学期（集計中）から回答を得た。

質問内容は以下の通りで、自由記述以外は、5：はい 4：まあそうである 3：どちらともいえない 2：あまりそうでない 1：いいえ の5段階の選択式で回答を得た。

- 1 以前より日本語を聞いて理解できるようになった。
I can listen and understand Japanese better than before.
- 2 以前より日本語を話すことができるようになった。
I can speak Japanese better than before.
- 3 以前より日本語を読んで理解できるようになった。

I can read and understand Japanese better than before.

- 4 以前より日本語で書く力が伸びた。

I can write Japanese compositions (or reports) better than before.

- 5 以前より多くの日本語の単語を使えるようになった。

I expanded my Japanese vocabulary, and use it in my spoken/ written Japanese.

- 6 以前より多くの文型を使えるようになった。

I can speak/write Japanese using different sentence patterns.

- 7 日本語で発表したりディスカッションをしたりする力が伸びた。

My ability to discuss and give a presentation in Japanese improved.

- 8 日本語で発表したりディスカッションをしたりする自信がついた。

My confidence to discuss and give a presentation in Japanese increased.

- 9 宿題は日本語の勉強の役に立った。

The homework helped me to learn Japanese.

- 10 日本語の授業を通して、日本の文化や社会について考えるようになった。

The Japanese class's activities help me think about Japanese social and cultural issues.

- 11 教師のクラスでの学生への説明や指示は明確だった。

My teachers gave clear instructions and explanations in class.

- 12 日本語で話す機会が十分にあった。

I had enough time to speak in Japanese during each class.

- 13 立教の日本語科目数に満足している。

I am happy with the variation of the Japanese classes of Rikkyo University.

- 14 1クラスの学生の人数は適当だった。

The number of students per Japanese class was appropriate.

- 15 立教の日本語プログラムに満足している。

Overall, I am happy with the Japanese course of Rikkyo University.

自由記述

立教の日本語プログラムでいいと思った点があれば書いてください。

Please write freely about the Japanese course of Rikkyo University, especially the ways in which it was good.

立教の日本語プログラムで改善すべきだと思った点があれば書いてください。

Please write freely about the Japanese course of Rikkyo University, especially the ways in which it was not good, and any suggestions for improvement.

アンケートに対する回答者数 137 名、回収率 88.4%で、結果は以下の通りとなった。

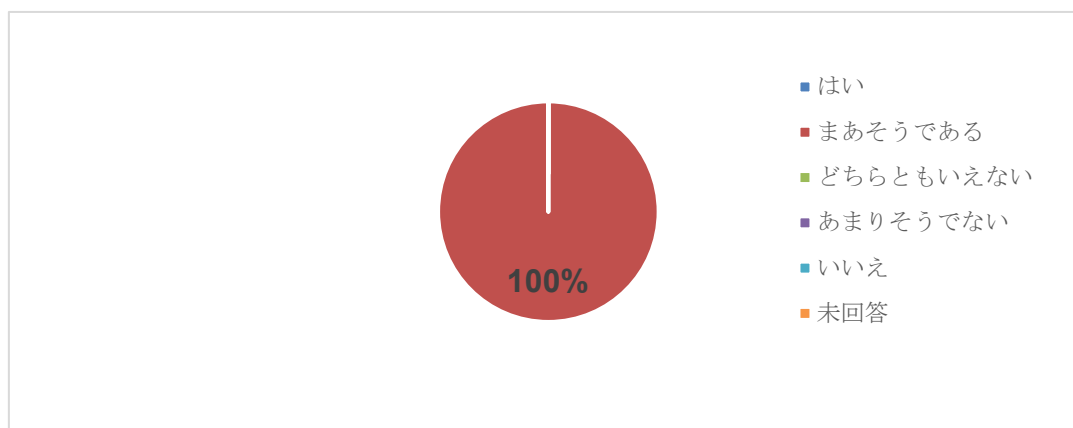
春学期は、4 技能の向上、語彙力の向上、書く力の向上、教師のインストラクション、クラス人数の適正さ、科目数、全体的な満足度などに対する評価が非常に高い。ディスカッションをしたりする力、それに対する自信、日本の文化社会への理解について考えるようにな

ったかについての評価はやや高い。

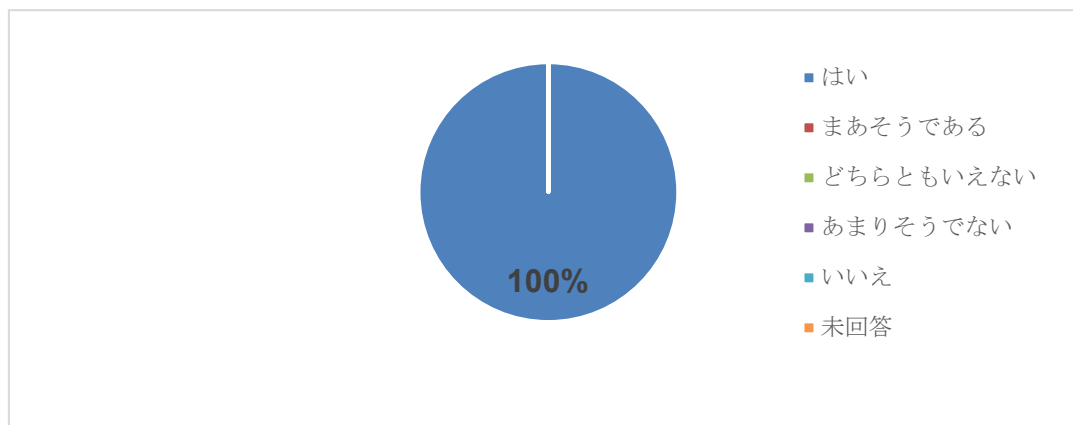
自由記述では、教師の対応やインタラクティブな授業運営、教師の専門性、日本語による日本語クラスの展開科目数、授業の構成などについて具体的で肯定的な評価があった。一方で、読解教材に表れる語彙の多さ、宿題の量が多い、小テストが多いなどのコメントがあった。

【2021 年度春学期プログラム修了予定学生アンケートの結果の内訳】（数値は%）

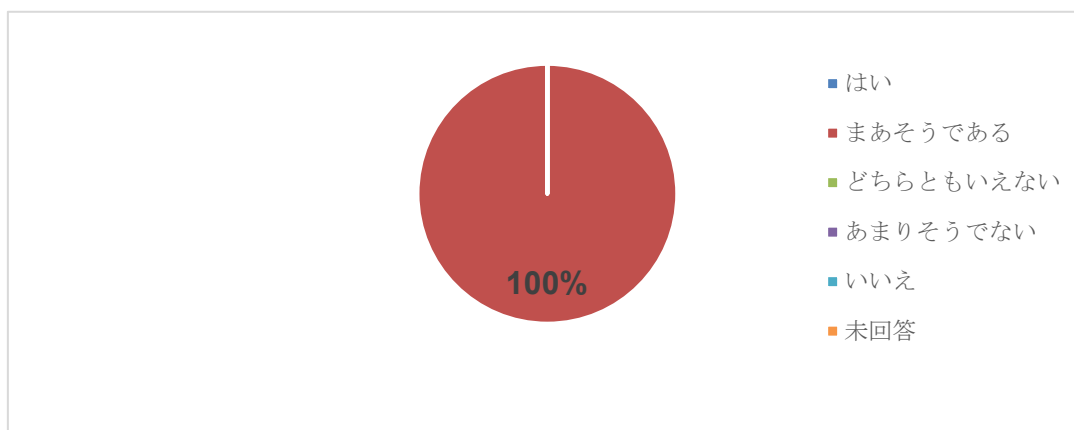
1. 以前より日本語を聞いて理解できるようになりましたか？



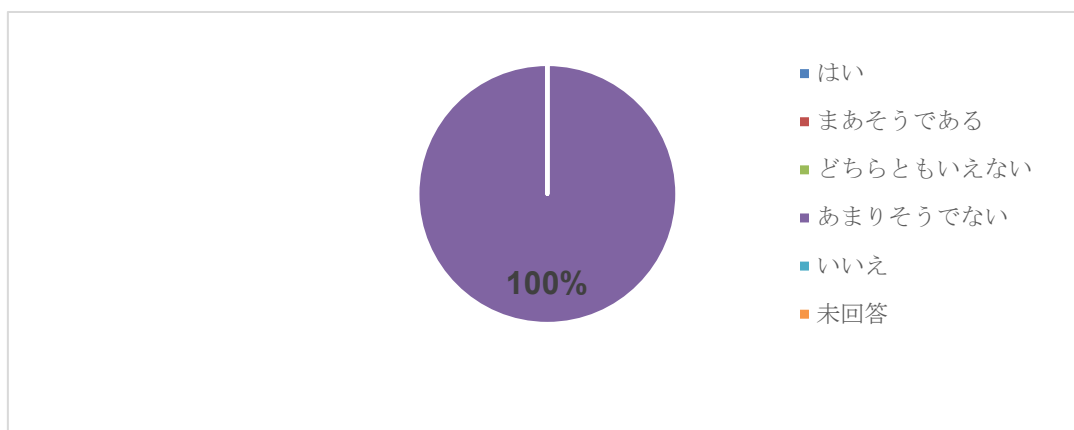
2. 以前より日本語を話すことができるようになりましたか？



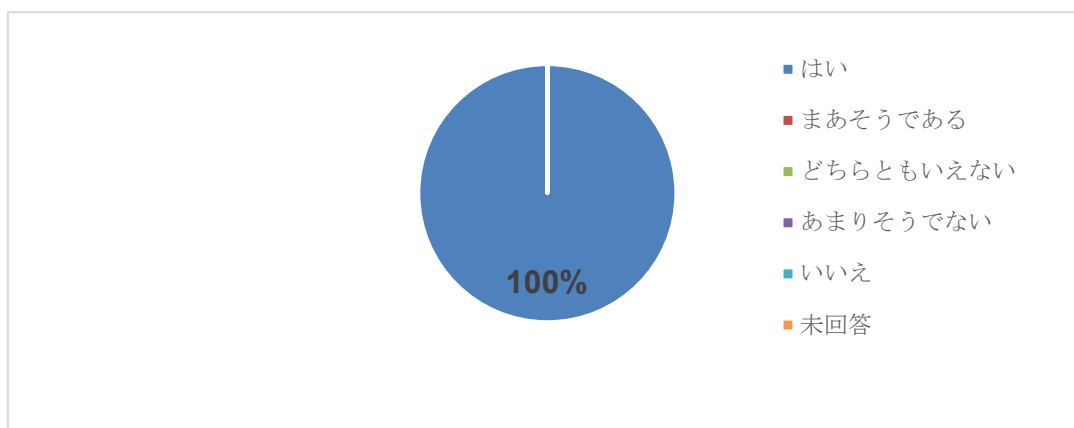
3. 以前より日本語を読んで理解できるようになりましたか？



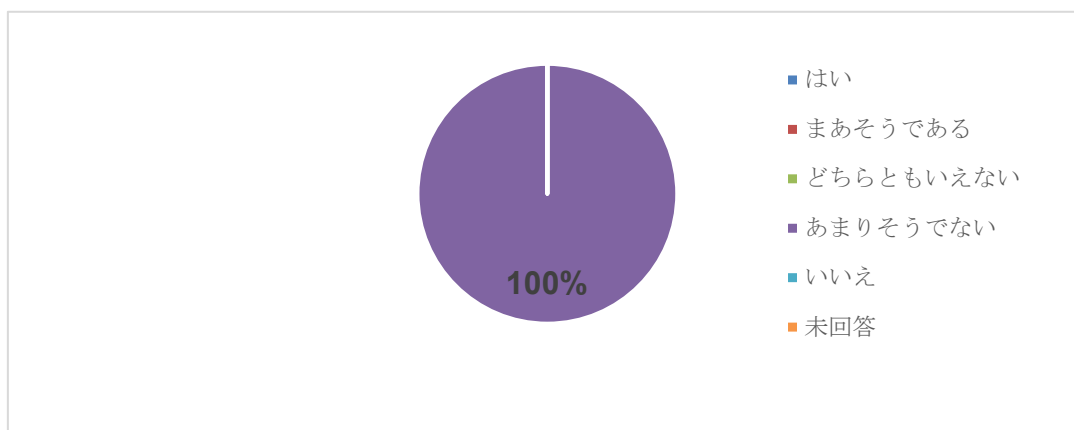
4. 以前より日本語で書く力が伸びましたか？



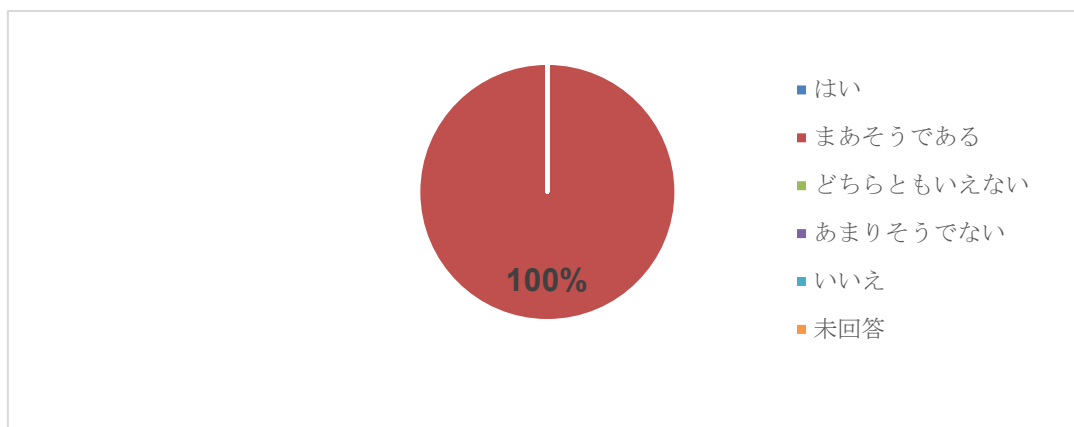
5. 以前より多くの日本語の単語を使えるようになりましたか？



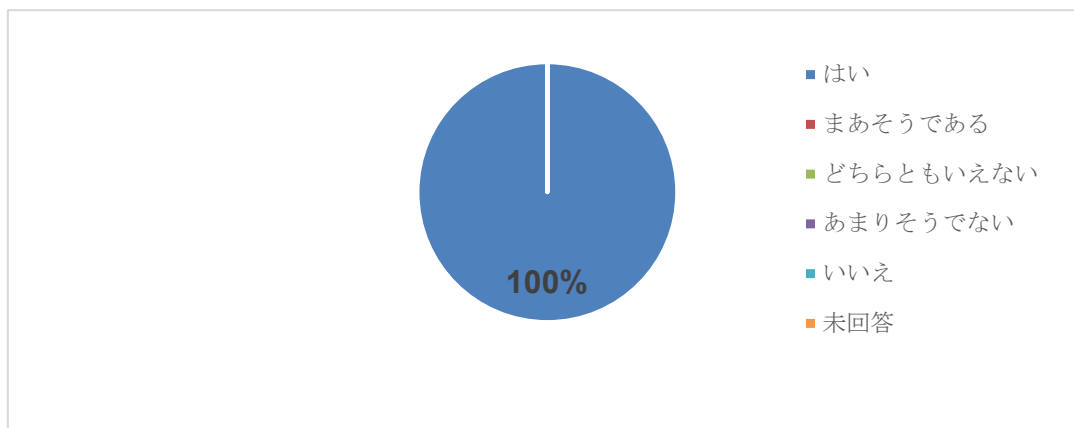
6. 以前より多くの文型を使えるようになりましたか？



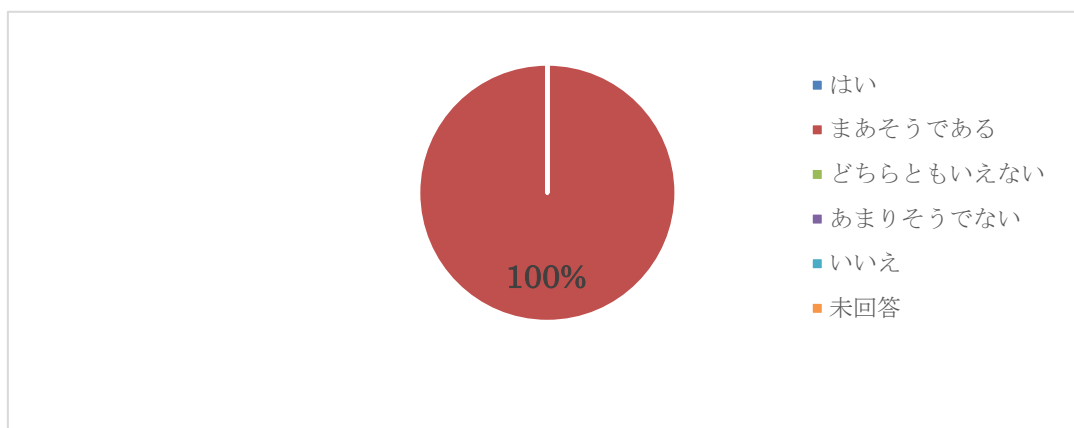
7. 日本語で発表したりディスカッションをしたりする力が伸びましたか？



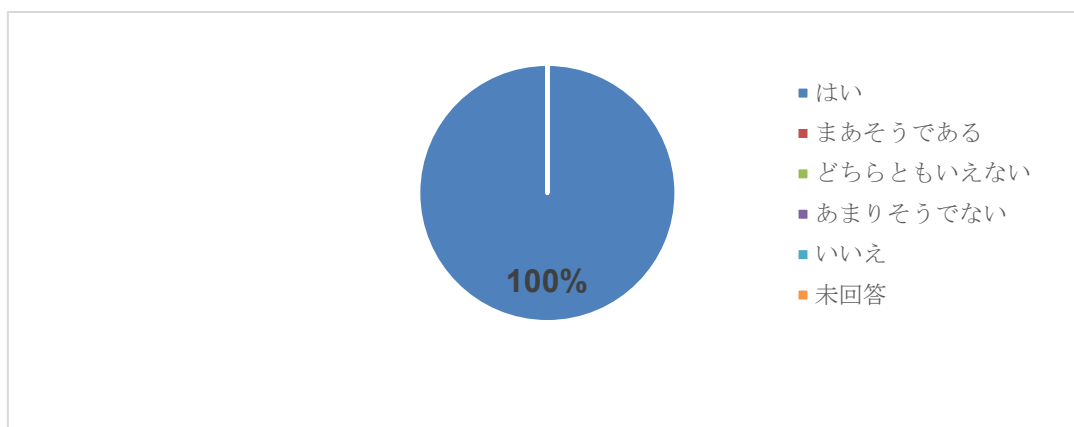
8. 日本語で発表したりディスカッションをしたりする自信ができましたか？



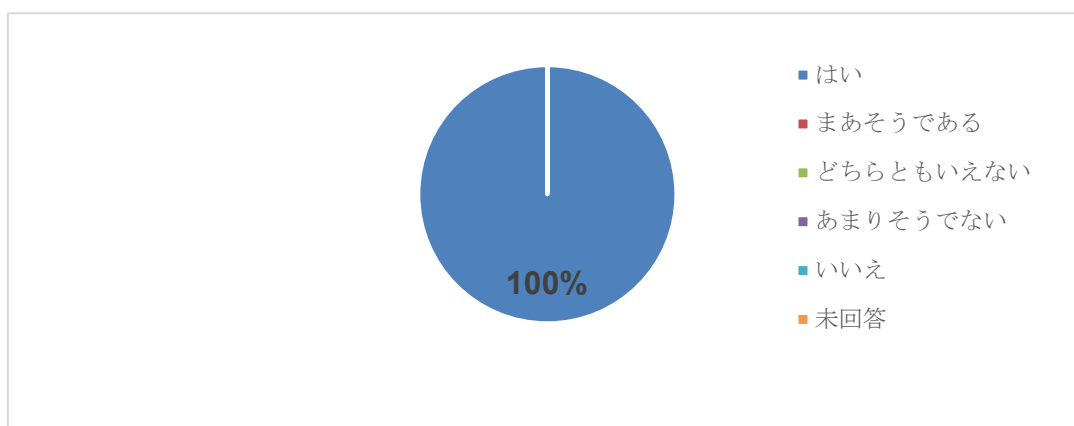
9. 宿題は日本語の勉強の役に立ちましたか？



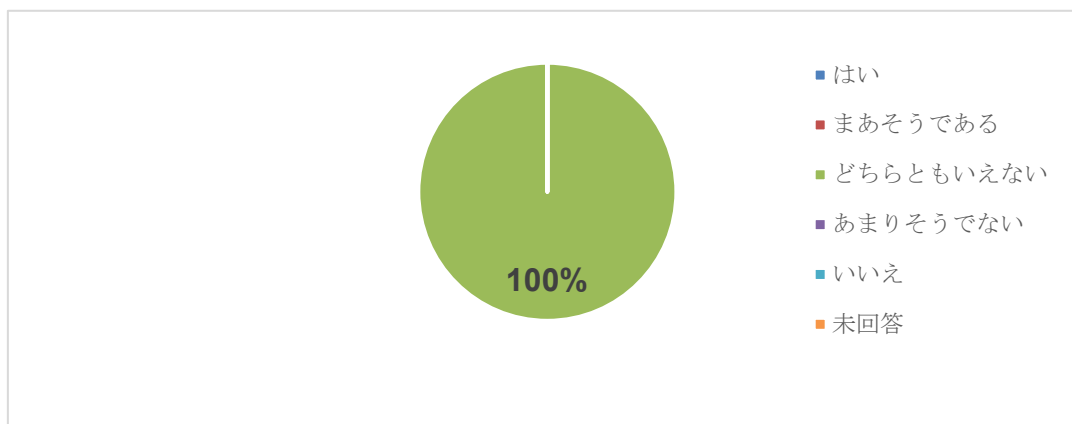
10. 日本語の授業を通して、日本の文化や社会について考えるようになりましたか？



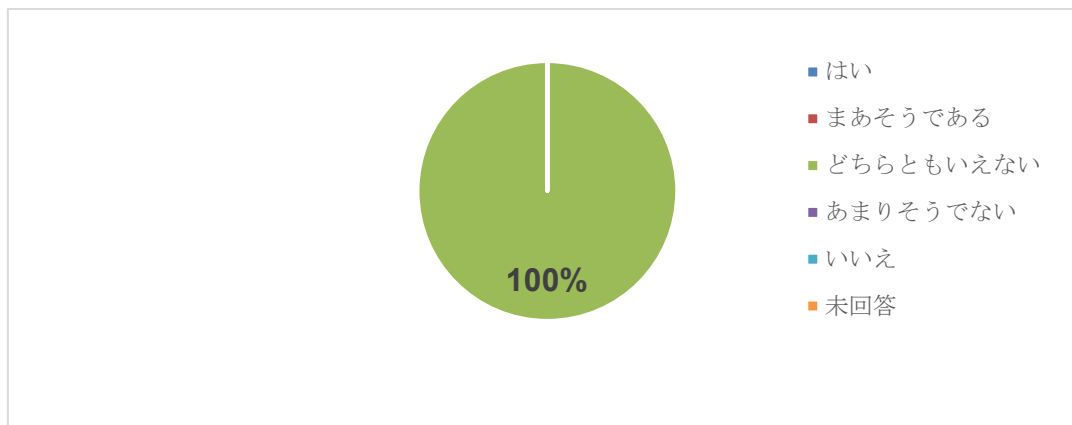
11. 教師のクラスでの学生への説明や指示は明確でしたか？



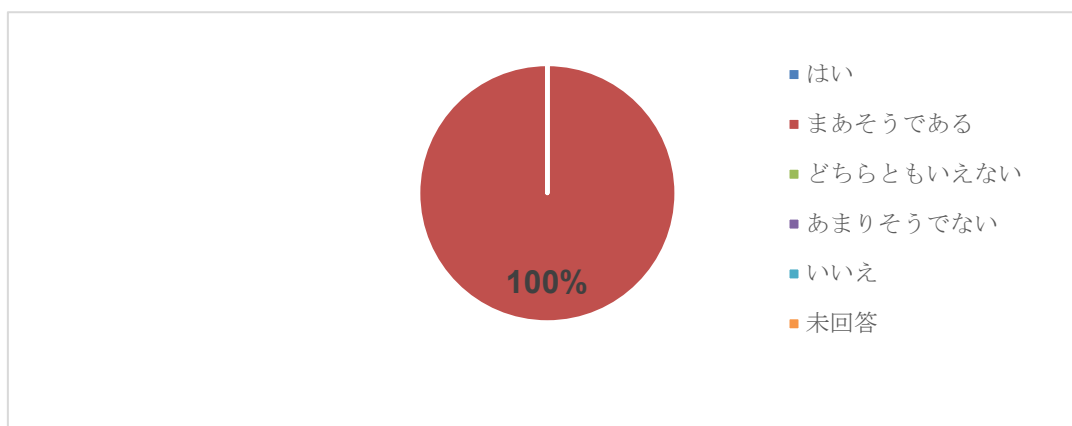
12. 日本語で話す機会が十分にありましたか？



13. 立教の日本語科目数に満足していますか？

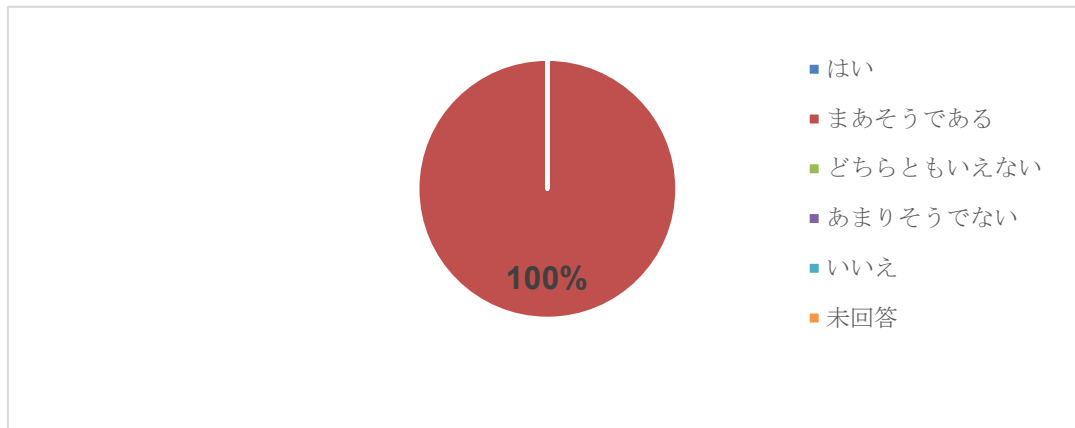


14. 1クラスの学生の人数は適当ですか？



S

15. 立教の日本語プログラムに満足していますか？



【2021 年度秋学期プログラム修了予定学生アンケートの結果】

集計中

(5) 2021 年度の学生による授業評価アンケート結果（全カリ言語 B、自由科目）

2021 年度より、全カリ言語 B、自由科目の授業評価アンケートは実施、FD、結果の公開などのすべてを大学教育開発センターが実施することになった。。

(6) 2021 年度の課題と計画

課題 1 NEXUS 日本語「専門の日本語」

2022 年秋学期より開始する RSP 事業用の集中日本語クラス開発のうち、特に「NEXUS 日本語 I（専門の日本語）」について取り上げる。

課題 2 日本語相談室拡充プロジェクト

本学の TGU の展開に伴う留学生増に合わせて、2022 年度より日本語相談室の相談スタッフとして学生アルバイトを活用する。2022 年度はその初年度となるので、FD 委員会で集中的に取り上げ、運営を軌道に乗せていきたい。

2021 年度 日本語教育センター運営体制

運営会議

センター長	：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長	：韓 志昊	(センター長指名による、観光学部教授)
運営委員	：井川 充雄	(全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、社会学部教授)
運営委員	：杜 国慶	(観光学部教授)
運営委員	：松田 宏一郎	(法学部教授)

実務委員会

センター長	：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長	：韓 志昊	(観光学部准教授)
センター員	：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
センター員	：金庭 久美子	(特任准教授)
センター員	：藤田 恵	(特任准教授)
センター員	：数野 恵理	(特任准教授)
センター員	：小林 友美	(教育講師)
センター員	：任 ジェヒ	(教育講師)
センター員	：小松 満帆	(教育講師)
センター員	：鹿目 葉子	(教育講師)
事務局	：吉田 友子	
事務局	：鈴木 洋介	
事務局	：澤野 礼奈	
事務局	：宮本 杏子	

兼任講師

井上 玲子	谷 啓子
神元 愛美子	富倉 教子
川端 芳子	長島 明子
小森 由里	長谷川 孝子
斉藤 紀子	東平 福美
佐々木 藍子	開 めぐみ
沢野 美由紀	平山 紫帆
高嶋 幸太	三浦 綾乃
武田 聡子	山内 薫

森井 あずさ

2021 年度日本語教育センター会議開催記録

月	日	
4	9	第 1 回実務委員会
	14	第 1 回運営委員会
5	14	第 2 回実務委員会
	19	第 2 回運営委員会
6	18	第 3 回実務委員会
	23	第 3 回運営委員会
7	16	第 4 回実務委員会
	21	第 4 回運営委員会
9	24	第 5 回実務委員会
	29	第 5 回運営委員会
	5	第 6 回実務委員会
11	10	第 6 回運営委員会
	3	第 7 回実務委員会
12	8	第 7 回運営委員会
1	28	第 8 回実務委員会
2	18	第 9 回実務委員会
3	2	第 9 回運営委員会

実務委員会：センター長、副センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師、センター長指名教員）、事務局

運営委員会：センター長、副センター長、全学共通カリキュラム運営センターコア会議からの選出委員、国際センター長・副センター長からの選出委員、センター員（センター長指名）日本語担当専任教員（陪席）、事務局（陪席）

2021 年度日本語教育センター活動報告
CJLE Program & Activity Reports (2021)

2022 年 3 月発行

編集兼発行者	日本語教育センター
発行責任者	丸山千歌
発行所	立教大学日本語教育センター 〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 Tel: 03-3985-4202